

—郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

ほん じょう ちょう
本庄町遺跡



1991. 3

兵庫県教育委員会

例　　言

- 1、本書は兵庫県神戸市東灘区本庄町深江字札場通1—20所在の「本庄町遺跡」の発掘調査報告書である。また、同東灘区西岡本1丁目20~26所在の「西岡本1丁目遺跡」の発掘調査報告も併せて掲載している。
- 2、両遺跡の発掘調査は郵政省近畿郵政局の宿舎新築に伴うもので、同近畿郵政局の依頼を受け、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課・埋蔵文化財調査事務所が実施したものである。「西岡本1丁目遺跡」の発掘調査は、昭和60年4月23日~25日に同埋蔵文化財調査事務所、深井明比古 別府洋二が担当した。また、「本庄町遺跡」の発掘調査は、昭和61年5月6日~6月24日にかけて同埋蔵文化財調査事務所 岡田幸一、別府洋二、中川涉が担当した。整理作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行い、発掘担当者及び同整理普及課岡崎正雄が担当した。また、金属器の保存処理は加古千恵子が実施した。
- 3、本報告書の執筆分担は下記の通りである。
 - 第1章第1節、第2章、第3章第1・2・3・4節、第4章・・・別府
 - 第1章第2節、第3章第1・2・3・4節、第4章・・・中川
 - 第2章第3節、第3章第4節、第4章・・・岡田
 - なお、第3章第5節は立命館大学 高橋 学氏に、
 - 第3章第6節はパリノ・サーヴェイ株式会社に、
 - 第3章第7節は名古屋大学 渡辺 誠氏に、
 - 第3章第8節は京都大学名誉教授 烏地 謙氏 及び京都大学木材研究所 林 昭三氏に執筆をお願いした。
- 4、また原稿を戴いた以上の方々のほかに、本報告書作成にあたって、以下の方々のご協力・ご教授を受けた。記して謝意を表する。
 - 神戸市教育委員会 奥田哲通氏、神戸市立博物館 喜谷美宣氏
 - 財團法人古代學協會（京都文化博物館）片岡 幸氏、南 博史氏
 - 京都大学 千葉 豊氏
- 5、本書で使用した挿図のうち、第1図は国土地理院発行1/25.000を、また第2・6図は神戸市発行 1/2,500「本山、芦屋駅、住吉、青木、芦屋浜」を使用した。
- 6、本庄町遺跡で使用した標高は神戸市測量基準三等多角点公共No.113 72103から移設した。
- 7、調査記録・出土遺物は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて保管する。
- 8、本報告書の編集は別府が主として行った。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査体制	1
第2節	遺跡をとりまく環境	2
第2章	西岡本1丁目遺跡の調査	
第1節	調査の概要	3
第2節	遺構	3
第3節	遺物	5
第4節	小結	5
第3章	本庄町遺跡の調査	
第1節	調査の経過	7
第2節	調査の概要	10
第3節	遺構について	20
第4節	遺物について	22
第5節	六甲山南麓の地形環境分析	39
第6節	土壤中の微化石分析	49
第7節	神戸市本庄町遺跡出土の植物遺体	
		62
第8節	本庄町遺跡土壤出土木片の樹種	66
第4章	まとめ	68

図版目次

図版1	西岡本1丁目遺跡 遺跡の位置
図版2	西岡本1丁目遺跡 全景 溝
図版3	西岡本1丁目遺跡 獣足跡 遺物
図版4	本庄町遺跡 遺跡の位置 第1検出面
図版5	本庄町遺跡 第3・4検出面
図版6	本庄町遺跡 第4検出面
図版7	本庄町遺跡 第5検出面
図版8	本庄町遺跡 第5検出面土壤
図版9	本庄町遺跡 第5検出面上層
図版10	本庄町遺跡 第5検出面土壤
図版11	本庄町遺跡 第5検出面遺物・その他
図版12	本庄町遺跡 遺物1・2
図版13	本庄町遺跡 遺物3・4
図版14	本庄町遺跡 遺物5・6
図版15	本庄町遺跡 遺物7・8
図版16	本庄町遺跡 遺物9・10
図版17	本庄町遺跡 遺物11・12
図版18	本庄町遺跡 遺物13・14
図版19	本庄町遺跡 遺物15・16
図版20	本庄町遺跡 珊瑚・花粉1
図版21	本庄町遺跡 花粉2・植物珪酸体
図版22	本庄町遺跡 植物遺体
図版23	本庄町遺跡 樹種

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	2	第33図 西壁断面模式柱状図および分析試料の位置	50
第2図 西岡本1丁目遺跡周辺図	3	第34図 珪藻化石群集の変遷	53
第3図 調査区及び土層断面図	4	第35図 花粉化石群集の変遷	57
第4図 箕	5	第36図 イネ科出現率・イネ属比率および水生植物の消長	57
第5図 西岡本1丁目遺跡出土遺物	6	第37図 植物珪酸体組成の層位の変化	59
第6図 本庄村遺跡周辺図	7		
第7図 調査地区設定図	8		
第8図 A区西壁土層断面図	9		
第9図 第1検出面造構配置図	11		
第10図 第2検出面造構配置図	12		
第11図 第3検出面造構配置図	13		
第12図 第4検出面造構配置図	14		
第13図 第5検出面造構配置図	15	表1 西岡本1丁目遺跡出土遺物観察表	6
第14図 S K 3 · 4 · 5	18	表2 本庄村遺跡出土遺物観察表	33~38
第15図 S K 6 · 7 · 9	19	表3 珪藻の生態性	51
第16図 第4検出面水田跡等高線図	20	表4 珪藻分析結果	52
第17図 第5検出面縄文時代造構面等高線図	21	表5 花粉分析結果	55
第18図 出土土製品	23	表6 イネ属比率	57
第19図 出土土器1	23	表7 植物珪酸体分析結果	59
第20図 出土土器2	24	表8 植物遺体件別数量表	65
第21図 出土土器3	25	表9 ドングリ類の分類	65
第22図 出土土器4	25		
第23図 出土銭貨	25		
第24図 出土土器5	26		
第25図 出土土器6	28		
第26図 出土土器7	29		
第27図 出土土器8	30		
第28図 出土土器9	31		
第29図 出土石器	31		
第30図 地形分類図	40		
第31図 昭和13年阪神大水害被害状況	43		
第32図 西壁断面土壤試料採取位置	50		

表 目 次

表1 西岡本1丁目遺跡出土遺物観察表	6
表2 本庄村遺跡出土遺物観察表	33~38
表3 珪藻の生態性	51
表4 珪藻分析結果	52
表5 花粉分析結果	55
表6 イネ属比率	57
表7 植物珪酸体分析結果	59
表8 植物遺体件別数量表	65
表9 ドングリ類の分類	65

第1章 はじめに

第1節 調査体制

発掘調査は、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査事務所が実施した。
また、発掘調査の結果出土した遺物や記録した図面・写真の整理作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。調査体制・整理体制は以下のとおりである。

昭和60年度 西岡本1丁目遺跡発掘体制

社会教育・文化財課長 北村 幸久
文化財担当参事 森崎 理一
埋蔵文化財調査係長 榎木 誠一
調査担当 技術職員 深井明比古
同 別府 洋二

昭和61年度 本庄町遺跡立会い調査

社会教育・文化財課長 北村 幸久
文化財担当参事 森崎 理一
埋蔵文化財調査係長 大村 敬通
調査担当 技術職員 長谷川 真

昭和61年度 本庄町遺跡発掘体制

社会教育・文化財課長 北村 幸久
文化財担当参事 森崎 理一
埋蔵文化財調査係長 大村 敬通
調査担当 主任 岡田 章一
技術職員 別府 洋二
同 中川 渉
調査補助 高橋 学 (立命館大学)
原 節子
南 宏幸
事務補助 辻本 京子
作業委託 渡建設株式会社

平成2年度 整理体制

埋蔵文化財調査事務所長 内田 隆義
副所長 村上 敏揚
総務課長 小池 英隆
整理普及課長 松下 勝
主査 岩崎 正雄
同 岡田 章一
同 加古千恵子
技術職員 別府 洋二
同 岸本 一宏
同 中川 渉
嘱託職員 八木 和子
杉江 良子
(旧姓 新浜)
中田 明美
協力者 伴 悅子
中澤貴美子
前田 阳子
今村 直子

第2節 遺跡をとりまく環境

六甲山南麓は山と海に挟まれた狭隘な平野であるが、それだけに人の営みの痕跡は数多く残されている。西岡本1丁目遺跡は標高約23m、住吉川左岸の扇状地帯に立地し、JR東海道本線の山側に接する。住吉川からの距離は約0.5kmである。付近の扇状地から段丘にかけては、かつては岡本梅林群集墳^{*1}など多くの古墳群が存在した他、西岡本遺跡では縄文時代早期の住居跡が見つかっている^{*2}。

本庄町遺跡は芦屋川から西へ約1km、海岸線からの距離約0.8km、標高約3mの三角州帯に立地する。このような低地にある遺跡としては、近年、北青木遺跡^{*3}、深江北町遺跡^{*4}といった砂堆上の遺跡が調査され、注目すべき成果を挙げている。

*1 吉井良秀「摂津国武庫郡岡本村の小石棺について」『考古学雑誌』3-11 1913年

*2 六甲山麓遺跡調査会「西岡本遺跡現地説明会資料」1989年

*3 兵庫県教育委員会「北青木遺跡」1986年

*4 兵庫県教育委員会「深江北町遺跡」1988年



第1図 遺跡の位置 (1/25,000「西宮」)

第2章 西岡本1丁目遺跡の調査

第1節 調査の概要

遺跡はJR（当時国鉄）東海道本線の浜津本山駅及び住吉駅のほぼ中間の北側に接して存在する。標高23m、住吉川の左岸約600mの扇状地地形上に立地し、現在は住宅が密集している。

調査に至る経緯は、近畿郵政局が職員住宅を建設するに伴い、当該地に散布地が存在するため、昭和60年3月28日に神戸市教育委員会が試掘調査を実施、土師器片を伴う遺物包含層を検出した。以上を受けて遺跡範囲及び遺構存在確認のために調査を行った。

調査は当初重機によって長さ61m、幅6m、深さ1mにわたって掘削し、その後約1mの深さを手掘りで調査した。また調査終了時に5ヶ所重機で断ち切り、下部の土層を確認した。

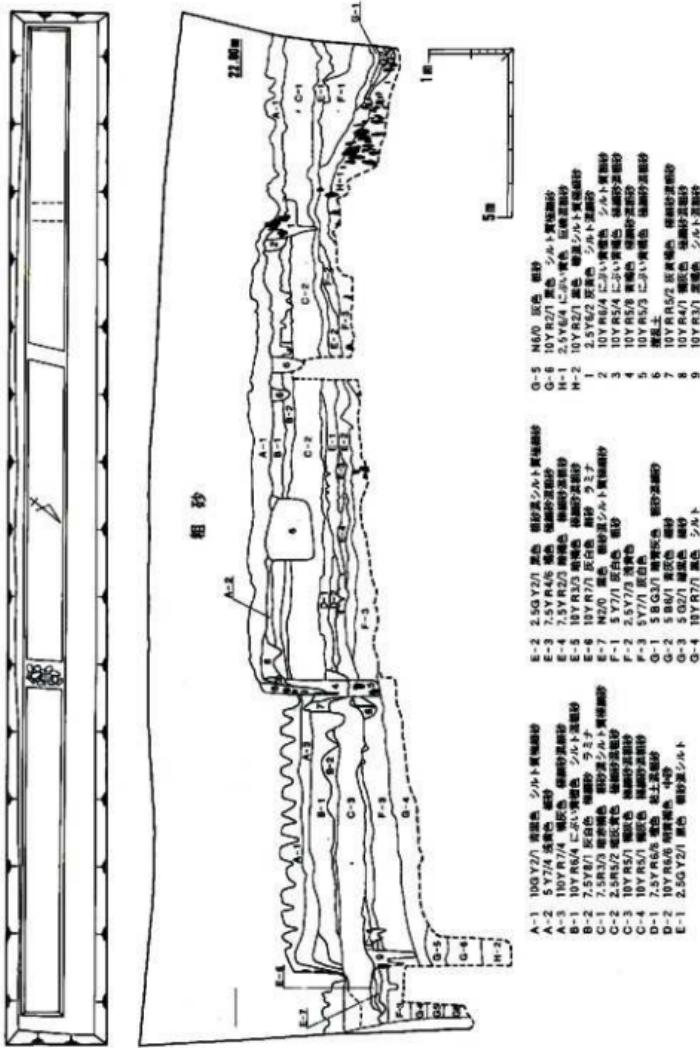
近世以前の明確な遺構が確認できなかったこと、周囲に住宅が建ち並び軟弱な土層を2m以上も掘削することは危険と判断したため、調査範囲を全面に広げることは行わなかった。

第2節 遺構

面的に調査できた遺構は、調査区に直行する方向に走る溝1条のみであったが、この溝も遺構検出面より上層からの掘削であり、近世に属するものであろう。溝は石で組まれた暗渠排水で、2回以上作り替えが行われている。幅1.3m、深さ1.4mを測る。このほかに、断面の観察によって確認された溝や石垣、近代の畑と思われる歛状の遺構がある。遺構検出を努めたE層上面は平坦であり、粗砂を充填した偶跡目の獸足跡が見られることから、おそらくこの面は水田として使用されていた可能性が高い。但しヒトと判断される足跡は確認できなかった。



第2図 西岡本1丁目遺跡周辺図 (1/5000「住吉・青木」)



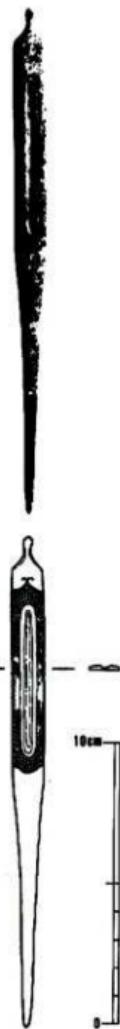
第3節 遺物 (第4図)

遺物はA～E層にかけて出土しているが、図化できたものはC・D・E層のものに限られる。C層からは第4図・第5図1～3・6・10～12が出土しているが、いぶし瓦片や柿袖を施した土師器も出土しており、18世紀末以降の堆積と思われる。笄は赤銅色を呈した銅製品で、長さ17.5cm、最大幅1.1cm、最大厚さ1.5mmを計る。ほぼ直線に伸びる胴部と先細りになる笄部の長さはほぼ等しく、また裏面は平滑で断面形は蒲鉾状を呈する。胴地板部には彫金による圓線で長さ5.1cm、幅0.2mmの彫り込みを刻む。上部の蒙手・下部の木瓜形は小縁まで抜けており、凸状か環状の輪で輪状に文様を施して魚子地にしている。耳搔の断面は平坦である。D層からは第5図5が、E層からは第5図7～9が出土している。奈良～平安時代と思われる須恵器斐片もみられるが、主体は瓦器・東播系の須恵器鉢など中世に属している。

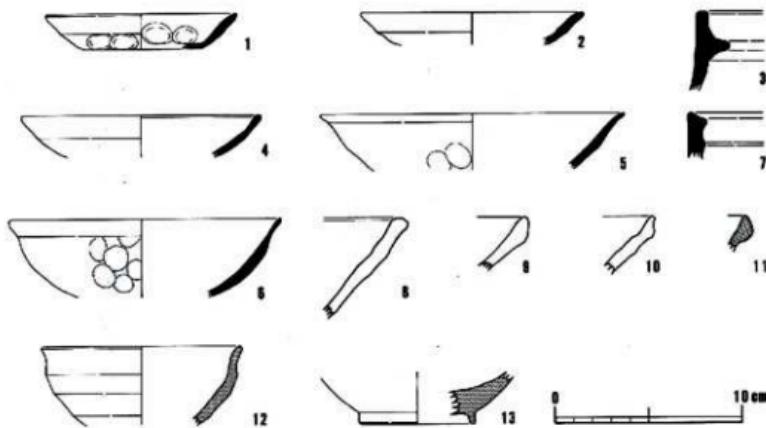
第4節 小結

遺跡は六甲山麓に住吉川が形成した扇状地帯にあたり、調査地点では、旧中州と旧河道の一部を検出した。北東端の旧河道部には住吉川の氾濫堆積物（H層）と湿地性堆積物（G層）が互層をなしており、その湿地性堆積物中の腐植質植物層を社団法人日本アソートープ協会に依頼して¹⁴C年代測定を実施した。資料は現地表面下から4.0m及び3.5mのG4層・G6層で採取された土壤中の有機質で、各々 $3,180 \pm 60$ 年B.P. (N-5050) と、 $2,310 \pm 80$ 年B.P. (N-5049) の¹⁴C年代を示している。この腐植質植物層は無遺物層である。

その上面のF層は洪水砂と思われ無遺物層である。E層は粗砂とシルトで構成されており上面に足跡が見られるところから水田の可能性がある。D層は中一粗砂の洪水砂である。その上のC層は更に3層以上に分層できるが不明瞭である。中世以降のおそらく16世紀までの水田土壤層と考えられる。その上面を洪水砂であるB層が覆っている。A層は土壤化しており、畝状の凹凸が見られることから近代の畑であろう。調査区内で最高40cmの石垣を伴う段差を持って4枚に分けることができる。その近代の畑を最高2.2mの厚さで覆っている洪水砂は、おそらく昭和13年にこの地方を襲い、特にこの住吉川周辺に多大の被害を与えた「阪神大水害」に伴うものと考えられる。



第4図 箕



第5図 西岡本1丁目遺跡出土遺物

表1 西岡本1丁目遺跡出土遺物観察表

No.	PL	回数PL	種別	器 形	寸 厘 (cm)	形 独 の 特 徴	成 分・主要な性質の名前・文様	備考
1	第5面	回数3	土器部	壺	30.2 1.9	手づくね成形。	内外面皆直底。ヨコナダ(一定方向)。口 縁部外側ヨコナダ。	
2	第5面	回数3	土器部	壺	(11.8)	手づくね成形。	外面指痕底。口縁部内外面成いヨコナダ。	
3	第5面	回数3	土器部	茶釜		円の底底凹、三角形。	粘土底巻き上げ底形→クロナダ→西付付 一腰付部分の成いヨコナダ。	外側底付着。
4	第5面	回数3	瓦部	瓦	(22.4)	口縁巻き上げ端形を含む。	粘土底巻き上げ底形→クロナダ→ロクロ ケズリ→ロクロナダ。	
5	第5面	回数3	瓦部	瓦	36.2	口縁巻き丸り弧形。	粘土底巻き上げ底形→クロナダ→ロクロ ケズリ→ロクロナダ(山腹底外側の成いヨ コナダ)。	
6	第5面	回数3	瓦部	瓦	34.8	口縁巻き丸り弧形。	粘土底巻き上げ底形→クロナダ→ロクロ ケズリ→ロクロナダ(ロ縁部外側の成いヨ コナダ)。	
7	第5面	回数3	瓦葉十郎	瓦葉?			内外面ヨコナダ。	
8	第5面	回数3	須背部	片		口縁部水平に切る。	粘土底巻き上げ底形→クロナダ→ロクロ ケズリ→ロクロナダ(山腹底外側の成いヨ コナダ)。	外側底付着。
9	第5面	回数3	須背部	片		口縁部上方につまみ上 げる。		△粘土底巻き上げ底形の 成いヨコナダ。東側系底 付着。33C中半。
10	第5面	回数3	須背部	片		口縁部上方につまみ上 げる。	粘土底巻き上げ底形→クロナダ→ロクロ ケズリ→ロクロナダ(口縁部外側の成いヨ コナダ)。	東側系底付着。
11	第5面	回数3	白瓶	壺		口縁部直状に見事。	粘土、灰白色、糞物手触。	壺田・糞田分類。内 側面無釉。
12	第5面	回数3	輪ぬ陶器	天日焼	30.5	口縁部やや内凹。 各部内凹。	水路ヨコ成形。ロクロナダ→ロクロケズ リ→ロクロナダ(天日焼施用)。口縁部底 部内凹。	壺田・糞田系。
13	第5面	回数3	輪ぬ陶器	壺	底径 (3.9)	器底は比較的厚い。	色調青褐色を含む灰白色。表面の発色やや 薄い。	山側系底付。口縁 部内凹。33C 中半。

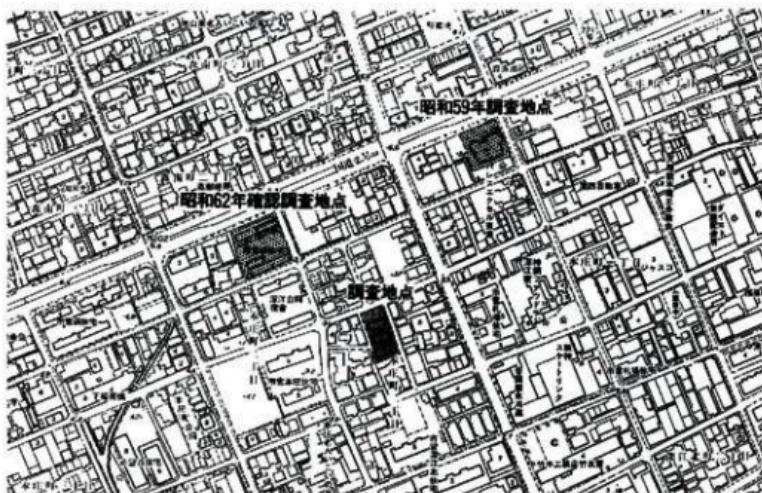
第3章 本庄町遺跡の調査

第1節 調査の経過

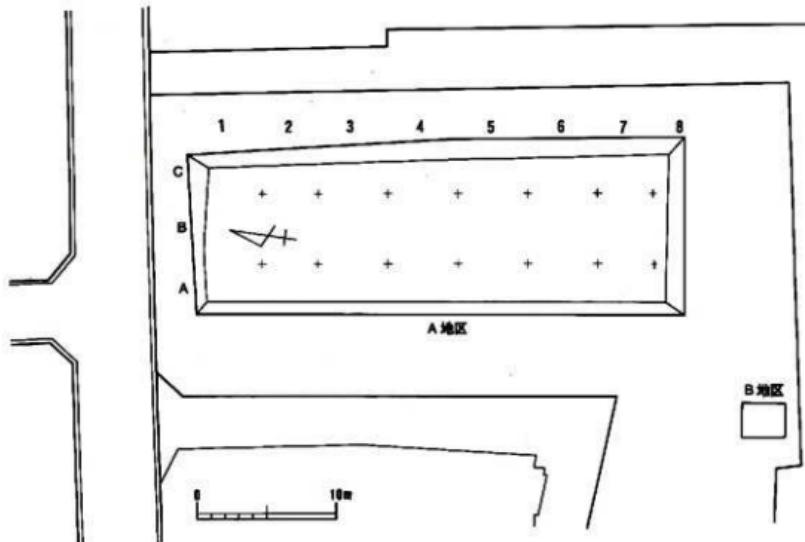
兵庫県神戸市東灘区本庄町深江字札場通1-20に所在する郵政省宿舎が建て替えられることになり、近畿郵政局より兵庫県教育委員会に埋蔵文化財に関する事前調査の依頼があった。

今回の調査地点の北東200mの地点で昭和59年2月に財團法人古代學協會・平安博物館（当時）が発掘調査を実施しており、弥生時代前末と考える水田跡等を検出している。この「本庄町遺跡」の広がりが今回の地点まで延びている可能性があるため、昭和61年3月に兵庫県教育委員会が立ち会い調査を実施。1.5×3mのグリッド2か所を重機によって掘削したところ、昭和59年の調査地点のものに対応すると考えられる遺物包含層及び水田造構面を認め、土器片も出土した。これを受けて昭和61年5月から全面調査を実施することとなった。

遺跡の立地は標高約3mの沖積低地で、これまであまり遺跡の存在が知られていないかったが、近年の調査で同様の標高1~3mの砂堆上などに遺跡が存在することがわかつた。また先の昭和59年の調査ではこれまで無遺物層と考えられてきた黒色泥炭質層から縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての遺物が出土している。調査はこれらのこと考慮して、土層を確認しながら進め、最終的には確認調査で認められた水田跡より下層まで調査することにした。



第6図 本庄町遺跡周辺図 (1/5000「本山・芦屋駅・青木・芦屋浜」)



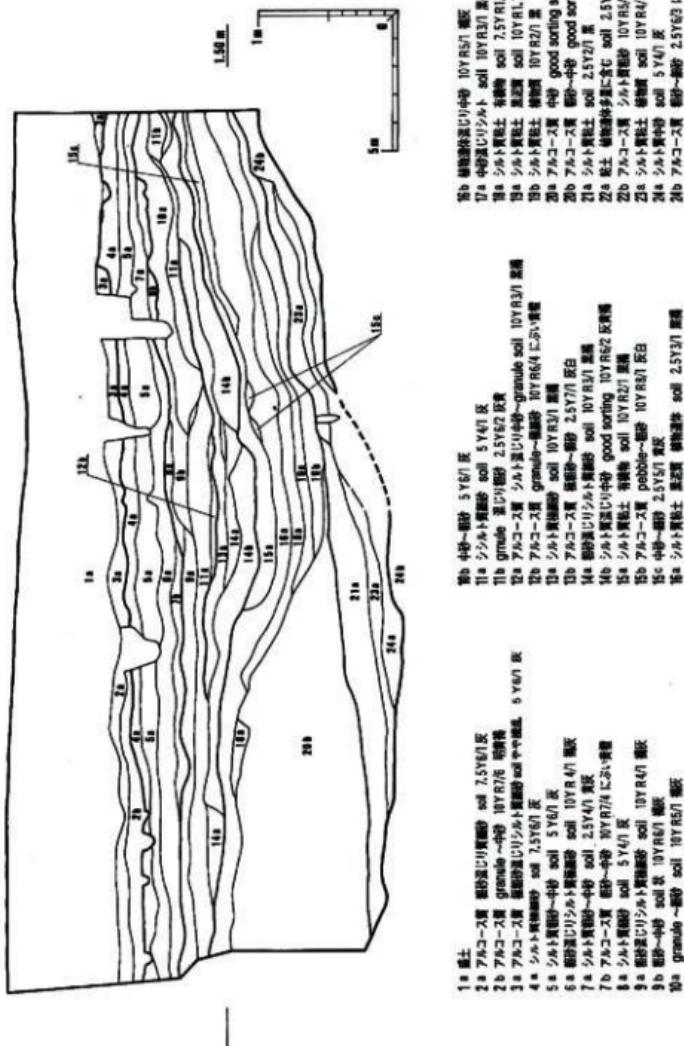
第7図 調査地区設定図

調査地区は2か所に分かれているが、この内B地区は貯水槽建設予定地で小面積であるため重機によって掘削を行い、土層観察調査を行う予定であった。しかしながら、深さ約3mまで掘削したところ、激しい涌水があり詳細な土層図は作成できなかった。

A地区的調査はまず盛土とその下層の黄褐色粗砂層及びその下層の旧耕土の上半を重機を使用して除去し、調査区の四周に土層観察のためのサブトレンチを掘削して、層序を確認しながら遺構の検出にあたった。

土層断面観察では十数枚の土壌層を確認しているが、平面で検出できるものは6面と判断し各々の検出に努めた。しかしながら、断面観察での第2面では遺構は検出できなかった。また第5・6面は間層が厚すぎるため分層しての調査はできなかった。この時点で平面的に検出できたのは4面であったが、排水及び更に下の土層観察のために掘削した北端のサブトレンチの黒色泥炭質層(16a層)から弥生時代前期の土器が出土したため、北側から順に下層の調査を行った。弥生時代前期の土器はその後出土しなかったが、予想に反して黒色泥炭質層の下面の砂層から縄文土器が出土し、遺構も検出されたため北から遺構面の検出に努めた。また調査区を北に約2m拡張して調査をおこなった。縄文時代遺構面の調査終了時に調査区西壁面から微化石等の分析用に土壤のサンプリングをおこない、また貯蔵穴の断面はぎ取りも実施した。

以下に検出できた面の順に報告する。



第8図 A区西壁 土層断面図

第2節 調査の概要

第1検出面の調査

第1面は土壤化層（4a層）の上面で、粗砂を除去して検出した。但し、調査区の北半では僅かに一段高くなり、埋没状況の差或いは削平のため遺構は不明確となる。

検出できた遺構は、南半ではほぼ東西に走る幅60~70cm、深さ約15cmの小溝が60~100cm間隔で7条平行に並び、北半では同方向の小溝が7条検出できた。調査区の東端には南北方向の溝1条があり、北半では2条以上存在するが切り合い等の相互関係は確認できなかった。これらの溝の埋土は黄褐色中砂とその上面に堆積する黒褐色砂混じり板細砂である。溝底及びその周辺にはやはり中砂で埋まつた獸足跡状の痕みが見られる。また、これら的小溝を切った状況で小柱穴状のピットが數カ所確認できたが、更に上面から切り込んでいる可能性が高い。これらの遺構に切られる形で、南北方向の小溝の痕跡がわずかに確認できた。

第2検出面の調査

土層の観察によって5a層上面にも、畦畔状の高まりが認められたが、平面的な調査では確認することができなかつた。このため更に掘り下げて遺構検出に努めた。

第2検出面での遺構は、北端で幅約1m、高さ約10cmの東西方向の畦畔状高まりとそれから北西へ枝分かれする高さ約5cmの段状高まり、幅約90cm、長さ約3.5m、深さ約5cmのほぼ南北にまっすぐ走る溝状遺構、及び直径1.0~1.3m深さ約75cm円形土壙（SK 1）を検出したのみである。この内前二者は黄褐色粗砂によって埋没していたのに対し、SK 1は下層の黒色シルト質粘土ブロックを多く含む埋土で人為的に埋められていた。これらの遺構からは遺物は出土していない。

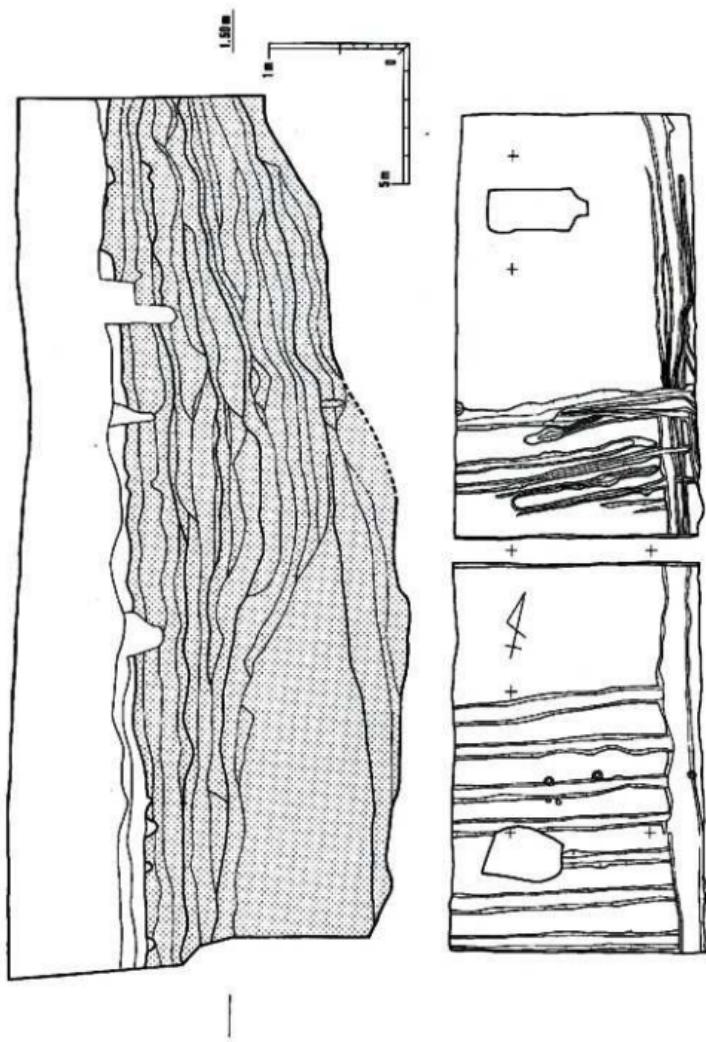
第3検出面の調査

第2検出面以下の土層はそれ以上の北から南へと緩く下る平坦面から、中央部が窪む複雑な堆積状況を示すようになる。第3検出面を覆う粗砂層（12b層）は調査区の中央部にしか分布していないため、遺構を検出し得たのはこの部分に限られている。

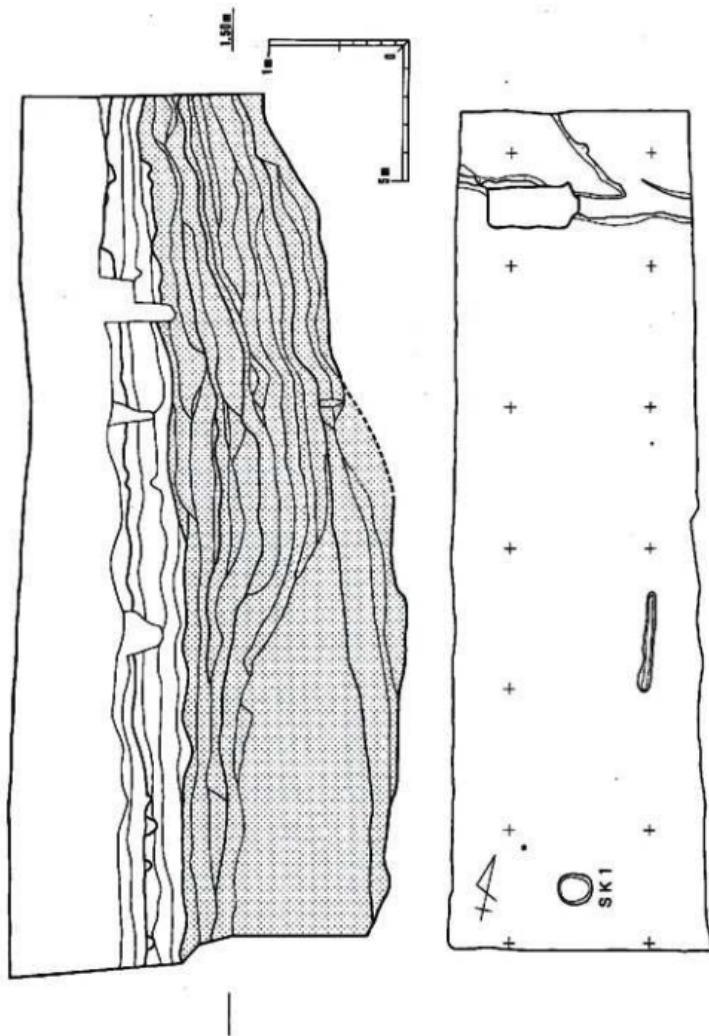
北西端で検出した土壙（SK 2）も同様の粗砂層に覆われており、土層の関係から第3検出面として取り扱う。SK 2は長さ1.5m以上、幅約90cm、深さ約16cmの長円形、皿状を呈するもので、遺物は出土していない。

中央部粗砂層下で検出できた遺構は更に東半部に偏っている。これは粗砂の堆積状況が東と西で異なることに起因する。ここで検出された遺構は水田跡で、畦畔とその周辺にヒトのものと思われる足跡多数が見られる。畦畔の幅は平均で約50cm、高さは最大値で約7cmを測る。

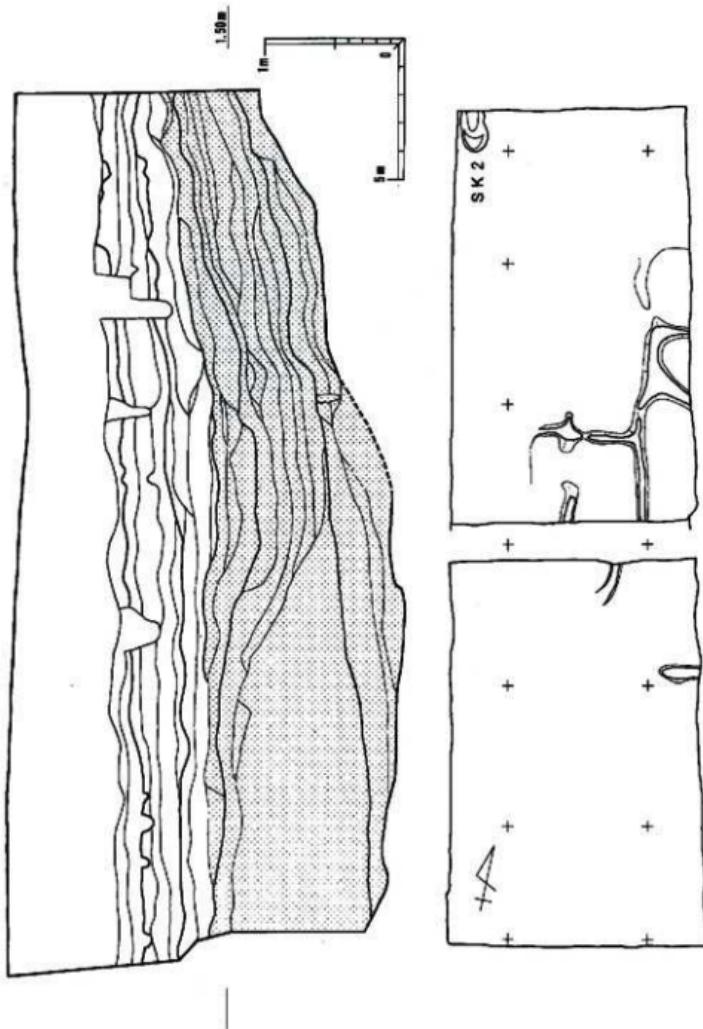
第9圖 第1梯出面地質剖面圖



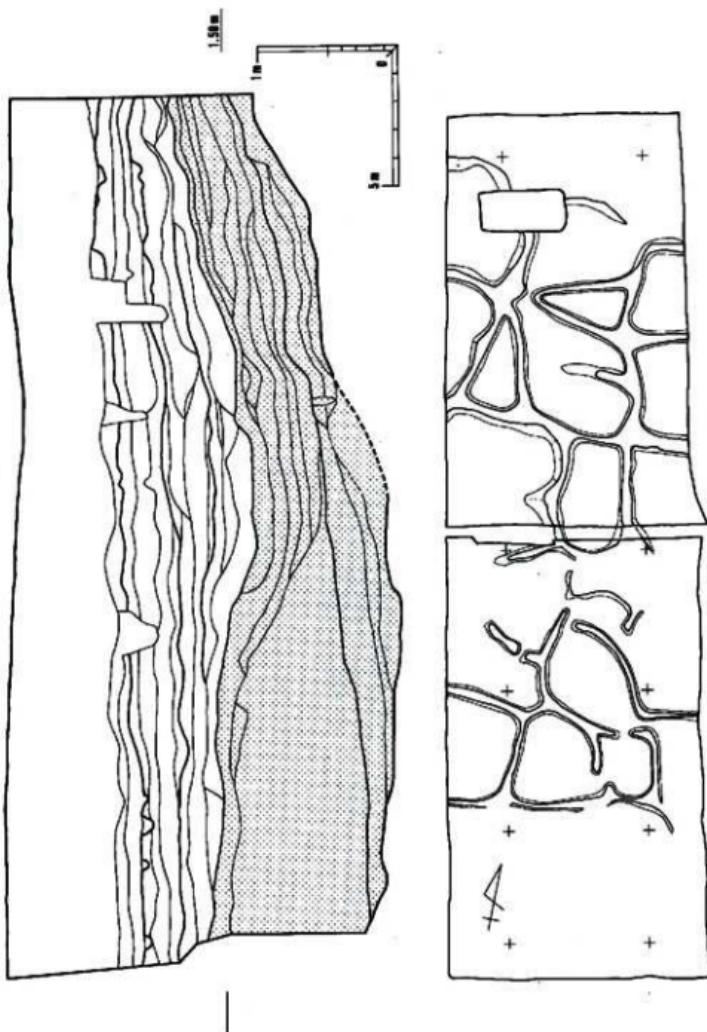
第10图 第2梯出面地层剖面图

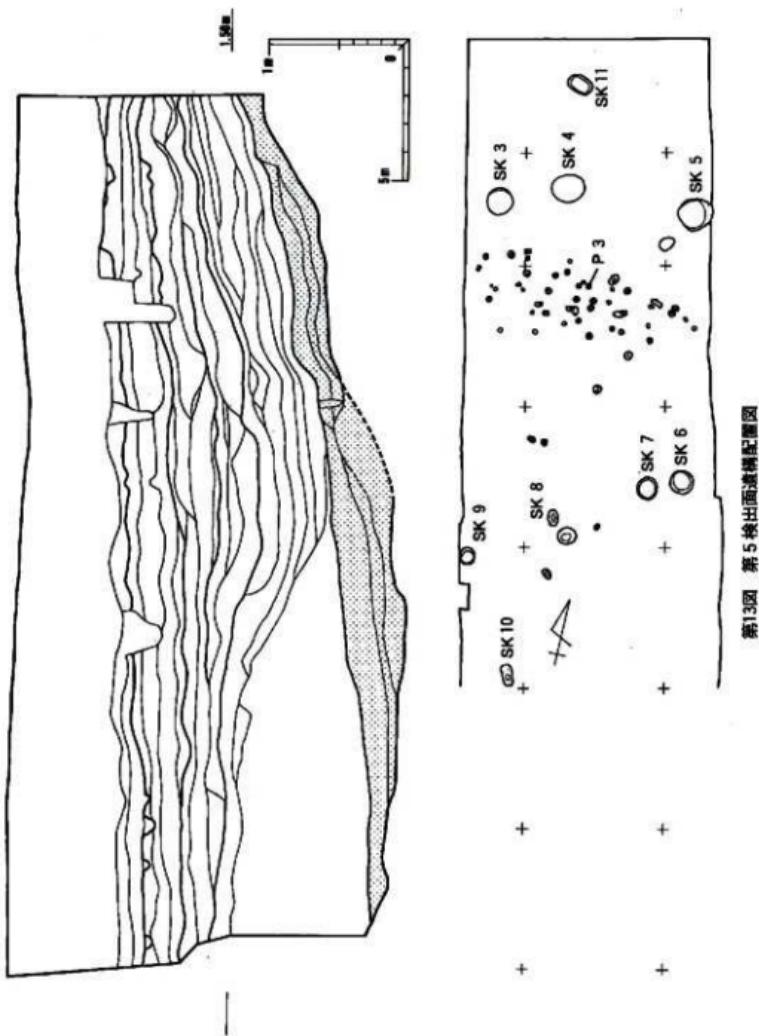


第11圖 第3換出面遺跡配置圖



第12圖 第4棟出面牆標記圖





第13圖 第5柱出面地點配置圖

第4検出面の調査

上層の水田跡と同様の砂層に覆われた状況で水田跡が検出できた。南端部分では粗砂が分布していないため畦畔の検出はできなかった。また、北半部では厚さ5cm弱の間隔で2層の粗砂層が堆積しており、その各々の下層に水田畦畔が確認されたが、平面的には分離して検出することができなかった。このため、北半では2層の水田面を同時に検出している可能性が高い。水田面や畦畔上にも中砂を充填した深さ10cm程度の大小の窪みが多数見られ、ヒトの足跡と判断されるものも多く含まれている。畦畔の平均的な幅は約50cm、高さは約5cmを測る。

第5検出面の調査

第3検出面の調査中、北端のサブトレーニングを掘り下げている際に、黒色の植物遺体を多く含んだシルト質粘土層（16a層）中から第22図の壺型土器底部が出土した。

このため、水田跡調査終了後、北端サブトレーニングを南へ拡張し、遺物の採集、遺構の検出に努めた。B地区の調査でもこの黒色シルト質粘土層を確認しているが、この層の上下から激しく涌水が見られたため調査は困難と考えられた。そこでA地区の南端で再度重機によって深掘りし、土層確認、排水を行いながら調査を実施した。

黒色シルト質粘土層中からはその後、軽石等が採集されただけで土器の出土は見られなかつたが、その下層の中砂層（23a層）上面及び中砂層中から縄文土器の出土が見られ、円形の土壙が確認された。順次南へ調査範囲を拡張し、遺構検出に努めた。遺構は北半では中砂層上に広がり黒色シルト混じり中砂の埋土を持つが、調査区の中央部では別の泥炭質のシルト層（21a層）上面から切り込み、最上層の埋土が砂層となることがSK6検出時に判明した。

検出できた遺構は、土壙9基、及び小柱穴状のピット群である。

〔SK3〕平面形はほぼ円形で、上面の直径は90~95cm、底面の直径は約80cmを測る。深さは約30cmで断面形は逆台形を呈しており、側面の一部が抉れている。底面はほぼ平坦である。埋土は黒色のシルトを含んだ砂層單一層であった。土壙内からは土器細片が出土しているが、図示できるものはない。底近くから種子類44粒出土している。

〔SK4〕平面形はほぼ円形で、上面の直径は100~115cm、底面の直径は90~100cmを測る。底面はほぼ平坦、また壁もほぼ垂直に立ち上がる。深さは約30cmで、埋土は黒色のシルトを含んだ砂層單一層であった。土壙内からは土器片（第24図80~83）が出土している。土壙検出面上には約24cm×20cm×13cmの台石状の礫がのっていた。

〔SK5〕平面形は不整円形で、上面の直径は約110cm、底面の直径は95~100cmを測る。底面はほぼ平坦、また壁もほぼ垂直に立ち上がる。深さは約60cmで、埋土は下層が黒色のシルトを含んだ砂層、上層は検出面と酷似した砂層でわずかに黒色を呈している。土器片が出土している。

〔SK 6〕 前述の3基の土壙と同様に粗砂層に切り込む黒色シルト混じり砂層を検出しよう努めていたところ、粗砂上面泥炭質層下の黒色シルト層中から種子類が出土した。そのため、黒色シルト層上面で遺構の検出を図ったところ、黒色シルトから切り込む円形の粗砂を検出した。すでに一部分を掘りとばしていたため、北半を調査後断ち割りを行い、半裁した状況で調査を行った。同時に半裁断面をサンプレン及びトマックNR51ではぎ取った。

平面形は円形で、上面での直径約85cm、底面はほぼ平坦で直径60~80cm、壁はほぼ垂直に立ち上がり深さ約60cmを測る。埋土は最上層に粗砂が皿状に堆積し、その下層は黒色シルト層が全体を覆っている。更に下層の西半部は黒色シルトと砂層とが互層となり、ラミネーションが発達している。東半の底周辺では黒色シルト層中に種子の皮がぎっしり詰まった状態で出土した。二千数百粒に及ぶ種子類の他に土器（第24図84~89）が出土している。

〔SK 7〕 平面形は不整円形で、上面の直径は65~80cm、底面の直径は60~65cmを測る。底面はほぼ平坦、また壁もほぼ垂直に立ち上がる。深さは約35cmで、埋土は上層が黒色のシルトを含んだ砂層、下層は黒褐色のシルト層で271粒の種子類と木片が出土している。この他上器片（第24図91）が出土している。

〔SK 8〕 平面形は橢円形で、上面の直径は36~53cm、底面の直径は14~32cmを測る。底面はほぼ平坦、断面形はほぼ台形に近い。深さは約17cmで、埋土は単一の砂層である。

〔SK 9〕 平面形は円形で、上面の直径は約55cm、底面の直径は35~45cmを測る。底面はほぼ平坦、断面形は台形に近い。深さは約35cmで、埋土は中砂とシルトの互層となっている。シルト層中から種子類が出土している。

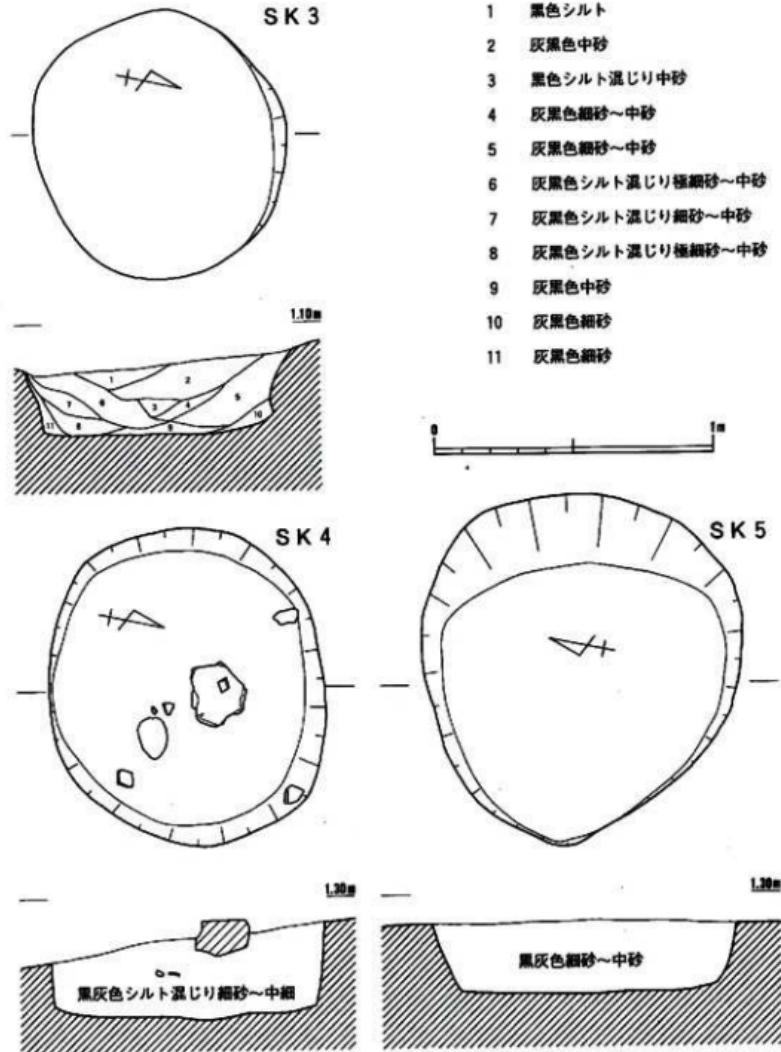
〔SK10〕 平面形は橢円形で、上面の直径は約34~82cm、底面の直径は約18cmを測る。断面形は半円形に近い。深さは約20cmで、埋土は単一の砂層である。

〔SK11〕 北側に拡張した部分で検出できた。平面形は橢円形で、上面の直径は約56~88cm、底面の直径は46~80cmを測る。断面形は皿状に近い。深さは約10cmで、埋土は単一の黒褐色シルト混じり砂層である。土器縦片が出土している。

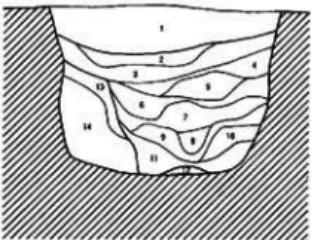
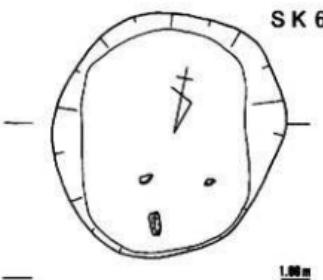
〔ピット群〕

SK 3~5とSK 6~9に挟まれた位置に約50ヶ所の小柱穴状のピットが検出できた。埋土はほとんどが黒色シルト混じり砂層である。ピットは円形のものが多く、大きさは直径10~35cmと様々であるが、ほとんどが直径20cm以下のものである。深さは深いもので17.5cmを測る。P 3から第24図92が出土している他は遺物はほとんど出土していない。

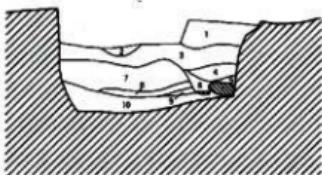
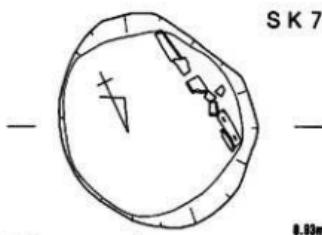
遺物のほとんどが、遺構検出面上の砂層から出土しており、遺構内出土のものと接合できたものもある。第25図の土器はSK 3の北側で押しつぶされた状態で出土している。



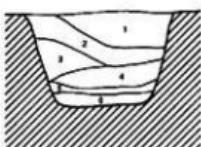
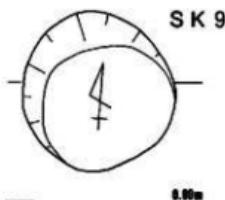
第14図 SK 3・4・5



- 1 黒褐色中砂～粗砂(土基を最後に埋めた洪积层)
- 2 黒褐色中砂混じりシルト soil
- 3~11 黒褐色シルトと緑灰色中砂の互層 ラミナ(ドングリ含む)
- 12 黒褐色シルト
- 13 黒褐色シルト
- 14 黒褐色中砂混じりシルト(ドングリ密集)



- 1 灰黒色極細砂質シルト
- 2 灰褐色中砂
- 3 黒褐色シルト混じり細砂～中砂(右側の方が繊かい
ドングリ含む)
- 4 灰黒色シルト質極細砂(ドングリ含む)
- 5 灰色中砂
- 6 緑灰色シルト混じり細砂
- 7 緑灰褐色中砂(シルト分含む、ドングリ含む)
- 8 灰黒褐色シルト混じり細砂～中砂
- 9 緑灰色シルト質極細砂～細砂
- 10 黒褐色シルト(上面にドングリ多量に含む)



- 1 黒色シルト混じり灰褐色中砂
- 2 黒色シルト(中砂ブロック含む、ドングリ含む)
- 3 黒色シルト混じり灰褐色中砂
- 4 灰褐色中砂
- 5 黒色シルト(ドングリ含む)
- 6 灰色中砂

第15図 SK 6・7・9

第3節 遺構について

水田跡について

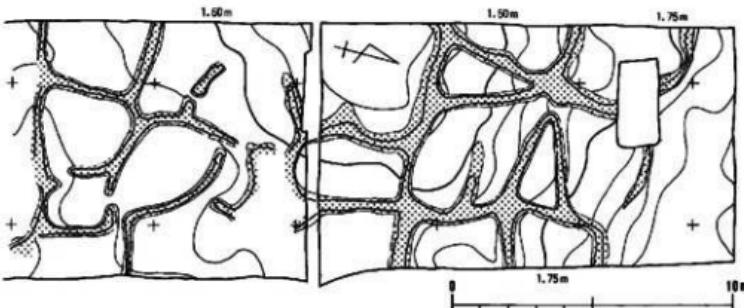
第1検出面に見られる帆状の小溝及び南北の溝は畑作に伴う遺構と思われる。その時期は、検出面上の旧耕土を覆う粗砂が昭和13年の阪神大水害のものの可能性もあるが、阪神間を襲った水害は昭和に入ってからでも、数件あるため、特定することは困難である。

第4検出面における遺構は、黒色シルト質粘土層に営まれた水田跡と思われる。水田面は粗砂によって覆われているが、この粗砂は北半では2面存在している。各々の下層に水田面を持つものと思われるが、面的に分けて調査することができなかった。

水田は中央西端が最も低く同心円状に高くなり、最高で 2° を越える傾斜のある地形上に営まれている。標高ではT,P,1,35m~1,90mの範囲で分布している。各々の畦畔の規模は平均して幅約50cm、高さ約5cmで大畦畔と見なされる大きな規模のものは見られない。南半では水口と思われる畦畔の切れ目が數か所見られる。一枚の水田の規模には大小が見られ最大でも9m²を越えない。また、形態的にも方形を基本としているが、梢円形や長方形を呈するものなど多様である。所謂、不定形小区画水田の範疇でおさえることができる。

上面の第3検出面の水田跡はほぼこの第4検出面の水田跡を踏襲していると言える。特に南北方向の畦畔は位置・規模とも近似している。両者の水田跡はあまり時間の隔たりをもって営まれたものではなかろう。

水田面を直接覆っている粗砂層が水田面に残る足跡をも埋めており、水田を廃絶させる要因と考えられることから、これらの水田跡の時期は、この粗砂層出土の遺物によって推定され得ると考える。出土遺物の内図示できたのは4点であるが、全て弥生時代後期のものであり、これらの水田が埋没した時期は弥生時代後期以降であろう。



第16図 第4検出面水田跡等高線図

貯蔵穴について

縄文時代の土壙5基から植物遺体が出土し、貯蔵穴の存在が確かめられた。そのうち、SK 3・6・7・9は平面が円形、断面が方形あるいは逆台形で、底面は水平という共通点をもつ。また植物遺体の出なかったSK 4・5についても、同形態であることからやはり貯蔵穴であるといえる。一方、SK 10は細長い船底状の形態を呈しており、出土したカヤの実は混入品と考えた方が良い。従って、今回検出した貯蔵穴はSK 3～7・9の6基である。

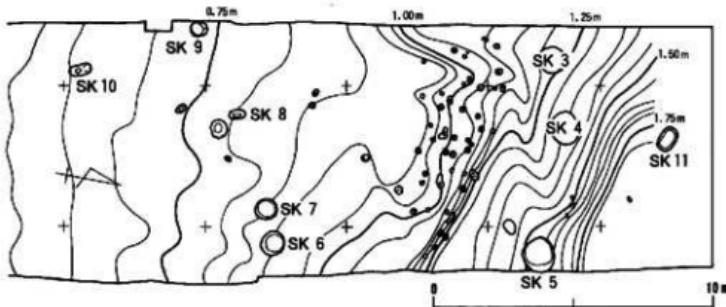
貯蔵穴は第17図に示した地形図¹¹からその配置を見ると、大きく北と南に分かれしており、東西方向に分布している。北側のSK 3～5は、T.P.1.20m～1.60mの等高線の間に取り、土壙の直径は90cm～115cmを測る。南側のSK 6・7・9は、T.P.0.70m～0.90mに立地し、直径は55cm～85cmで、北群に比較してやや小振りである。両者の間に見られるやや急な斜面は50個程のピット群が存在し、貯蔵穴に伴うやらかの施設が設けられていた可能性がある。

このような貯蔵穴について渡辺は「低湿地における貯蔵穴の機能は（中略）短期間生貯蔵することにある」¹²としている。類例は岡山県南方前池遺跡、佐賀県坂の下遺跡などが有名で、貯蔵穴内に樹皮や木の葉を積み重ねたり編物を敷いたりして、乾燥しないための工夫を施していた。本遺跡例にはそのような処置は認められず、単純に砂で埋め戻しただけのようである。出土した種子はほとんどがドングリ類で、そのうち樹種の判別したものに限ってみると、イチイガシが約66%、アカガシが約33%を占めている。これによりアカ抜きのいらないイチイガシの他に、アカ抜きを必要とするアカガシが定量的に採集されていたことが判り興味深い。

これらの遺構からは第24図（80～89・91・92）に示した土器が出土している。これらは、中期の混入品と考えられる89を除けば、ほぼ北白川上層式1期の範疇に収まるものである。よって貯蔵穴の所属時期は、後期初頭の北白川上層式1期として差し支えない。

¹¹ 平面図のレベルから作成し、断面図で補正した。

¹² 本書の第3章 第7節「神戸市本庄町遺跡出土の植物遺体」渡辺 誠参照



第17図 第5検出面縄文時代遺構面等高線図

第4節 遺物について

第1検出面の遺物（第18図-2・4・6・10・11、第19図）

第1検出面より上層から出土した遺物は、面子、土錐、土師器、陶器、磁器等である。近世以降のものである。

第2検出面の遺物（第18図-1・3・5・7～9・12・13、第20図、第23図）

第1検出面から第2検出面の間でさらにもう一面検出しようとしたが、明確な構造は検出できなかった。その際に出土した遺物は、1・3・5・7～9・12・13・27～29・35・37・38・42・45・49～52・55～59・61である。それ以外のものは、その面の下から出土しているが、38のように上下の層のものが接合できたものもある。この中で主な遺物について述べると、第23図の銭貨は元符通寶（北宋）で初鋤年は1098年である。上層で最も新しい時期を示すものは、58の唐津系の陶器や面子で概ね18世紀代のものであろう。下層出土のもので最も新しい時期を示しているものは、53の白磁などで14世紀前半を示している。

第3検出面の遺物（第21図-62～74）

遺物の出土量は極端に減少し、特に構造を覆う粗砂層からは出土していない。その上に堆積する層出土の遺物で最も新しいものは73・74の白磁などの13世紀前半の時期のものであろう。

第4検出面の遺物（第21図-75～78）

遺物出土量はさらに減少するが、構造を覆う砂層からは土師器のみが出土している。この内、図化できたのは4点のみであるが、弥生時代後期以降の時期が与えられる。

第5検出面の遺物（第22図～第28図）

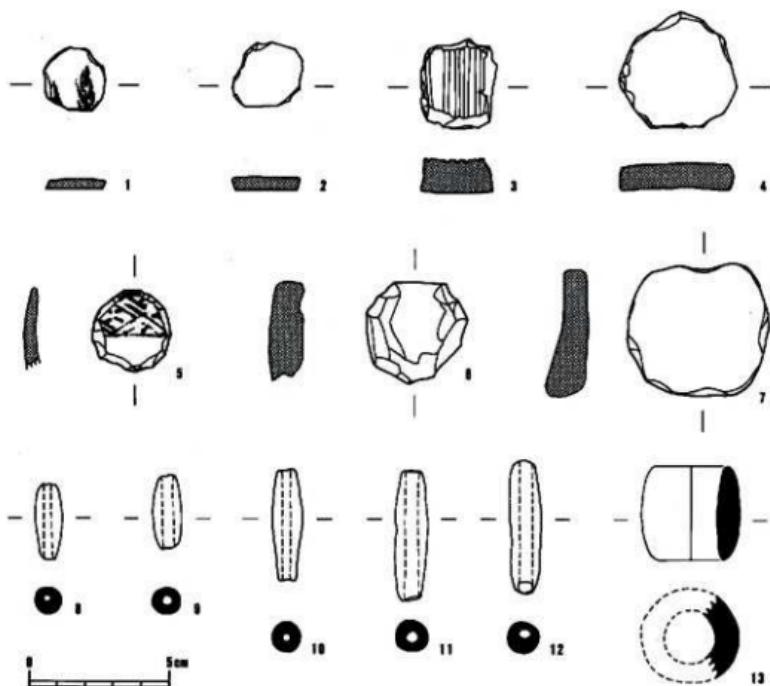
第5検出面発見のきっかけとなった第22図の土器は、調査区の北端で湿地性の有機質堆積物中から出土した。壺形土器の肩部以下の部分で外面のほぼ全体に煤状の物質が付着している。肩部最大径付近が最もよく付着しており、体部剥離面にも見られる。内外面の表面調整はあまり丁寧ではなく、ミガキ・ナデは施しているもののハケメが明瞭に残されている。この土器は弥生時代前期に属する。

更に下層から出土した縄文土器は前期末から後期前葉にかけてのものが含まれており、およそ5つの時期に分けることができた。そのまとまりを群として捉え、I～V群に大別した。

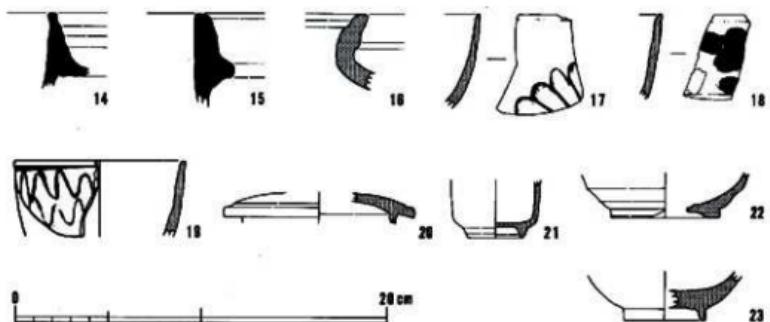
[第I群土器] 後期前葉の北白川上層式に属する土器である。当遺跡の主体をなす土器群で遺構出土の土器のほとんどがこれに属する。特徴をもとにa～f類に細分した。

a類土器 (86・91・93～95・97)

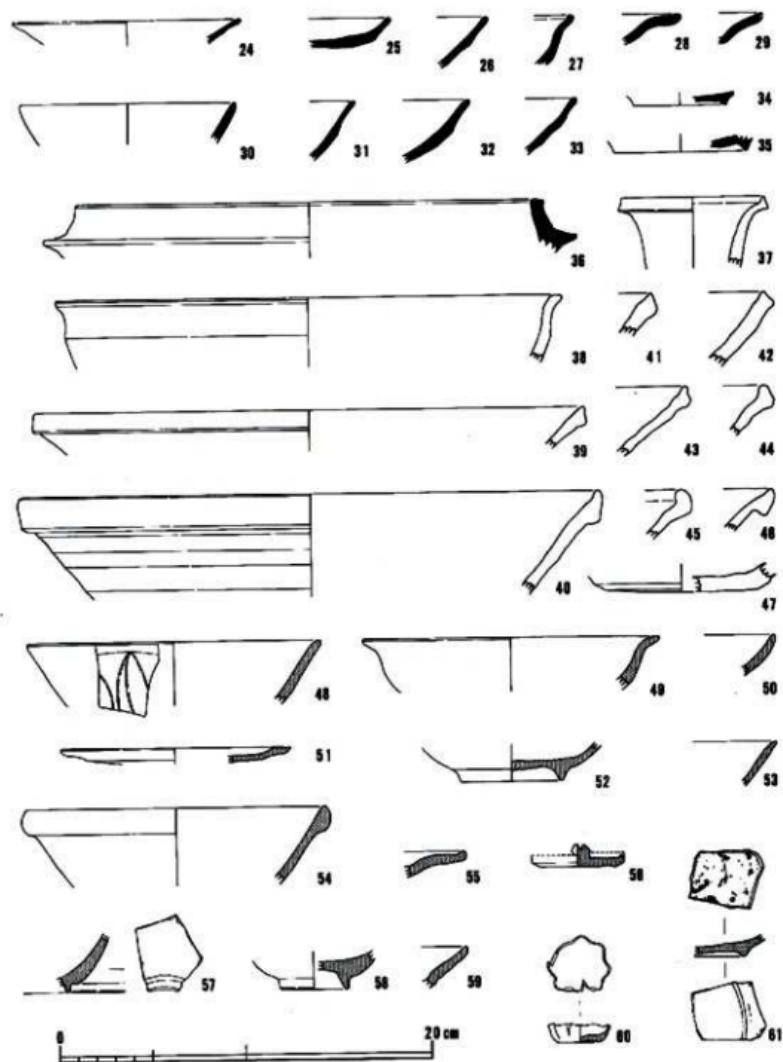
口縁部を屈曲あるいは肥厚によって強調させた、いわゆる縄文土器の深鉢である。外面にミガキを加え、頸部と胴部の境が明瞭なものをa₁類 (91・94・95・97)、外面に条痕を残したもので、頸部と胴部の境が不明瞭なものをa₂類 (86・93)とした。



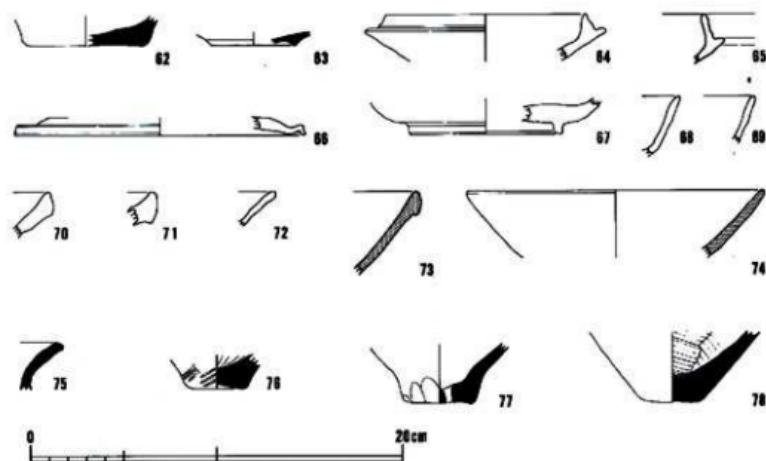
第18図 出土土製品



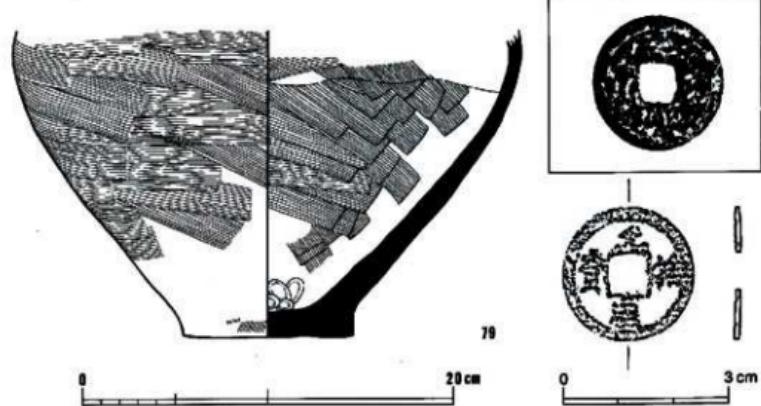
第19図 出土土器 1



第20図 出土土器 2



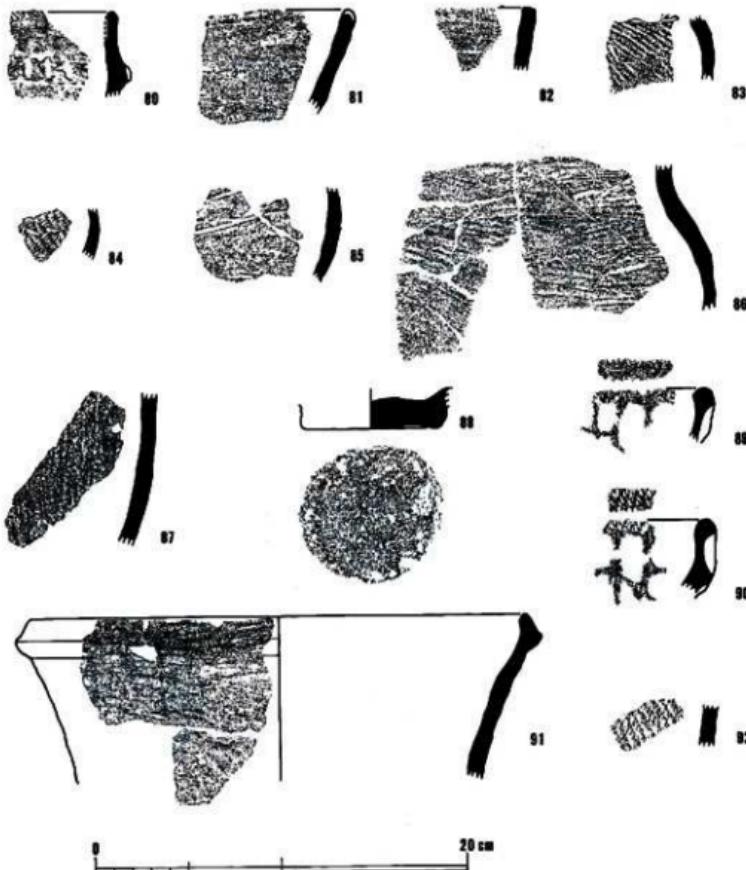
第21図 出土土器 3



第22図 出土土器 4

第23図 出土銭貨

94は波頂部の刃を欠失しているが、波頂部中央に渦文、その両側に弧文を配し、波頂部間を方形区画文で繋いでいたらしいことが判る。91は口縁帯に文様は認められない。94・91とも口縁部を平滑にミガキ上げるわりに、胴部外面の仕上げは雑である。95は内屈、肥厚させた口縁部外面に太いキザミメ、頸部に細いキザミメを施す。97は頸部と胴部の境を横位の沈線文で画し、それ以下に4本を1単位とする櫛状工具を用いて縱位の沈線文を垂らす。



第24図 出土土器 5

93は口縁部が残存し口縁部から胴部下半まで復原できる資料である。口縁部は主文様を描く波頂部から90°の位置に主文様を描かない突起があるため、波頂部2単位、突起2単位の4単位の波状口縁が想定できる。波頂部には玉を中心右4条、左3条の多重連弧文を配し波頂部間に方形区画文で繋ぐ。区画文は波頂部間に各3単位と考えられ、区画の左方は開放されたままである。文様を施した後さらに口縁部全面にRLの縄文を施している。胴部外面の上半は横位、下半は斜位の条痕文調整のままである。86は外面二枚貝による条痕文調整である。

b 類土器 (80・96)

口縁部外面に隆帯を施した深鉢である。80は口縁下部の隆帯上にキザミメを施し、口縁端部外面にはRLの縄文を施す。96は口縁下部に扁平な隆帯を施す。

c 類土器 (85・99)

沈線文を主な文様とする土器である。85は横位と斜位の沈線文を計3条施す。内面には炭化物が付着している。99は斜位の沈線文で区画された中を、擬縄文で充填する。この文様はV字形に2単位確認できる。擬縄文の原体は細形の巻貝（ヘナタリ？）である。

d 類土器 (83・84・92・98)

縄文を主な文様とする土器である。83は横位の沈線文以下に、RLの縄文を施文する。84・92はいずれもRLの縄文を施文する。98は頭部と胴部の2段に分けて、LRLの複節縄文を施文する。縄文原体の幅は1.0cmである。

e 類土器 (87・100)

無文で精製の深鉢である。100は内外面を細密条痕で調整し、器壁の厚さが5mm前後の薄手の土器である。87は内外面ともミガキで平滑に仕上げられている。

f 類土器 (81・82・101-104・108・110)

無文で粗製の深鉢である。81・82・101-103は平口縁で、81は小突起をもつ。外面の調整は条痕文をナデで消す（81）、横位の条痕文をもつ（82・101・102）、ミガキで仕上げる（103）ものがある。108・110は胴部の破片で、斜位の条痕文をもつ。104は平底の底部で、底部近くにまで斜位の条痕文が施されていることが判る。

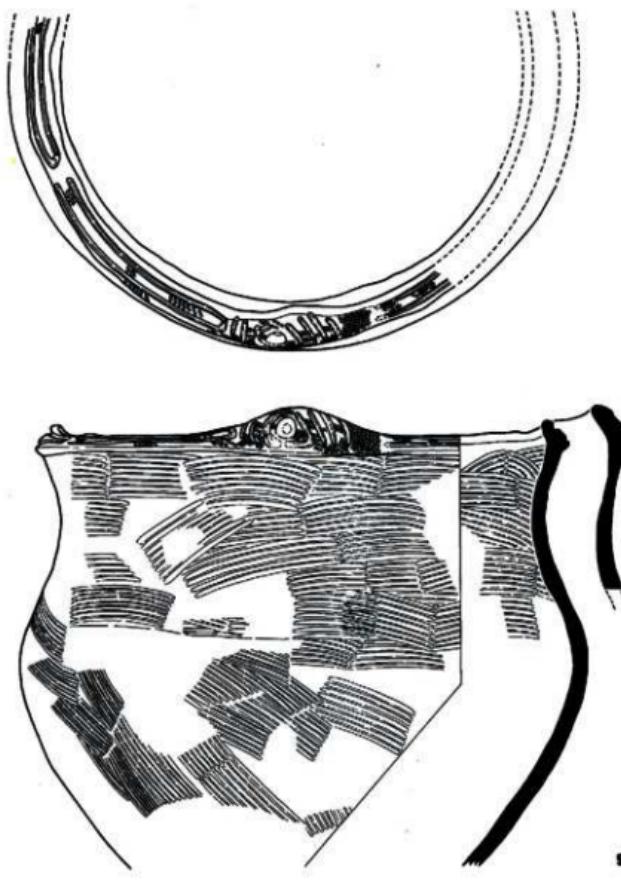
底部 (88・105・106)

先の104も含めて、いずれも平底で、底面は不調整である。

〔第II群土器〕後期初頭の中津式に属する土器である。出土量は非常に少なく、2点を図示しえたに過ぎないが、両者をa～b類に細分した。

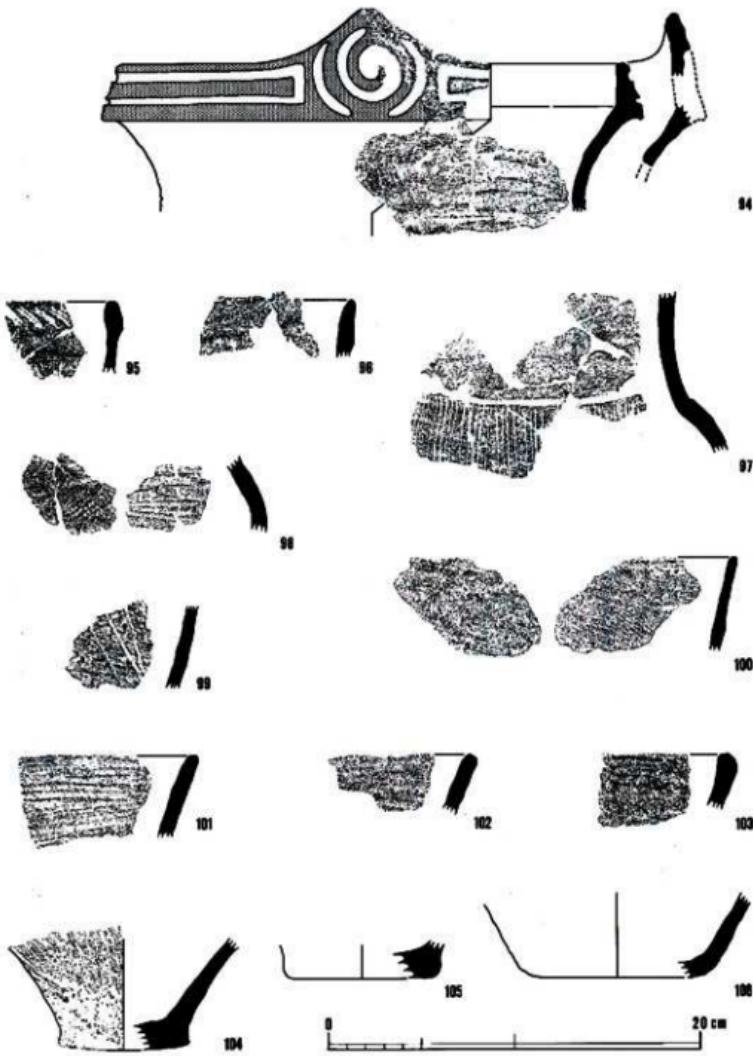
a 類土器 (107)

沈線で区画した文様の中に縄文を施文する充填縄文をもつ。107は文様構成にまとまりがみられず、退化したものといえよう。

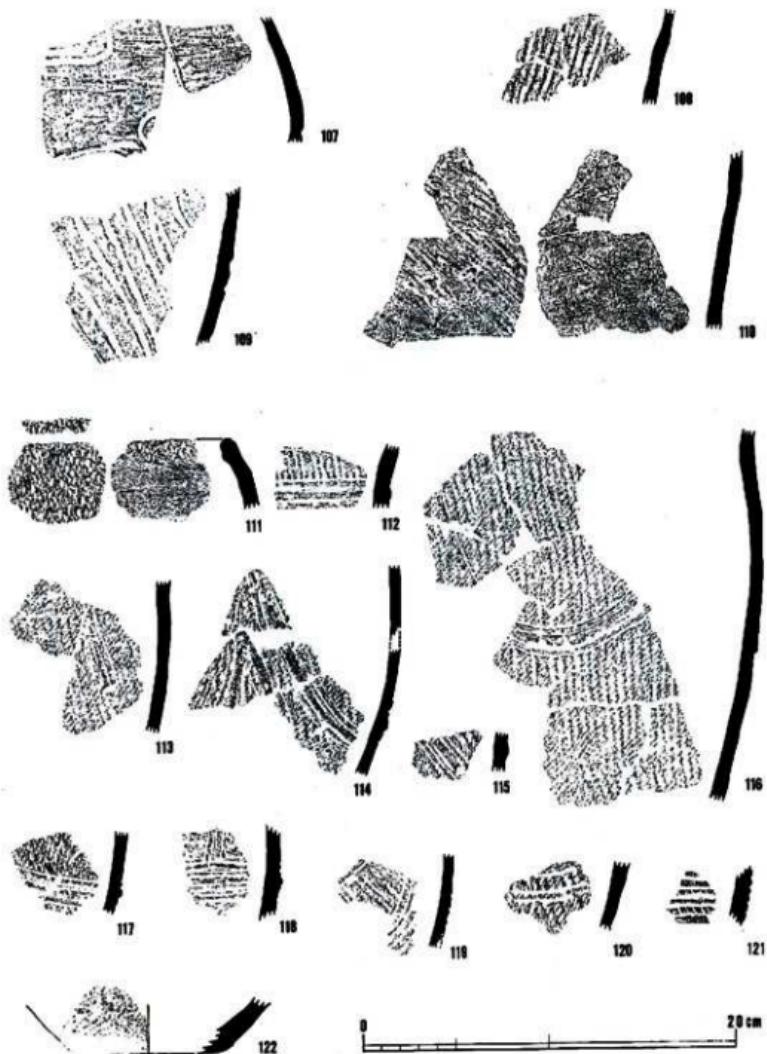


0 20 cm

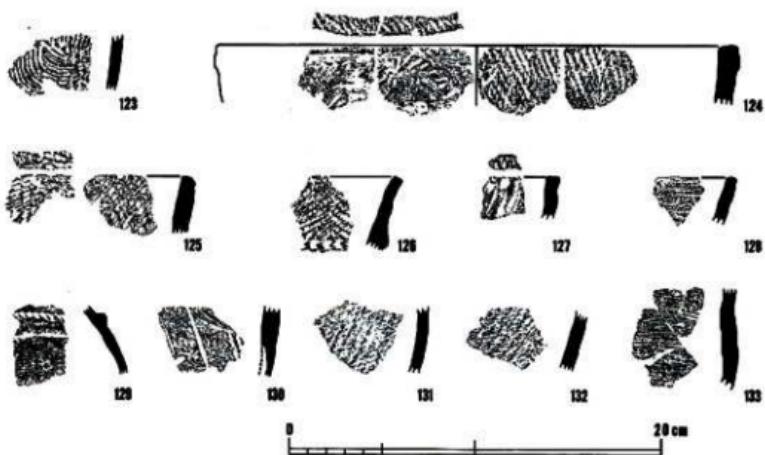
第25図 出土土器 6



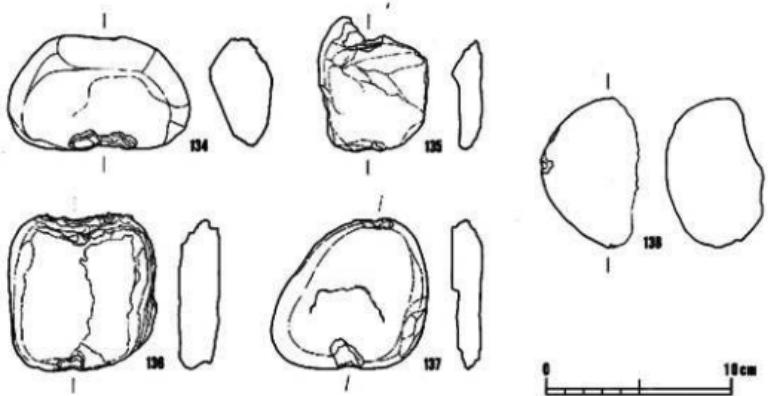
第26図 出土土器 7



第27図 出土土器 8



第28図 出土土器 9



第29図 出土石器

b 類土器 (109)

縦位の太い沈線文をもつ。沈線は1本ずつ引かれており、施文後の調整はなされていない。

(第III群土器) 中期前半の船元III式に属する土器である。さらにa～d類に細分した。

a 類土器 (111～117・119・122)

キャリバー形の深鉢で、縄文を地文とし、断面蒲鉾形の隆蒂とその両側縁をなぞる半截竹管文で文様を描く。111はキャリバー形の口縁部で、胴部のほか口唇部・口縁部内面にもRLの縄文を施す。112は頭部に横位の隆蒂と半截竹管文をもつ。113-117は同一個体で、隆蒂と半截竹管文で胴部に大きく弧状の文様を描く。119は隆蒂の両側縁に半截竹管文を2単位ずつ引き、それと垂直方向に半截竹管文を2単位引く。122は底部で、底近くまでLRの縄文が付き、底面はミガキで平滑に仕上げられる。

b 類土器 (118・120)

地文・胎土等はa類と共通するが、文様には隆蒂を伴わず半截竹管のみで弧状の文様を描く

c 類土器 (126)

口縁部にはLRの縄文を縱横に施して羽状縄文とし、頭部の隆蒂上に半截竹管押し引きを行う。船元Ⅱ式に一般的な文様ではないが、半截竹管文との関連、胎土の類似などから第Ⅲ群の中取り扱う。

d 類土器 (121)

ヘラ描きの平行沈線文と沈線間のキザミメを特徴とする。これも船元Ⅲ式とするには特異な文様であるが、半截竹管文との関連、胎土の類似などから本群に含むことにする。

〔第Ⅳ群土器〕中期前半の船元Ⅱ式に属する土器である。a・b類に細分する。

a 類土器 (124)

器壁の厚さ1.0cmと厚手の土器で、外面には低い隆蒂上にキザミメを施し、口唇部および口縁部内面にきつい捺りのRLの縄文で施文する。

b 類土器 (125)

やはり厚手の土器で、外面・口唇部および口縁部内面にきつい捺りのRLの縄文で施文する。外面の文様は隆蒂を伴わず、鋭い工具でキザミメを行っている。

〔第Ⅴ群土器〕第24b層出土土器のうち、器整の薄い一群を第Ⅴ群土器とした。所属時期は前期末から中期初頭にかけての幅をもつと考えられる。

a 類土器 (123)

器壁の厚さは0.5cm程度で薄く、外面に幅1.7cm程の爪形文を密に施して文様とする。中期初頭の船元Ⅰ式に属する土器である。

b 類土器 (127)

器壁の厚さは0.5~0.6cm程度で、口縁部外面に縱位の隆蒂とその両側縁をなぞる半截竹管文を施す。口唇部は平坦で、RLの縄文を施す。前期末の里木Ⅰ式に属すると考えられる。

c 類土器 (129)

断面三角形の階層の上面に木口状工具でザミメを施す。表面は半滑に磨かれている。

d 頭土器 (130)

擬位の沈線文3条と、別の沈線文の端部が観察できる。地文には余痕文を残している。

• 131 • 132

熱りのきついBLの翻文を継続に施す。

f. 頭十器 (128・133)

128と133は同一個体である。外面を構造の細かい条痕文で調整する。

〔その他の土器〕所属時期・系統の不明な土器である。89・90は同一個体で、口縁部外面には凹文を2段以上に施す。凹文は大小2種類のものを、交互に繰り返しているようである。また口縁部内面と口縁部にはLRの縞文を施す。

縄文時代の遺物としてはこの他に数点の石器があり、図示した礫石錐・叩き石以外に、サムカイトの剥片・軽石が出土している。礫石錐(134-137)は扁平な河原石の両端を打ち欠いて鍾りとしている。134は $6.2\text{cm} \times 9.8\text{cm}$ 、厚さ3.3cm、重さ261gを測る。他の石錐が両短辺を両面から打ち欠いているのに対して両長辺を各々1方向から打ち欠いている。135は $7.1\text{cm} \times 5.9\text{cm}$ 、厚さ1.6cm、重さ80.5gを測る。136は層状に剥離する凝灰岩質砂岩を使用しており、 $8.4\text{cm} \times 7.8\text{cm}$ 、厚さ2.2cm、重さ227gを測る。137は $7.9\text{cm} \times 8.1\text{cm}$ 、厚さ1.7cm、重さ173gを測る。135・136以外は花崗岩の円錐を用いている。叩き石(138)はほぼ半分を欠失しているが、断面径が $5.2\text{cm} \times 7.9\text{cm}$ の円錐を用いており、先端に敲打痕がみられる。重さは現状で223gを測る。花崗岩円錐を用いている。

表2 東庄町遺跡出土遺物調査表

No.	PL	画面 PL	機 別	幕 形	決 定 (m)	形 異 の 有 無	備 考
1	第10回	画面12	集付録器	面T	23.5 22	3.5	四角を切った四角形の内側に四 隅を丸めてある。内側に斜め 溝がある。
2	第10回	画面12	質器	面子	24 22.5	5	日本製?の荷物車の全面を打 欠く。
3	第10回	画面12	商器	面子	26 21.5	12	柱状の底座から竿状の立柱を 通じて、竿状の立柱から竿状の 立柱を支えている。
4	第10回	画面12	商器	面子	41.0 42	9	日本製?の荷物車の全面を打 欠く。
5	第10回	画面12	集付荷器	面子	28 30	4.5	四角を切った四角形の内側に四 隅を丸めてある。内側に斜め 溝がある。
6	第10回	画面12	商器	面子	36 36	12	荷物車?の荷物車を複数枚を残して行 列状に打ち欠く。
7	第10回	画面12	商器	面子	50.5 47	13.5	荷物車?の荷物車を斜めに打 欠く。

No.	PL	面積 PL	種	別	形	法 番 (m)		形 番 の 特 徴	考
						長	幅		
8	第18回	面積12	土脚質	土端		27.5	10		2.1g
9	第19回	面積12	土脚質	土端		26.5	10		2.1g
10	第18回	面積12	土脚質	土端		39	11		3.9g
11	第18回	面積12	土脚質	土端		45	12		5.2g
12	第18回	面積12	土脚質	土端		47	11		6.1g
13	第18回	面積12	土脚質	土端		33	(35)		粘土中に砂粒を多く含む。

No.	PL	面積 PL	種	別	形	法 番 (m)		形 番 の 特 徴	成形・調査方法の特徴・大様	考
						口	底			
14	第19回	面積12	土脚質	泥炭				外側の口縁部下部凹窓3名。やや幅広の窓。窓の前面第三形状。	粘土端巻き上げ成形→ロクロナダ→内助打→窓の裏合部強いミコナダ。口→窓→	粘土中に砂粒を含む。
15	第39回		土脚質	泥炭				窓面三角形状の窓の付點。		粘土中に砂粒を多く含む。色調深褐色。表面無膜。
16	第19回		無筋陶器	直				口縁部内面に凹窓1名。口縁部上方につまみ上げる。		丹波。16C代?
17	第19回	面積12	無筋陶器	直				口縁部端尖り突起。	色調やや青味を帯びる灰白色。外面赤褐色、界線、花文(透窓)。	くらわんこ手に手比べてやや薄手に底底、肥厚系。
18	第19回		無筋陶器	直口				体部は直立。	物腰、青味を帯びた灰白色。外側の發色はやや赤い。透窓を使用。外側赤褐色、界線1名、草花文、肥厚1名。	口縫部上面及び内面の物丁掌に張り取り、肥厚系。15C前半
19	第19回	面積12	無筋陶器	直	(9.2)			口縁部端尖り突起。	色調やや青味を帯びる灰白色。外面赤褐色(透窓)、界線、一直縁目文。	肥厚系くらわんこ手。15C代。
20	第19回	面積12	無筋陶器	直	(10.2)			口縁部端ナギにより凹窓。	ロクロナダ→ロクロケズリ→ロクロナダ→内助打(窓面青緑色に発色)。	窓飾は外側のみ内面は無し。表面に少しあらさがある。内側は滑らか。高19C後半以前。
21	第19回		無筋陶器	杆	底径 2.8			高台は比較的高く窓の窓面は三角形。体部は直立。	物腰オラス質で灰白色。高台間に界線を1条、本筋で上給付するが殆ど剥離している。	高台疊形の物は丁度張り取り近代→現代。
22	第19回		無筋陶器	直	底径 5.9			窓台に块りを入れる(窓らしく三丁所)。	水洗きロクロ成形→窓台に块り→無筋陶器→底石柱で施大。	直筋外側に窓飾。当時よく作られた現代化した窓の風貌。
23	第19回	面積12	無筋陶器	直	底径 4.2			比較的高台は低い。窓は比較的深い。	色調やや青味を帯びる灰白色。外面、界線、界線2条。窓の發色は浅い。	窓台疊形の特徴を取。肥厚系くらわんこ手。16C代。
24	第30回		土脚質	直	(12.2)			器體表しく青い。	ロクロナダ→ロクロケズリ→ロクロナダ。	
25	第30回	面積12	土脚質	直					手づくね成形一口燒器ヨコナダ。	器體表しく青い。

No.	PL	GDP PL	種別	番号	法量 (m)	形態の特徴	成形・調査方法の特徴・文様		名
							口付	基高	
26	第20回	基板13	土師器	焼			粘土焼き上げ成型→クロナダ→クロナダ→ケリ→クロナダ→口縁部ヨコナデ。		9
27	第20回	基板13	土師器	焼		口縁部に割り出。外筋大きく茎部。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→口縁部ヨコナデ→口縁部ヨコナデ。		
28	第20回		土器器	瓦?		口縁部外反。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→クロナダ→ケリ→クロナダ	器面をしく墨脱	
29	第20回		土器器	瓦		内面の條幅と底部の腰に紋を押す。	クロナダ調査を加える。		
30	第20回	基板13	土師器	焼	(11.4)	口縁部内火気味。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→クロナダ→ケリ→クロナダ。	器面をしく墨脱	
31	第20回		灰窓器	焼		口縁部丸吹を帯びる。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→クロナダ→ヨコナデ		
32	第20回	基板13	瓦器	焼		外側の口縁下部や凹み。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→口縁部外反の無いヨコナデ	器面をしく墨脱	
33	第20回	基板13	瓦器	焼		高台断面三角形。	高台剥離付。		器面をしく墨脱
34	第20回		黑土器	焼	(5.0)	外側の口縁下部や凹み。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→クロナダ→ヨコナデ→外周部ヨコナデ		
35	第20回	基板13	瓦器	焼		高台の断面には、突出三角形。	クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→クロナダ→高台剥離付+内側ヨコナデ	12C前半~13C後半	
36	第20回	基板13	瓦器土器	瓦基	25	中央幅広の舟。両の断面△、三角形。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→高台剥離付+一舟の合合部強いヨコナデ。	外周色、内側朱白色。器身をかりに墨脱	
37	第20回	基板13	灰窓器	焼	(7.5)	口縁部外反。口縁部上部方につまみ上げる。	粘土焼き上げ成型の後、ロクロナダ調査を加える。口縁部外反を強くヨコナデ。		
38	第20回	基板13	灰窓器	焼	(27.2)	口縁部水平に折り曲げ。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→ヨコナダ→ケリ→クロナダ→口縁部強いヨコナデ	口縫接合部重ね地の強いヨコナデ。堅密系張目。33C代。	
39	第20回	基板13	灰窓器	焼	(29.5)	口縁部上方につまみ上げ。外側の口縁部下部に凹部をもつ。	クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→クロナダ→口縁部内外部の強いヨコナデ。		
40	第20回	基板13	灰窓器	焼	(30.9)	口縁部上方につまみ上げ。口縁部上下に凹部。	クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→クロナダ→口縁部内外部の強いヨコナデ。	口縫接合部重ね地の強いヨコナデ。堅密系張目。33C代。	
41	第20回	基板13	灰窓器	焼		口縁部上方につまみ上げ。	クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→クロナダ。	口縫接合部重ね地の強いヨコナデ。堅密系張目。33C代。	
42	第20回	基板13	灰窓器	焼		口縁部下方に舟。外側の口縁部下部に凹部をもつ。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→ヨコナダ→口縁部内外部の強いヨコナデ。	口縫接合部重ね地の強いヨコナデ。堅密系張目。33C代。	
43	第20回	基板13	灰窓器	焼		口縁部上方につまみ上げ。外側の口縁部下部に凹部をもつ。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→ヨコナダ→口縁部内外部の強いヨコナデ。	口縫接合部重ね地の強いヨコナデ。堅密系張目。33C代。	
44	第20回	基板13	灰窓器	焼		口縁部上方につまみ上げ。外側の口縁部下部に凹部をもつ。	クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→クロナダ→ヨコナデ。	口縫接合部重ね地の強いヨコナデ。堅密系張目。33C代。	
45	第20回	基板13	灰窓器	焼		口縁部下方舟。口縁部下部に凹部をもつ。口縁部内側に強いヨコナデ。	クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→クロナダ→ヨコナデ→ヨコナダ→口縁部内側の強いヨコナデ。	口縫接合部重ね地の強いヨコナデ。堅密系張目。33C代。	
46	第20回	基板13	灰窓器	焼		口縁部下方舟。口縁部下部に凹部をもつ。口縁部内側に強いヨコナデ。	クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ→ヨコナダ→ヨコナデ→ヨコナダ→口縁部内側の強いヨコナデ。	口縫接合部重ね地の強いヨコナデ。堅密系張目。33C代。	
47	第20回		灰窓器	灰部	(8.2)	平底。	粘土焼き上げ成型→クロナダ→ヨコナダ→ヨコナデ。	器底強化。堅密系張目。33C代。	
48	第20回	基板14	青造	焼	(13.4)	口縁部内火気味体外露。表面磨き文片切。	青造外張磨き文片切→青造軸持物→深擦紅褐色に染色。	堅密系張目。33C代。	
49	第20回	基板14	青造	焼	(15.8)	口縁部外反。各部やや凸起。	青造磨き文(淡黄褐色に染色)。		
50	第20回		青造	焼?		口縁部内火気味体外露。	施施(淡黄褐色に染色)。	堅密系張目。	
51	第20回	基板14	白刷	素	(12.4) (1.7)	口縁部内火気味。口縁部内側に強いヨコナデ。	内外剥離物。青次白色に染色。	内部剥離物。	
52	第20回	基板14	青造	焼	(5.4)	比較的低い舟台。合掌形三脚形。	青造磨き文(淡黄褐色に染色)。	高台舟台の物語小取り。器底青色有斑點。	

No.	PL	ECR2L	種	別	番	玉	径 番 (mm)		形 番 の 特 徴	成 形・被覆材 法 の 特 徴・交 積	備 考
							口 径	芯 直			
53	第20番	回転34	白磁	焼	器				口縁端部の強度を取り、		色調灰白色。口は白
54	第20番	回転34	白磁	焼	器	(36.1)		口縁端部	内凹窓外周部強度・灰白色に発色。		口は白。径 14C 前半。
55	第20番	回転32	陶物両器	正	器			(1.7)	口縁底玉部分に肥厚。器 體は比較的無い。	ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ→ 灰物強度(暗青緑色に発色)。	器側面から内凹窓部外 周部強度・灰白色に発 色。口は白。径 14C 前半。
56	第20番	回転32	陶物両器	正	器	(4.9)			口縁部底点につまみ上げ る。	ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ→ つまみ筋付・上凹状強度。	中央部につまみ。
57	第20番	回転32	陶物両器	燒	器				ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ→ 灰物強度(暗青緑色に発色)。	高台以下無施。京 焼系小形。	
58	第20番	回転32	陶物両器	燒	底	(3.7)			比較的低く小さい高台。	ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ→ 灰物強度→白陶物で削毛目。	高台付ける物強度を保 持。底付ける物強度を失 う。口は白。径 14C 前半。
59	第20番	回転32	陶物両器	燒	器				ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ→ 灰物強度(暗青緑色に発色)。	高台北側の低い。	漆透系。17C 前半。
60	第20番	回転32	陶物両器	燒	器	3.2	1.2		口縁部・底盤の事に、微 度を有する。	ロクロナデ→ヘ伏工具で輪花状に彫刻。	無施。
61	第20番	回転34	陶物両器	燒	器				平底。口縁部、輪花状に 彫刻。	外腹凸出、要綱、草化文。色調青味を有 した灰色。	底付ける物強度に付ける。 16C。
62	第21番		土師器	底板	底	(6.0)			高台比較的低い。		瓦石・石器・素板の 2mm以下の砂粒を含む。
63	第21番		瓦器	燒	底	(4.5)			平底。器壁は比較的無い。	ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ→ 底付けるし底板付2	底付けるし底板付2 C後半-13C前半。
64	第21番	回転34	瓦底器	折合	底	(5.7)	1.0		高台の表面は灰、灰い、 三角形。	底土附着させ上げ成形→ロクロナデ→ロクロ ケズリ→ロクロナデ。	6C後半代。
65	第21番	回転34	瓦底器	折合							外側に灰張り。6C 前半。
66	第21番		瓦底器	底	(5.6)				口縁部内外面を強くヨコナデロクロ強制をつ まみ出す。		8C-9C代?
67	第21番	回転34	瓦底器	折合	底	(4.1)			底土附着させ上げ成形の後、ロクロナデ強制 して底付ける。底板の切り落し位置はヘラ切り。	底付けるし底板付2	8C後半-9C前半?
68	第21番		瓦底器	片					両台の断面形状は四角形。 底部の断面は比較的無い。		
69	第21番		瓦底器	片					底土附着させ上げ成形→ロクロナデ→ロクロ ケズリ→ロクロナデ→口縁部内外のヨコナデ。	底付ける。底板付2	
70	第21番	回転33	瓦底器	片					ロクロ強制を付す。	ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ。	内凹状底付ける。底板付 12C代。
71	第21番	回転33	瓦底器	片					口縁部底付せんすう付 する。口縁部底付せんすう付 する。	ロクロナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ→ 口縁部内外の強烈なヨコナデ。	内凹状底付ける。底板付 12C代。
72	第21番		瓦底器	片					ロクロ強制を付す。	ロクロナデのヨコナデ。	
73	第21番	回転34	白磁	燒					口縁底玉部分に肥厚。 器體は比較的無い。	内外底丸、造形輪跡→灰白色に発色。	内凹状底付ける。底板付 12C代。
74	第21番	回転34	白磁	燒		(13.9)			口縁部底付せんすう付 する。口縁部底付せんすう付 する。	外底の舟形下平や下脚筋	内凹状底付ける。底板付 12C代。
75	第21番		土師器	裏口					舟形して内丸し。口縁部 底は圓底くみめる。	底曲線約6mmのタキキ。内外面のヨコナデ。	灰石・灰石の5mm 以下砂粒を含む。
76	第21番	回転34	土師器	底板	底	(3.0)			表面中央を凹ます。	外底は約4mmの左下がりタキキ。内面は横 方向の板ナデ。	灰石・灰石の5mm以 下の砂粒を含む。
77	第21番	回転34	土師器	底板		(3.0)			平底の底面に拳孔3ヶ所。	外底ナデ上げ。	灰石・灰石の7mm以 下の砂粒を含む。
78	第21番	回転34	土師器	底板	底	(3.0)			小さな地部から腰をもた ずに立ち上がる。	内面強度方向の弱い縮毛。	灰石・灰石の4mm以 下の砂粒を含む。
79	第21番	回転35	陶土器	畫					内凹底方柱腰部後付オクロナデ頭こぎ。	内凹底方柱腰部後付オクロナデ頭こぎ。	灰石・灰石の3mm 以下の砂粒を含む。

No.	面EPL	地 区	遺傳・母系	標記・品種	外 国 の 調 査・特徴・名稱	内 国 の 調 査・色 質	新 国 調 査：粘土・色 質	備 考
80	第34面 田園16	B 2 区	S X 4	無記	陸寄キサギ、ヒガキ 口縁部 10 YR 3/3に近い黄褐色	ミガキ 10 YR 4/3に近い黄褐色	細砂砂岩含む 10 YR 4/1褐色	
81	第34面 田園16	B 2 区	S X 4	無記	赤茶文ナナフ	ミガキ 10 YR 4/1褐色	粗砂含む 2.5 Y 3/1褐色	
82	第34面 田園16	B 2 区	S X 4	無記	赤茶文	ミガキ 10 YR 4/2灰黄褐色	細砂砂岩含む 10 YR 5/2灰褐色	
83	第34面 田園16	B 2 区	S X 4	無記	桃色 E.L.高さ約1.5cm/cm 10 YR 4/2褐色	ミガキ 2.5 Y 4/2灰褐色	細砂砂岩含む 2.5 Y 4/1灰褐色	
84	第34面 田園16	C 4 区	S X 6	無記	E.L.高さ約1.5cm/cm 5 YR 2/1灰黄色	ミガキ 10 YR 4/2灰褐色	粗砂砂岩含む 10 YR 4/2灰褐色	
85	第34面 田園15	C 4 区	S X 6	無記	淡紅色3条、赤茶文ナナフ 10 YR 4/2灰褐色	細砂砂岩含む 10 YR 5/2灰褐色	内面に灰 化物付着	
86	第34面 田園17	C 4 区	S X 6	無記 墨跡・鉛鉢	赤茶文(二枚貝) 2.5 Y 5/3黄褐色	赤茶文ナナフ、深褐色灰 2.5 Y 5/3黄褐色	粗砂砂岩含む 5 Y 2/2オリーブ灰	
87	第34面 田園16	C 4 区	S X 6	無記	赤茶文	ミガキ 10 YR 2/1黒	粗砂含む 10 YR 1.7/1黒	
88	第34面 田園18	C 4 区	S X 6	無記 赤茶	不確定 高さ7.5	粗褐色灰 7.5 YR 1.7/1黒	中砂—粗砂含む 7.5 YR 1.7/1黒	
89	第34面 田園18	C 4 区	S X 6	口縁部	方角形3段、LR高さ3cm/cm 2.5 Y 6/3灰褐色	ミガキ 2.5 Y 6/3灰褐色	粗砂含む 2.5 Y 4/1灰褐色	90と 同一個体
90	第34面 田園16	6-7区		口縁部	分離式3段、LR高さ3cm/cm 2.5 Y 5/3灰褐色	ミガキ 2.5 Y 5/3灰褐色	粗砂含む 2.5 Y 5/3灰褐色	99と 同一個体
91	第34面 田園16	B 4 区	S X 7	無記 口縁部(26.3)	口縁部は赤茶 2.5 Y 7/7灰褐色	口縁部は深褐色 赤茶文ナナフ 2.5 Y 7/7灰褐色	粗砂—粗砂含む 5 Y 1.7/1黒	外観に 複数層
92	第34面 田園19	3 区	P 3	無記	E.L.高さ~2cm/m 7.5 YR 4/2褐色	ミガキ 10 YR 4/2灰褐色	中砂含む 10 YR 4/2灰褐色	
93	第34面 田園15			口縁部 口縁部(26.3)	口縁部は赤茶 2.5 Y 7/7灰褐色	口縁部は深褐色 赤茶文ナナフ 2.5 Y 7/7灰褐色	粗砂含む 2.5 Y 6/1青褐色	
94	第34面 田園18	26.5 塵	無記 口縁部 口縁部(27.0)	無記 口縁部	口縁部は赤茶 2.5 Y 7/7灰褐色	ミガキ、粗感半手は細かい赤茶 2.5 Y 4/2灰褐色	粗砂砂岩含む 5 Y 2/1黒	
95	第34面 田園17	26.5 塵	無記 口縁部	無記	口縁部に凹凸のナナフ 無記に瓦状のナナフ	ミガキ 2.5 Y 7/7灰褐色	粗砂含む 2.5 Y 7/7灰褐色	
96	第34面 田園17	5 区	無記 口縁部	無記	7.5 YR 4/2	ミガキ 7.5 YR 5/4に近い黒	粗砂砂岩含む 7.5 YR 1.7/1黒	
97	第34面 田園17	1 区	壁—鉛鉢	無記	無記の北洋土壁状の化粧文 2.5 Y 6/1灰褐色	ミガキ 2.5 Y 6/2灰褐色	粗砂—粗砂含む 7.5 Y 黑	
98	第34面 田園17	26.5 塼	無記 口縁部	無記	LRL. 純文~4本/cm 10 YR 5/2灰褐色	赤茶文 7.5 YR 5/2灰褐色	粗砂含む 5 PB 4/1灰褐色	
99	第34面 田園17	6-7区	26.5 塼	無記	壁定式3段、具輪軸網文	ミズリ 10 YR 4/1褐色	粗砂—粗砂含む 5 PB 2/1黒褐色	
100	第34面 田園17	6-7区	26.5 塼	無記 口縁部	細かい赤茶文 5 YS 1.7/1黒	細かい赤茶文 5 YR 3/2黒褐色	中砂—粗砂含む 5 YB 2/1黒褐色	
101	第34面 田園17	1 区	26.5 塼中 口縁部	無記	赤茶文 10 YR 3/1褐色	ミガキ、粗褐色灰 10 YR 5/2灰褐色	粗砂含む 2.5 Y 3/1黒褐色	
102	第34面 田園17	26.5 塼 上半	口縁部	無記	赤茶文 2.5 Y 6/2灰褐色	ミガキ 2.5 Y 7/7灰褐色	粗砂含む 2.5 Y 6/2灰褐色	
103	第34面 田園17	5-6区 下部	無記 口縁部	無記	1ミガキ 7.5 YR 1.7/1黒	ミガキ 10 YR 1.7/1黒	粗砂—粗砂含む 7.5 YR 1.7/1黒	
104	第34面 田園17	7 区	26.5 塼 下部	無記	赤茶文、表面は不規整 10 YR 4/2灰褐色	ミガキ 10 YR 4/2灰褐色	粗砂—粗砂含む 10 BG 3/11青褐色	

No.	図版No.	地 区	遺跡・層位	器形・部品	外観の特徴・圖面・色調	内 観 の 特 徴・色 調	新 観 鉱 材： 砂 土・色 調	考 察
105	図版24		20b層中	瓶底	底面は不規則 2.5Y 6/3C-5A1黄	2.5Y 6/2灰黄	砂地-底砂含む 2.5Y 5/1灰灰	
106	図版25	6-7区	20b層中	瓶底-底部	底面正丸、底面は不規則 10 YR 5/2C-5D1黄	ミガキ	砂地-底砂含む 10 YR 4/3に近い黄褐	
107	図版27		20b層中	瓶底	底面正丸+右斜文 (RL.底丸X-5D1) 基底文 10 YR 6/2D黄	ケズリ+ミガキ	砂地若干含む 10 YR 6/2D黄	
108	図版27	2-3区	24b層 上部	瓶底	底丸文 10 YR 5/1黒褐	ミガキ	砂地-底砂含む 10 YR 5/1黒褐	
109	図版27	6-7区	20b層中	瓶底	無底正丸瓶文 基底文 2.5Y 6/2C黄	細小-底灰次 2.5Y 4/2灰黄	砂地含む	
110	図版27	6-7区	20b層中	瓶底	底丸文 10 YR 5/2C-5D1黄	ナゲテ+ミガキ	砂地-底砂含む 2.5Y 3/1黒褐	
111	図版27		24b層 上部	瓶底	口内丸面-口厚部 R1.底丸文- 2本/cm 10 YR 4/2灰黄	ミガキ	砂地含む 10 YR 5/2灰	
112	図版27	2-3区	24b層 上部	瓶底	底面+右斜文 基底文-左斜文 10 YR 5/1黒	ミガキ	砂地含む 10 YR 4/1黒灰	
113	図版27		24b層上部	瓶底	底面+右斜文 基底文-左斜文 10 YR 5/1黒 7.5Y 2/2灰	ミガキ	砂地-底砂含む 10 YR 5/1黒	
114	図版28		24b層中	瓶底	底面+右斜文 基底文-左斜文 10 YR 5/1黒	ミガキ	砂地含む 10 YR 2/1黒	
115	図版28		24b層中	瓶底	底面+右斜文 基底文-左斜文 10 YR 5/1黒	ミガキ	砂地含む 10 YR 2/1黒	
116	図版28		24b層 上部	瓶底	手捻竹管文 10 YR 5/2C-4E1/ 7.5Y 4/1黒	ミガキ	砂地含む 7.5Y 4/1黒灰	
117	図版28		24b層 上部	瓶底	手捻竹管文 10 YR 5/2C-4E1/ 7.5Y 2/2灰	ミガキ	砂地含む 10 YR 2/1黒	
118	図版28		24b層 上部	瓶底	底面+右斜文 基底文-左斜文 10 YR 5/1黒	ミガキ	砂地含む 10 YR 2/1黒	
119	図版28		24b層 上部	瓶底	手捻竹管文 10 YR 5/2C-4E1/ 7.5Y 4/1黒	ミガキ	砂地含む 7.5Y 4/1黒灰	
120	図版27		24b層 上部	瓶底	手捻竹管文 10 YR 5/2C-4E1/ 10 YR 4/1黒	ミガキ	砂地含む 10 YR 5/1黒灰	
121	図版27		24b層 上部	瓶底	手捻竹管文+ミガキ 1本/cm 10 YR 5/2C灰	ミガキ	砂地含む 10 YR 5/2灰	
122	図版27	2区	19b層 下部	瓶底	RL.底丸文+左斜文 底面正丸文 10 YR 5/2C灰	ミガキ	砂地含む 10 YR 4/2C灰	
123	図版19	1区	24b層	瓶底	底丸文 (底部の幅13mm) 2.5Y 7/3黒	ミガキ	砂地含む 2.5Y 5/3に近い黄	
124	図版19	2区	土壤上面	瓶底	底面+右斜文 口部	口部-内面に RL.底丸文+3本/cm 10 YR 5/1黒	砂地含む 2.5Y 4/1黒灰	
125	図版19	1区	24b層	瓶底	ケズリ+ミガキ、口部底-内外面に RL.底丸文+3本/cm 2.5Y 7/3黒	ミガキ	砂地含む 10 YR 6/3に近い黄	
126	図版18	1区	24b層上部 -中	瓶底	底面+右斜文 口部底 -底面	ミガキ 10 YR 4/2灰	砂地含む 10 YR 4/1黒灰	
127	図版19	2-3区	24b層上部 -中	瓶底	底面+右斜文 口部底 RL.底丸文+3本/cm 2.5Y 7/3黒	ミガキ	中砂-砂地若干含む 2.5Y 6/2灰	
128	図版25	1区	24b層 上部	瓶底	底小-底灰文 口部底	ミガキ 5 YR 1.7/1黒	砂地含む 5 YR 1.7/1黒	133と 同一個体
129	図版25	1区	24b層 上部	瓶底	底面+右斜文 ミガキ 2.5Y 6/2灰	ミガキ、底砂灰 2.5Y 6/2灰	砂地若干含む 2.5Y 6/2灰	
130	図版25	1区	24b層 上部	瓶底	底面文 口部底	ケズリ+ミガキ 2.5Y 5/2灰	中砂含む 2.5Y 5/2灰	
131	図版25	1区	24b層	瓶底	RL.底丸文+3本/cm 10 YR 5/2灰	ミガキ	砂地含む 10 YR 5/2灰	
132	図版25	1区	24b層	瓶底	RL.底丸文+3本/cm 2.5Y 6/2灰	ミガキ	砂地含む 2.5Y 6/2灰	
133	図版25	1区 (西半)	24b層中	瓶底	底小-底灰文 10 YR 5/1灰	ミガキ	中砂-砂地含む 10 YR 5/1灰	133と 同一個体

第5節 六甲山南麓の地形環境分析 —本庄町遺跡・西岡本1丁目遺跡の地形環境—

立命館大学 高橋 学

はじめに

近年、六甲山南麓の考古学的知見に大きな変化が認められる。その一つは、都市化の影響ですでに破壊されていると考えられていた場所から、次々と遺跡が発見されていることである。この地域では、都市化がすでに第二次世界大戦以前に生じていたために、深くまで地面を掘り下げて基礎工事を行うようなことがなかったことが幸いし、住宅の下に遺跡が保存されていたのである。それが最近の大規模な再開発に伴う発掘調査によって存在が確認されるようになつたのである。

二つめには、極めて海岸線に近い所にも遺跡が存在していることが判明してきたのである。わが国のはとんどの臨海平野には、海岸に沿って延びる砂堆と呼ばれる微高地がある。砂堆は周囲とはわずか1m程度の比高しかないものの、洪水、地震といった災害の際に被害を受けにくいために、古来、集落が立地したり重要な交通路がこの上を貫いていたのである。ところが、この様な場所も含めて、標高5~10m以下のところは「かつて」海であったので遺跡は存在しないという伝説があり、近年まで詳しく検討されることもないままになっていた。しかし、近年、この場所が海であった「かつて」とは、およそ6,400年前の縄文時代早期~前期頃のことであり、それ以降の時代においては、むしろ遺跡の立地しやすい場所であることが、地形学、地質学的に明らかにされた。その結果、急速に遺跡の発見例が増加はじめたのである。

三つめとしては、いわゆる「地山」の再検討が進んだことがあげられる。すなわち、「地山」と呼ばれていたもののうちの大部分は、從来言われていたような人類出現に先行する無遺物層ではなく、縄文海進最盛期以後の平野形成に関わって堆積したことが判明してきたのである。

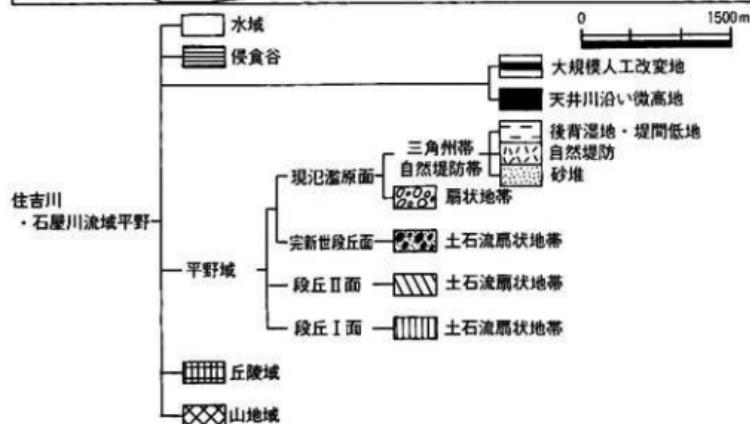
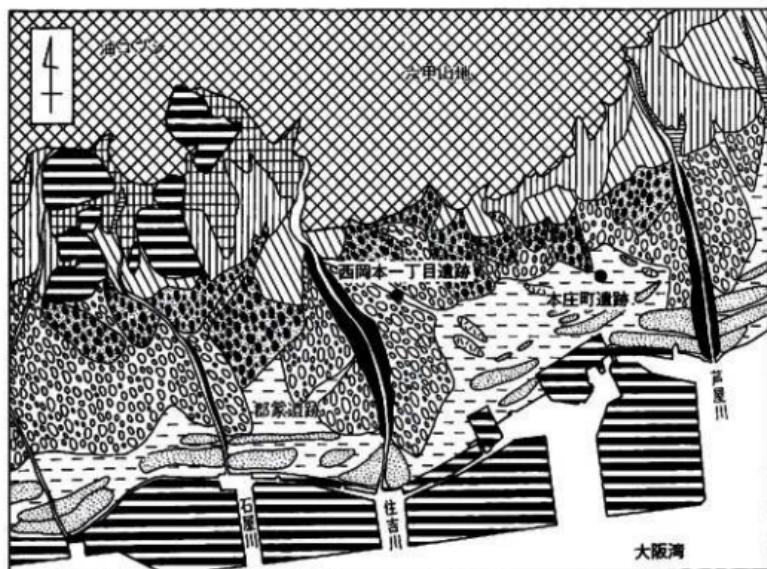
さらに四つめとして、発掘調査に際して地質学、地形学、生物学など様々な自然科学系分野からの検討が加えられるようになってきたことがあげられる。

今回報告する本庄町遺跡および西岡本1丁目遺跡は、まさしく上記のような状況の中で調査されたものである。

ここでは、地形環境分析（高橋1989a）によって、遺跡の立地環境の検討をおこなった。

六甲山地南麓の地形環境

六甲山地南麓の地形環境については、北青木遺跡の発掘調査（1986）以降、小路大町遺跡（1987）、深江北町遺跡（1988）、戎町遺跡（神戸市教育委員会1989）、郡家遺跡（神戸市教育委員会1990）、そして今回の報告で6回を数える。このなかで、六甲山地およびその南



第30図 地形分類図

麓の平野の性格が明らかになってきた。

1) 六甲山地は深層風化した花崗岩類から構成され、逆断層によって幾つかのブロックに分断されており、平坦な山頂と極めて急峻な山腹をもつていていた。また、六甲変動と呼ばれる構造運動の影響を受け、現在も1mm/年の割合で隆起を続けているのである。このように、崩壊しやすい六甲山地の性格は、その南麓の地形域環境に極めて良く反映している。

2) 六甲山地の南には半固結状態の堆積物（大阪層群）からなる丘陵が位置し、その南には未固結堆積物からなる平野、そして海域といった配列をしている。

3) 丘陵を構成している大阪層群が堆積し始めた段階において、六甲山地は現在よりも標高の低いながらかな地形をしていたと考えられている（藤田和夫1968）。六甲山地の標高500mの付近には、河内平野の地下500mに確認されるものと同じ海成粘土層が存在していることが知られているが、この粘土が約100万年前に浅海底に堆積したものであることから、地層が堆積した後に、相対的に1,000mにおよぶ落差が生じたことが判る。すなわち、その後、隆起の著しかった部分が山地域や丘陵域となり、沈降した部分が海域となったのである。そして、平野は漸移地域に形成されている。

4) 平野域のうち形成時代が古いものほど傾斜が急でしかも山地よりに位置していることは、構造運動が平野域の形成される時代においても継続したことを示している。

5) 六甲山地の隆起が著しい時代には、侵食作用も活発化し、堆積域に粗粒な物質が供給されたと考えられる。また、寒冷な気候の下でも、山地域において物理的風化作用が卓越し、粗粒な岩層が生産された。さらに、山火事や人為的な植生の破壊によっても同様な結果がもたらされた可能性がある。堆積作用によって形成された地形は、その構成物の粒度と傾斜の間に、粗粒な堆積物ほど安定角が大きいため急傾斜になるという関係がみとめられる。平野の地形の傾斜に係わり、海水準が大きな役割をはたす。一般的には、海水準の高い時には、河川の下流部では堆積が進行し、平野は緩やかな傾斜となる。これに対し、海水準の低いときには、侵食が卓越し急な傾斜の地形が形成される。海水準と気候の変化の間には密接な関係があることが知られている。すなわち、寒冷期には海水準が低下し、温暖期には上昇すると考えられている。

6) 六甲山地南麓はしばしば山地崩壊の被害を受けたり、土石流や洪水の被害を蒙ってきた。詳細な記録が残っている最近のものだけでも、昭和13年（1938）のいわゆる阪神大水害をはじめ昭和49年（1974）、昭和51年（1976）などがある。これらの洪水をもたらした降水の状態は極めて特徴的である。すなわち、降水の原因についてみると、これらはいずれも四国沖に前線が停滞し、九州南部に台風が接近した時に豪雨が発生している。しかもこの降水は、六甲山南麓から明石川流域に限られ加古川流域平野までは達していない。また、水害が発生するのは、時間当りの降水量が40mmを越えるか、あるいは総雨量が200mmに達した時である。ただし、降水量の高寡と洪水の規模あるいは水害の大きさが必ずしも比例関係にあるわけではない

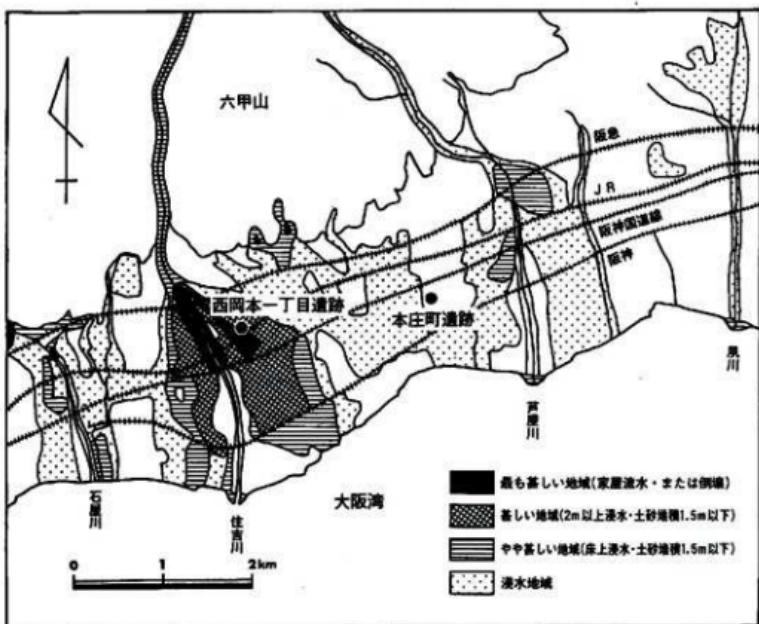
点に注意が必要である。たとえば、前者の場合、山地や丘陵部分での保水力（例えば植生）や河川の状況（例えば河道の固定による天井川化）の違いなどが問題にならう。また、後者の場合には、たとえ洪水の規模は同じであっても、土地利用や防災に対する技術、あるいは資本投下の違いによって、水害の規模は異なってくるのである。六甲山南麓の地域では、近世末に神戸港が開かれてから急速に都市化が進行したことや、平坦な土地が少ないために密集した家屋が丘陵域や山地域の斜面まで達していること、あるいは河川の固定に伴う天井川化など水害の規模を大きくする条件が顕著にみられるのである。昭和49年、昭和51年の水害は、土地利用上の問題が露呈したものであった。また、既に昭和13年の水害であっても、このような様相がみとめられる。たとえば、破堤地点は河川を鉄道や道路が横断する地点にあたっている。それは、河川を流下してきた倒木などが、橋脚の部分に引っ掛かりダムのような役割を果たしたために生じたのである。第31図に示したように、洪水が最もも著しかったのは、阪急電車の橋梁でダムアップされた住吉川の流水が、左岸側の旧河道方向へと流下した地点であった。従って、このようなデータを過去のあまり開発の進んでいない時代にそのままではあてはめることはできないことに注意が必要である。

7) 六甲山地南麓の河川は、現在いずれも天井川化しているが、その起源は後にも詳述するように、中世末を過るものではなさうである。從来、天井川についてその地域の開発が古いことと関連つけしばしば論じられてきたが、この点については見直しが必要と考えられる。

芦屋川・住吉川流域の地形面環境分析

芦屋川は石室殿（標高870m）に源を発し、わずか10km足らずで大阪湾に達する急勾配の河川である。また、住吉川は六甲山（標高931m）から大阪湾まで9kmの距離を一気に駆け下る急流である。この両者は、流域面積の点ではあまり大きな差がみとめられないものの、それぞれの形成する平野には顕著な違いがある。それは、集水域の性格の違いを反映したものと考えられる。すなわち、芦屋川の集水域には、山地域から平野に至る間に流出した砂礫を堆積させるような顕著なトラップが存在しない。これに対し、住吉川の集水域には、六甲山地を分断する断層が存在し、トラップとして機能している。また、断層に添って延びる谷には、丘陵を構成する大阪層群が分布している。大阪層群の構成物は、前にも述べたように、比較的細粒なものが多く、この点も平野の性格に影響をおよぼしているものと思われる。

芦屋川、住吉川の形成した平野は、いずれも崖によって複数の地形面に細分できる（第30図参照）。これらのうち、段丘Ⅰ面と段丘Ⅱ面は、未曾有の洪水と言われる阪神大水害の時でもほとんど被害を受けていない（第31図参照）。これは、段丘Ⅰ面と段丘Ⅱ面とが既に堆積過程にないことを示している。これに対し、それより低位の地形面のように洪水を受けるということは、土砂の堆積があること、すなわち形成過程にあることを意味している。また、より古



第31図 昭和13年阪神大水害被害状況

い段階に形成過程を終えた地形面上では、過去の地表面（遺構）の埋没深度が相対的に浅い。たとえば、段丘Ⅱ面上において、弥生時代の遺構面は、現在の表土直下に、上部を欠損した状態で発見されることが多い。このことは、段丘Ⅱ面が、弥生時代以降ほとんど土砂の堆積を受けていないことを示唆している。今までのところ確固たる証拠には欠けるものの、段丘Ⅱ面を構成する堆積物が極めて粗粒であること、傾斜が急であることなどから、最終氷期の最盛期あるいは、晩水期に形成された可能性が考えられる。また、段丘Ⅰ面については、段丘Ⅱ面より1段階古い寒冷期に形成されたものと推察できる。

段丘Ⅰ面および段丘Ⅱ面は、現在、高級住宅地と考えられている。それは、a. 高燥で洪水をうけないこと b. 地震の被害を受けにくいこと c. 高台で展望がきくこと等の条件がプラスの要因となっている。これらの地域が住宅地となったのは大正年間であり、それ以前には水田として土地利用されていた。ところが、先に挙げた居住に望ましい条件というものは、水田の立地条件としては、必ずしもプラスに評価されていたわけではない。特に、a. の条件は、灌漑が困難なことと表裏一体をしており、水田開発や維持の難しいことを意味している。一般

に、段丘面を指す「原」、「野」は、印南野（神戸市、加古郡稻美町）や上ヶ原（西宮市）等の例に見られるように、近世における新田開発以前には、積極的に土地利用のされていない荒野であったことを指していることが多い。また、植生に覆われた林となっていたことも考えられる。こうした場合、現在の我々の目には平野の範疇にあたる段丘も、中世以前の人々には「山」と認識されていた可能性もある。応保二年（1163）攝津国八部郡の条里断簡図に示されている「山」等は、はたして現在の視点から見ても「山地」を指しているのだろうか。現地比定の上で大きな問題であろう。

さて、第30図で完新世段丘面とした地形は、かつて段丘Ⅱ面としていた地形面である（高橋1986）。この地形面は、神戸市教育委員会が実施した郷家遺跡発掘調査において、完新世になつても堆積が進行していたことが判明した（高橋1990a）ことから、完新世段丘面と呼ぶことにした。この地形面上では、弥生時代末～古墳時代初頭の頃までは、本流性の土砂堆積が進行していたが、それ以降はほとんどとめられないことから、段丘化したものと推察される。段丘化した詳細な時期については、今のところ明らかでないが、瀬戸内海沿岸の各地の事例からみて、古代末～中世初頭に属する可能性が高いと判断される。完新世段丘上では、段丘化に伴つて洪水の被害を受けなくなったり、地下水位が低下したり、旧来の灌漑システムが利用できなくなるなど、様々な環境の変化があったに違いない（高橋1990b）。

現氾濫原面は、完新世段丘面の段丘化以降、一層、洪水の危険性が増し、土砂の堆積が進行するようになったところである。また、天井川もこの地形面の地形環境を検討する上で、重要である。段丘化以降における、洪水の危険性の増大と土地利用の高密度化は、築堤による河道の固定化を必要とし、それが河床の上昇を促進させ、その繰り返しによって、天井川が形成された。その結果、現氾濫原面は全体的に低湿化した可能性がある。

都市化が進行する以前においては、一町方格の条里型土地割の水田が展開し、坪地名も残存していた。他方、集落は海岸に沿って分布する傾向が極めて顕著であったといえよう。地形面環境分析のレベルで見た場合、現氾濫原面は、歴史時代になってからも地形環境の変化が激しいところであり、地形帯、微地形、極微地形環境レベルでは、現在の状況をそのまま過去にあてはめるわけにはいかない点に注意が必要である。

芦屋川・住吉川流域平野の地形帶環境

芦屋川・住吉川流域平野を地形帶環境分析のレベルで見ると、第30図に示したようになる。段丘Ⅰ面、段丘Ⅱ面は、位置、表面形状、堆積物から土石流に起因した扇状地帯として形成された地形帶が段丘化したものと判断される。また、完新世段丘面は、同様に扇状地帯として形成されたものと思われる。他方、現氾濫原面は、ふたつの異なる成因に起因する地形帶に区分される。すなわち、土石流および河川の營力の下に形成された扇状地帯と、完新世において

海面下に没し、その後、河川の影響によって陸化した三角州帯である。

昭和13年の阪神大水害の状況をみると、現氾濫原面・扇状地帯と分類された地点は、かなり被害を受けている。言い替えれば、現在もこの地形帯が成長していることを意味している。ただし、厳密にいうならば、既に報告した坊ヶ塚遺跡の場合の様に、積極的に砂礫の堆積したのは、弥生時代までであり、それ以降は堆積物が細粒化しているようである。この点で瀬戸内海沿岸の臨海平野の大部分を占める完新世段丘Ⅰ面・扇状地帯（自然堤防帯）に対比できる。瀬戸内海沿岸の各地との間わりを考慮すれば、ここで現氾濫原面・扇状地帯とした地形は、完新世段丘Ⅰ面である可能性が高い。しかし、既に述べたように、芦屋川、住吉川のいずれも河道の人工的な固定以降、犬井川化が極めて著しい。このため段丘崖が、その堆積物の下に埋積していることが考えられるのである。この点については、今後の重要な検討課題である。

さて次に、現氾濫原面・三角州帯と分類された地点について検討してみたい。およそ6,400年B.P.の温暖期に生じた海進によって海底に没した地域は世界の各地で知られている。瀬戸内海の沿岸の臨海平野もその例外ではない。たとえば、明石川流域では海水準はT.P.+3mに達し、当時の海岸線は、現海岸線と比較するとおよそ2,500m内陸側に位置していたことが知られている。その一方で、岡山平野では、海水準は現在とほぼ同じかやや低いものの、山陽新幹線の位置付近まで海域が広がっていたとみられる。これらは旧海水準の認定に差があるものの、海域が拡大していたことは、ボーリングデータや土木工事現場などにおける地層の観察から判明している。ところが、六甲山地南麓の地域においては、波食崖や砂堆など海の営力を推定させる地形学上の多くの証拠が存在するにも関わらず、海底堆積物の広がりを明らかにできていない。それは、六甲山地から流下する河川や土石流の影響が大きすぎるために、安定した海域が存在しなかったことに起因すると思われる。少なくとも既存のボーリングデータから、広い範囲にわたって海成堆積物を検出することはできていない。そこで、今回も便宜的に傾斜変換線、砂堆の分布範囲などから三角州帯の範囲を推定した。地質学データについては今後のデータの集積が必要である。

本庄町遺跡の微地形環境分析

本庄町遺跡は、芦屋川の形成した現氾濫原面-扇状地帯の末端から三角州帯にかけて位置している。今回の調査地点に関しては、土石流や扇状地を構成する砂礫層は確認されないことがら三角州帯にあたっているものと思われる。

調査は、最深部で現地表面下およそ3mに達し、20面以上の洪水に埋積された旧地表面を確認することができた。

発掘地点を微地形環境レベルで捉えるならば、5段階のステージを編むことができる（第8図参照）。

ステージ1（自然堤防の形成期）

このステージには、発掘調査区の北部に東西方向の軸を持つ自然堤防が形成された。調査によって確認されたのは、この自然堤防の南側斜面のみであるが、最も厚いところでは、およそ2mの層厚が確認された。自然堤防の構成層は、黄褐色の淘汰の良いシルト質中砂であり、かなり河口に近いところに一気に堆積したものと判断される。砂堆と自然堤防の中間的な性格を有する河口州の可能性もある。この層には縄文時代後期の遺物が含まれている。また、いわゆるドングリピットが6基この層の上層に掘削されており、そこから縄文時代中期前葉および後期初頭の遺物が出土している。このことから、自然堤防は縄文時代後期に属するものと考えられる。ドングリピットの内容については第3章第7節に詳細に述べられているが、大部分がアケぬきの不必要的イチイガシであり、貯蔵目的のものという。

ステージ2（後背湿地の形成期）

発掘調査区の南半分は、当時、黒褐色のシルト質粘土の堆積する湿地であった。この層は、乾燥するとビビアナイトの結晶が認められることから淡水域に堆積したものと判断される。北側の微高地を砂堆とせずに自然堤防としたのは、ここが淡水域であったことが最終的な判断の根拠になった。

ステージ3（自然堤防の形成期）

前ステージで相対的に低いために後背湿地になっていたところに、東西に軸を持つ自然堤防が形成された。この構成層はやはり淘汰の良い黄褐色の中砂～繊砂であり、その層厚はおよそ1mを測る。この層も、海域に極めて近いところに堆積したと判断される。自然堤防の主部は調査区の南端付近にあり、検出されたのは、自然堤防の北側斜面部分であった。

ステージ4（後背湿地の形成期）

ステージ1および3に形成された自然堤防により相対的に低くなった部分が後背湿地になった。この後背湿地には、当初ヨシが繁茂していたらしく、その遺体が密集していた。そして、その埋積がすむとともに水田化が図られた。畦畔や多くの人間の足跡が検出された。水田面は複数存在し、規模の小さな洪水に襲われながら、耕作されていたことが判る。水田面を被覆する洪水砂から出土した遺物は、弥生時代前期、弥生時代後期に属するものであり、水田が埋積された時期を示唆するものと考えられる。

この水田跡は、1984年に平安博物館が本庄町遺跡を発掘調査した際に検出した水田跡と対応する可能性がある。

ステージ5（平坦期）

後背湿地が徐々に埋積し、ついには自然堤防を被覆するようになった。ここでも、他の瀬戸内海沿岸平野の例と同様に、古墳時代から中世初頭の地層の堆積は極めて少なく、13世紀前半までの間を詳細に区別することはできない。13世紀前半には、この地域は全面的に水田化し糸

甲型の土地割となっていた。

なお、一部で歯状造構が検出されているが、その土壤は水田であることを示していた。この状況を説明するふたつの考え方がある。すなわち、二毛作が行われており、冬の麦作の途上で埋積されたとする考え方がある。仮にそうだとすれば、洪水の発生した季節を特定できることになる。また、ふたつめの考え方として、水田として土地利用していたところが、灌漑用水の不足などの理由で畠化されたとする見方である。瀬戸内海沿岸の平野では、古代末に完新世段丘II面の段丘化が生じたことが確認されており、各地で地目の転換が図られている例がある。

西岡本1丁目遺跡の微地形環境分析

住吉川左岸に立地する西岡本1丁目遺跡は非常に興味深い位置にあたっている。すなわち、今回の発掘調査地点は、現在、住吉川の形成した扇状地帯の旧河道ないし開析谷にあたっているのである。ここは昭和13年の阪神大水害時に最も被害がひどい場所であったことが知られている（第31図参照）。a. 阪神大水害の際、何故ここに被害が集中したのか。また、b. 阪神大水害時の影響がどのような状況として地層に記録されているか。西岡本1丁目遺跡の発掘調査は、このような災害史の観点からも重要な地点であった。

まず、a. の問題から検討していきたい。東西に長くトレンチ状に設定された発掘調査区の地層の観察から、第3図に示したような断面図が得られた。これによれば、発掘調査地点は、扇状地帯—旧中州にあたっており、中央部が高く、両端が旧河道に向かって低くなっていくところにあたっていた。すなわち、当初考えた旧河道、あるいは開析谷ではないかという想定は、違っていたのである。それでは、どうしてここに阪神大水害の被害が集中したのであろうか。阪神大水害の際の被害状況をもう一度見直してみよう（第31図参照）。西岡本1丁目遺跡に大きな被害をもたらせた洪水流は、阪急電車神戸線が住吉川を横断するところの少し上流側にあたっていた。当時の被害記録に目を通すと、河川にかかる橋梁に流木や礫が詰まり、洪水流をダムアップしたことによる主要な原因があるという。すなわち、現在の地形分類でこの場所が旧河道ないし開析谷に見えるのは、洪水の結果であり、それ以前には異なる微地形環境を示すところであったと考えられるのである。現在の地形分類図はあくまでも現在のものであり、過去の状況を示した復原図ではないことを強く知らされる結果となった。

さて、相対的に凹地となっていた旧河道に堆積した黒色シルト質極細砂 G 4層および G 6層（注：兵庫県教育委員会の命名であり、筆者の地層命名と異なる）の¹⁴C年代測定結果によれば、 $2,310 \pm 80$ y.B.P. (N-5049) と $3,180 \pm 60$ y.B.P. (N-5050) が得られている。この時期は、先に述べた本庄町遺跡の後背湿地形成期との関わりで興味深い。また、この地域だけでなく、瀬戸内海沿岸平野の各地で類似の年代が得られており、今後検討していく価値がある。

次に、b. の問題を検討しよう。地形学や地質学の分野では、洪水の際などに堆積した土砂が、どのように地層として認識されるかといった問題については、意外にも検討された例が少ない。このため河川工学や現在の災害の研究と一般的な地質学や地形学の研究との間に埋められないギャップが存在していた。すなわち、考古学の発掘調査の際に観察される10~10²年オーダーの地層の検討が最も立ち後れていたわけである。近年、ようやくこの点が指摘されるようになり、考古学と災害研究、地形学、地質学分野の研究会が開催されるようになりつつある。

さて、西岡本1丁目遺跡は、阪神大水害の際に最も被害の著しいところであった。ここでは、断面図に記されたように、2.2mを越える黄灰色の細砂～粗砂が堆積していた。堆積構造は明確でなく、狭い範囲に限るとマッシュといえる状態であった。もちろん、水害後の復旧はなされたであろうから、上部が欠損している可能性は高い。しかしながら、全体としては、人為的な改変は観察されず、堆積学的には典型的な溢流堆積の様子を示している。また、地形学的には自然堤防が形成されたことになる。西岡本1丁目遺跡の方がやや上流部における堆積の様相を示しているものの、先に述べた本庄町遺跡の下層に位置する自然堤防とかなり類似しているといって良い。いずれの場合もその層相からは、従来「地山」とされていたものにあたる。今回の調査においても、事前に「地山」に関する疑いや阪神大水害のデータの入手がなされていなければ、従来と同じように「地山」として調査を打ち切っていた可能性が高い。誰が現地表面下2m以深に昭和13年の地表面が存在していると想像できたであろう。

おわりに

本庄町遺跡と西岡本1丁目遺跡は、従来の概念によれば、その本質が見逃され易い遺跡であった。発掘調査の新しい波によってかろうじてそれを免れたといつても良いであろう。今後の沖積平野の調査に少しでも警鐘となることを願ってやまない。

参考文献

- 藤田和夫 (1986) 「六甲変動、その発生前後—西南日本の交差構造と第四紀地盤変動—」
『第四紀研究』7-4
- 高橋 学 (1986) 「芦屋川・佐吉川流域の地形環境」、兵庫県教育委員会編『北芦木遺跡』所収
- 高橋 学 (1989 a) 「埋没微地形の地形環境分析」、『第四紀研究』27-4
- 高橋 学 (1989 b) 「戎町遺跡の地形環境分析」、神戸市教育委員会編『戎町遺跡発掘調査報告書』所収
- 高橋 学 (1990 a) 「郡家遺跡の地形環境分析」、神戸市教育委員会編『郡家遺跡発掘調査報告書』所収
- 高橋 学 (1990 b) 「播磨灘沿岸平野の地形環境と土地開発」、今里幾次先生古希記念論集編集委員会編『播磨考古学論叢』所収

第6節 土壤中の微化石分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

本庄町遺跡は、神戸市東灘区本庄町に所在し、現在の海岸線より約800mほど内陸に入った低地（標高約3.0m）に位置する。本遺跡では、縄文時代・弥生時代末～古墳時代初頭（2面）・中世・近世とされる合計5面の遺構面が検出されている。この中で弥生時代末～古墳時代初頭とされている遺構面は、不定形小区画の水田跡が検出されており、さらにこの水田面では無数の足跡が認められたとのことである。

今回の調査は、本遺跡における稲作について自然科学的に検討することを目的とし、弥生時代末～古墳時代初頭の水田層とされる層位の土壤試料を中心に珪藻・花粉・植物珪酸体の各微化石分析を行う。なお、各微化石分析の実施点数は珪藻分析8点、花粉分析6点、植物珪酸体分析4点である。

2. 試料

試料は、本庄町遺跡の西壁断面から発掘担当者により層位サンプルとして採取された8点で、弥生時代末～古墳時代前期の水田面より下位の土層が対象となっている。試料の採取層位と遺構面の層位を断面図として第36図に示す。なお、第36図に示した断面図および試料の層相は、添付試料に基づいて作成している。また、この断面図を基に試料が採取された⑥～①層の模式柱状図を作成した（第37図）。この模式柱状図には、各微化石分析試料の採取位置および当社において分析時に観察した試料の層相を示している。

なお、珪藻分析は8点全点を分析対象試料としたが、花粉分析及び植物珪酸体分析は分析目的や層相を考慮して、それぞれ6点と4点を選択した。また、水田層とされる①層からその下位の③層までの3試料については、花粉分析と同時に栽培型のイネ属の比率を検討するイネ属同定を加えた。

3. 硅藻分析

3-1. 分析方法

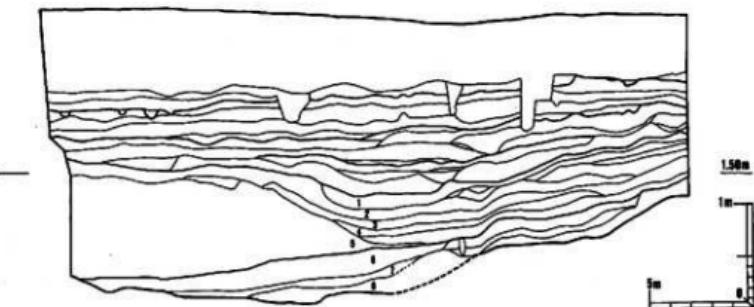
珪藻化石の抽出は、以下に述べる方法で行った。

試料を湿重で5.8～10.7g秤量し、過酸化水素水(H_2O_2)と塩酸(HCl)で加熱処理し試料の泥化と有機物の分析・漂白を行う。分散剤を加え蒸留水で満たし、自然沈降法で上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。上澄み液が透明に近くなるまでこの操作を繰り返す。次に、L字形管分離法で試料中に含まれる砂を除去する。検鏡し易い濃度に希釈した後、マイクロビペットで適量計り取りカバーガラス上に滴下し、攝氏50～55度で乾燥させる。

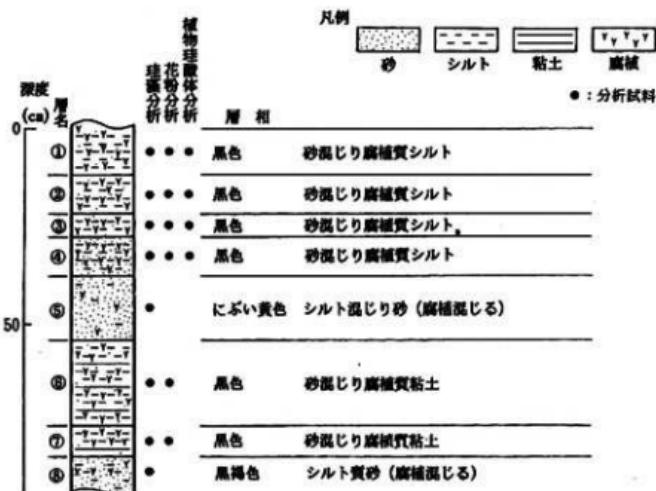
乾燥後、ブリューラックスで封入する。

検鏡は、油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する。同時に珪藻殻の保存度（完形殻数／総数×100）についても観察を行う。なお、珪藻殻が半分以上破損したものについては同定・計数を行っていない。

珪藻の種の同定は、K. Krammer&Lange-Bertalot (1986・1988)などを用いた。なお、珪藻の生態性の解説を表4に示す。



第32図 本庄町遺跡 西壁断面土壤試料採取位置（層名を試料番号としている）



第33図 本庄町遺跡 西壁断面模式柱状図および分析試料の位置

表3 珪藻の生態性

分類		適応性	環境 (E)	
淡水に適応する種	硫酸生種 (Polyhalophiles)	硫酸濃度40,000mg/l以上に出現するもの	生息地熱帯海岸、海水湖	
	真硫酸生種 (Eukalobion)	硫酸濃度30,000mg/l~40,000mg/lに出現するもの	一般淡水 (ex 大陸棚及び大陸棚丘岸の海城)	
	中硫酸生種 (Mesohalophiles)	硫酸濃度10,000mg/l~30,000mg/lに出現するもの	河口・内湾・沿岸・海水湖・港	
	硫酸生種 (Oligohalophiles)	硫酸濃度500mg/l以下に出現するもの pH 7付近に出現。pH 7以下でもよく生育するもの 硫酸-不活性種 (Inertolites)	淡水-好中性種 (Neophaeolidium) (I.1) 硫酸-不活性種 (Inertolites) (I.2) 硫酸-嗜酸性種 (Alphelia) (I.3) 硫酸-アルカリ性種 (Alkaliphiles)	一般淡水・流域、海水湖・港、河川・内湾・海水湖
	pH に特徴的な種 (Euryhalophiles)	硫酸濃度から硫酸濃度まで広い範囲の硫酸濃度に適応して出現する種	一般淡水~汽水域	
	真酸性種 (Acidophiles)	pH 7以下に出現。pH 5.5以下でもよく生育するもの	沼澤・湿地・大口湖 (酸性水)	
	好酸性種 (Acidophilic)	pH 7付近に出現。pH 7以下でもよく生育するもの	沼澤・湿地・泥炭地	
	pH 不活性種 (Inertolites)	pH 7付近で最もよく生育するもの	一般淡水 (ex 淡水・流域・河川)	
	好アルカリ性種 (Alkaliphiles)	pH 7付近に出現。pH 7以上でも最もよく生育するもの	アルカリ性水域 (少ない)	
	淡水に対する適応性	淡水にのみ出現するもの	淡水のない沼澤・池沼	
淡水に対する適応性	好淡水性種 (Dianastatic)	淡水に特徴的であるが、淡水にも出現するもの	淡沼・池沼・流れの穏やかな川	
	淡水不定性種 (Indifferent)	淡水にも海水にも普通に出現するものの	河川・川・池沼・湖沼	
海水に対する適応性	好淡水性種 (Dianastatic)	淡水に特徴的であるが、淡水にも出現するもの	河川・川・小川・上流域	
	真海水性種 (Neophaeolidium)	海水域にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・浜島・上流域	
海水	好気性種 (Aerophilus species)	好気性種 (Aerophilus species)	□土壌表面層、□葉縁や根毛上のコケに付着、□口吻に付着、□の葉の光沢の下に付着、□漂着した竹の材質に付着、□漂着したコケに付着、□水草表面のコケに付着、□ぬれ床に付着、□ぬれ床に浮いたコケや葉上の材質に付着、□泥炭表面に浮いたコケに付着などさまざまな生活形態がある。	

注1) 少量の部分がある方がよく生育するもの (注2) 少量の部分があつてもこれによく耐えることができるもの (注3) 少量の部分にも耐えることができないもの (注4) 適応性は田中・吉田・中島、1977 真核微生物学調査報告書 I p.116~135 を基に一部整理、整理については加筆して作成した)

3-2. 結果

⑤~①層は、淡水生種のみから構成されているが、⑧~⑥層は、海水生種から汽水生種・淡水生種が混交して構成される。出現種数は25属・52種、13変種、種不明9種類の計74分類群である(表5)。珪藻化石の産状は、③層~①層は多く含まれるが、⑧層~⑤層は少ない。また、完形殻の出現率は、③層~①層は75%以上で高く、それ以外は低い(第38図)。次に珪藻化石群集の特徴を述べる。

③層~④層は、珪藻化石の含有が少ないと、⑤・⑥各層は *Pinnularia* spp.などの淡水生種、⑧層~⑥層は、*Grammatophora oceanica*などの海水生種を含む。とくに、⑧層は、表2をみて明らかのように淡水生種に比べ、海水生種から汽水生種が多産し、海水浮遊性の *Biddulphia* sp.A、海~汽水生で浮遊性の *Cyclotella striata-C. stylorum*、汽水付着性の *Navicula yaeyensis*などを含む。

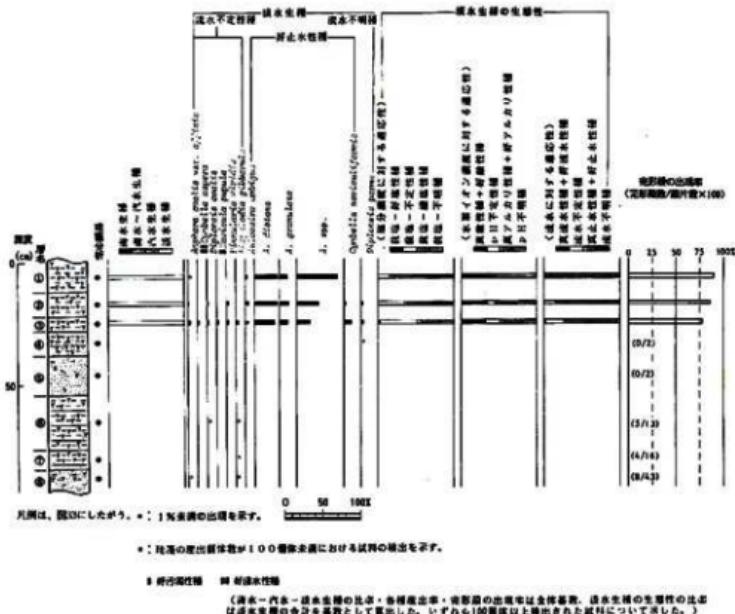
③層~①層は、共に近似した珪藻化石群集であり、淡水浮遊性の *Aulacosira distans*、*A. granulata*、*A. spp.*が優占することにより特徴づけられる。これらの種のうち *Aulacosira distans*は、湖沼や沼澤湿地の環境を指標する可能性が大きいことから、湖沼沼澤湿地指標種群とされている(安藤、1990)。また、*Aulacosira granulata*は、水深が約1.5m以上ある湖沼環境を指標する可能性が大きいことから、湖沼浮遊性種群とされている(安藤、1990)。

3-3. 堆積環境

⑦層～④層は、珪藻化石の含有数や完形殻の出土率も低く、堆積環境を推定する試料としては、不適当な試料であった。⑧層は、化石の含有数は⑦層～④層と比較すると多かったが、完形殻数は少なかった。これに対して、③層～①層は、完形殻の出現率も高く現地性の群集と考えられる。珪藻化石分析から推定される堆積環境を下位より述べると、以下のようなになる。

⑧層のシルト質砂層は、淡水生種が少なく海水生種・汽水生種が多く産出したことから海水の影響が考えられる。しかし、⑦～⑥層の砂混じり腐殖質粘土層や⑤・④層の砂層や植物遺体混じりシルト質砂層は珪藻化石も非常に少なく、殻の保存も悪かったので、堆積環境については推定するには至らなかった。

③層～①層の砂混じり腐殖質シルト層からは、湖沼沼澤湿地指標種群が優占したこと、好酸性種の割合が高かったことから、水が停滞して弱酸性を呈した止水域が形成されたことが推定できる。とくに、①層上面が弥生時代末～古墳時代初頭の水田面とされることから当時このような弱酸性を呈した流れの穏やかな水域を利用して、稻作を行った可能性がある。



第34図 本庄町遺跡 硅藻化石群集の変遷

4. 花粉分析

4-1. 分析方法と結果の表示法

堆積物中に含まれる花粉・胞子化石は、湿重約10~15 gの試料中からHF処理→重液分離 (Zn Br₂比重2.2)→篩別→アセトトリシス処理→KOH処理の順に物理的・化学的な処理を施して分離・濃集する。処理後の残渣は、よく攪拌した後にマイクロビペットで適量をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成する。

検鏡は光学顯微鏡でプレパラート全面を走査し、全ての種類 (Taxa) の同定・計数を行う。イネ属花粉化石は、ノマルスキー微分干渉装置を使用し、イネ科花粉化石の外膜表面微細構造・発芽孔周辺の肥厚状況および花粉粒径を基準として同定する。

分析結果は検出個体数を一覧表として表示する。統計学的な処理が行える試料は、相対的な出現率を求め花粉化石群集変遷図として表示する。出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出する。なお、複数の種類をハイフォン (-) で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。イネ属花粉化石の同定(イネ属同定)の結果は、鈴木・中村(1977)にしたがい、イネ科花粉化石総数を基数としたときのイネ属花粉化石の百分率であるイネ属比率で示す。

4-2. 分析結果

分析結果を表6に、花粉化石群集変遷図を第39図に、イネ属同定の結果を表7に、イネ科出現率・イネ属比率・水生植物の消長を第40図にそれぞれ示す。

本庄町遺跡の西壁断面で得られた花粉化石群集は、砂を主体とする堆積層の⑤層を境として変化する。⑦・⑥層の木本花粉は、マツ属とコナラ属アカガシ亞属が高率に出現し、次いでコナラ属コナラ亞属が出現する。草本花粉ではイネ科が約20%出現する。また、水生植物のガマ属・ミクリ属・サンショウモを伴う。

④層より上位になると木本花粉は、アカガシ亞属が最も高率に出現し、次いでマツ属・スギ属・コナラ属・クリ属ーシノキ属が多産する。このうち、スギ属・クリ属ーシノキ属は、上位に向けて増加傾向を示す。この他マキ属・ヤマモモ属を伴う。草本花粉は、イネ科が最も高率に出現する。栽培植物とされるイネ属は③層より上位で連続して検出される。また、水生植物のガマ属・ミクリ属・オモダカ属・ミズアオイ属を伴う。

4-3. 考察

(1) 花粉化石からみた稲作について

栽培植物とされるイネ属は③層より上位で検出される。ところで、①層上面は弥生時代末~古墳時代初頭の不定形小区画水田造構面に相当する。また、②層におけるイネ属の出現傾向は

表5 本庄町遺跡 花粉分析結果

種類 (Taxa)	属名	①	②	③	④	⑤	⑥
木本花粉							
マキ属	—	2	5	2	—	—	—
モミ属	6	3	8	2	5	4	4
ツガ属	3	3	5	4	1	1	1
マツ属複数種東亞属	6	3	6	18	8	10	
マツ属 (不明)	9	20	25	14	44	139	
コウヤマキ属	4	4	7	3	2	3	
スギ属	41	20	19	7	9	8	
イチイ科一イスガヤ科一ヒノキ科	12	9	3	3	7	4	
ヤマモモ属	2	—	1	2	—	—	
サワグルミ属	2	2	—	—	—	1	
クマシダ属一アサガ属	7	4	7	6	4	2	
カバノキ属	—	—	—	—	1	—	
ハンノキ属	2	—	—	—	—	—	
ブナ属	1	2	1	1	1	1	
コナラ属コナラ亜属	31	37	51	45	17	51	
コナラ属アカガシ亜属	68	52	68	60	68	64	
クリ属一シノキ属	30	17	5	8	13	2	
ニレ属一ケヤキ属	8	4	2	4	5	10	
エノキ属一ムクノキ属	4	4	1	1	—	1	
モチノキ属	1	—	—	—	—	—	
トチノキ属	—	—	—	1	1	1	
ブドウ属	1	1	—	—	—	—	
ウコギ科	—	—	—	1	—	—	
ツツジ科	—	1	—	—	—	—	
草本花粉							
ガマ属	3	6	5	14	29	15	
ミクリ属	—	2	2	—	1	—	
オモダカ属	5	—	1	—	—	—	
イネ科	126	57	63	35	64	92	
カヤツリグサ科	30	16	20	14	18	42	
ミズアオイ属	—	2	—	—	—	—	
クワ科	4	2	—	1	2	2	
サナエタデ節一ナギカミ節	1	—	1	—	1	2	
アカザ科	1	—	—	—	—	—	
バラ科	—	1	—	—	—	—	
マメ科	1	1	—	—	1	—	
ミツハギ属	—	—	—	—	—	1	
セリ科	2	1	3	1	—	—	
ヨモギ属	10	10	12	6	13	20	
他のキク亜科	6	3	2	1	1	—	
不明花粉	28	14	12	12	9	14	
シダ類胞子							
イノモトソウ属	—	—	1	—	1	—	
サンショウモ	—	—	—	—	—	1	
他のシダ類胞子	32	23	16	2	9	7	
合計							
木本花粉	238	188	214	182	186	302	
草本花粉	189	101	109	72	130	174	
不明花粉	28	14	12	12	9	14	
シダ類胞子	32	23	17	2	10	8	
他花粉・胞子	487	326	352	268	335	498	

①層と類似している。これらのこと考慮すると、②・①各層が堆積した頃は、稲作が営まれていた可能性がある。

現在の水田耕土における花粉の動態研究を行った結果、イネ科花粉の中でイネ属花粉が30%以上検出されるならば、その近傍で現在に近い集約度で稲作が営まれていたとみなしてよいとされている（鈴木・中村,1977）。しかしながら、②・①各層のイネ属比率は15%前後である。この原因は、稲作の様態が現在と異なっていたことを示唆しているのかもしれない。しかしながら、稲作の様態に関しては現時点で、花粉分析結果のみから明らかにすることは充分でなく、今後の検討課題として残る。ただ、当時はイネ属以外のイネ科植物が付近に多かったとはいえるであろう。

なお、③層におけるイネ属の出現傾向は②・①各層と異なり、イネ属比率が4%と低率である。鈴木・中村(1977)が指摘しているように農耕に伴う擾乱の影響による花粉の下方移動などを考慮に入れると、③層で検出されたイネ属花粉は上層からの落ち込みの可能性がある。したがって、③層が堆積した当時に調査地点付近で稲作が営まれていた可能性は低い。

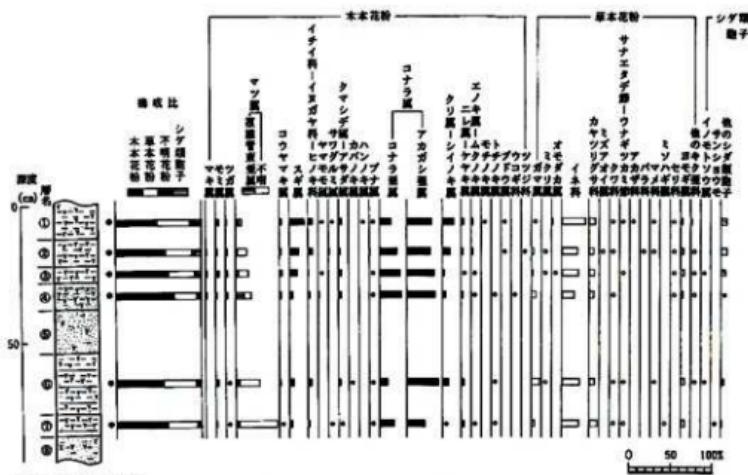
(2) 周辺植生について

縄文時代とされる遺構面より下位に位置する⑦層が堆積した当時は、常緑針葉樹のマツ属と常緑広葉樹のアカガシ亜属が卓越する森林が成立していたと考えられる。これらの樹種以外にも当時は、広葉樹のコナラ亜属・クリ属・シノキ属や常緑針葉樹のスギなどが主な森林構成種として存在していたと推定される。

大阪湾周辺地域では約6,500年前頃に落葉広葉樹林から照葉樹林へと移行し、その後は両者の逆転が起こらなかったとされている（前田,1980）。このことから、今回の花粉化石群集は、少なくとも約6,500年前以降の森林植生を反映していることが示唆される。ところで⑦・⑥各層で多産するマツ属は、調査地点周辺の局地的な植生を反映しているのか、あるいは空間的な広がりを持つ地域的な植生を反映しているのか現時点で判断できない。このことについては、周辺の花粉化石群集が今後さらに明らかにされた段階で再検討される必要がある。

そして④層から弥生時代末～古墳時代初頭とされる①層の頃になると、周辺地域の森林植生は若干変化し、アカガシ亜属を中心とする常緑広葉樹林と呼ばれる林分が成立していたと判断できる。また、スギ・クリ属・シノキ属が増加した可能性がある。さらに、当時は、暖温帯に育成するマキ属やヤマモモ属も森林を構成する種類として認められていたのであろう。

一方、調査地点付近の低地部では、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などの仲間がごく普通に育成し、比較的水深の浅い水域には水生植物が生育していたと判断できる。ただし、先に述べたとおり②層堆積後は稲作が営まれていた可能性がある。



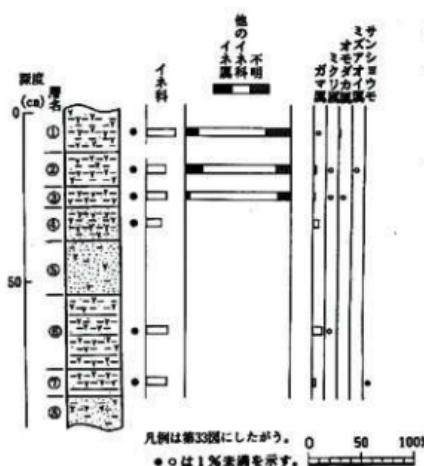
凡例は第33図にしたがう。

出現率は、木本花粉は木本花粉種群、草本花粉・シゲ理胞子は前者より不規則より不規則を除いた種を基準として百分率で算出した。なお、●は1%未満を示す。

第35図 本庄町遺跡 花粉化石群集の変遷

表6 本庄町遺跡イネ属比率%

層名	イネ属	他のイネ科	不明
①	12	64	24
②	16	70	14
③	4	84	12



第36図 本庄町遺跡 イネ科出現率・イネ属比率および水生植物の消長

5. 植物珪酸体分析

5-1. 分析方法

分析は、近藤・佐瀬（1986）の方法を参考にして次のように行った¹⁾。

湿重5 g前後の試料を過酸化水素水(H_2O_2)で泥化し、塩酸(HCl)を加えて有機物・鉄分を除去する。超音波処理(100w, 250kHz, 3分間)で土壤粒子を完全に分散した後に、沈定法で粘土分を除去し、重液分離法(ポリタングステイト、比重2.4)で植物珪酸体を分離・濃集する。これを封入(封入剤：ブリューラックス)し、プレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡(簡易偏光装置装置)下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

検出された植物珪酸体の出現傾向から生育していたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図を作成した。種類(Taxa)毎の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

5-2. 結果

計数結果および植物珪酸体組成の層位の変化を表8と第41図に示す。

イネ科葉部起源の植物珪酸体は両地点の多くの試料で300個以上検出され、計測数が多い。その保存状態は、短細胞珪酸体で良好であったが、機動細胞珪酸体ではその表面に多数の小孔(溶食痕)が生じているものが認められる。また、構成比は短細胞珪酸体の割合が高い。

栽培植物とされるイネ族イネ属は、③層から上位の試料で検出されるが、検出されはじめる層位は両珪酸体で異なる。すなわち、短細胞珪酸体は②層から上位で、機動細胞珪酸体は③層から上位である。短細胞珪酸体の出現率は、①層で0.4%、②層で2.1%である。一方、機動細胞珪酸体の出現率は①・②層が約22.3%、③層が2.7%である。

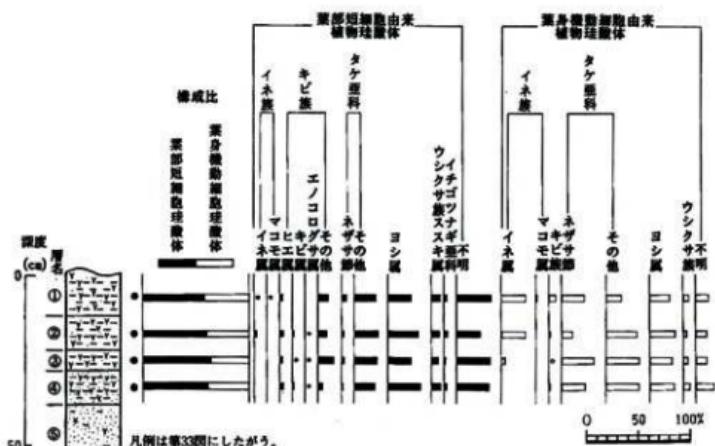
このほかに検出された種類は、短細胞珪酸体でイネ族マコモ属、キビ族(ヒエ属・キビ属・エノコログサ属)、タケア科(ネザサ節・その他)、ヨシ属、ウシクサ族(コブナグサ属・スキ属)、イチゴツナギア科、不明(キビ型・ヒゲシバ型・ダンチク型)、機動細胞珪酸体でイネ族マコモ属、キビ族、タケア科(ネザサ節・その他)、ヨシ属、ウシクサ族、不明である。また、植物珪酸体組成の層位的な変化は、イネ族・キビ族を除いてあまり認められず、両珪酸体でタケア科(その他)、ヨシ属が高い割合を占める。

5-3. 考察

栽培植物とされるイネ属は、③層から上位の層で検出されたが、短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体とともに検出されたのは②層から上位の層である。

表7 本庄町遺跡 植物珪酸体分析結果

種類 (Taxa)	品名	①	②	③	④
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	1	5	—	—	—
イネ族マコモ属	2	—	—	—	—
キビ族ヒエ属	5	6	5	7	7
キビ族カビ属	—	3	2	3	2
キビ族ニコログサ属	—	2	2	2	2
キビ族(その他)	21	19	37	10	10
タケ属科ネゼサ属	10	4	5	3	3
タケ属科(その他)	47	51	54	43	43
ヨシ属	52	69	57	71	71
ウシクサチ族ススキ属	18	16	15	18	18
イチゴツナギ属科(その他)	5	7	3	4	4
不明キビ属					
不明ヒゲバ属	28	20	15	20	20
不明グンチク属	27	20	50	38	38
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	38	35	4	—	—
イネ族マコモ属	2	—	—	—	—
キビ族	11	2	1	2	2
タケ属科ネゼサ属	35	16	45	33	33
タケ属科(その他)	23	45	47	46	46
ヨシ属	33	38	32	34	34
ウシクサチ属	8	5	6	9	9
不明					
合計	20	16	15	25	25
イネ科葉部短細胞珪酸体	237	234	261	229	229
イネ科葉身機動細胞珪酸体	170	157	150	149	149
計	407	391	411	378	378



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数を基準として百分率で算出した。なお、*○は1%未満割合(Taxa)をあらわす。

第37図 本庄町遺跡 植物珪酸体組織成の層位の変化

ところで、植物珪酸体の出現率から稻作の有無を検討することは稻作耕土中の植物珪酸体の堆積過程が判明していない現状では議論の余地があるが、現在の稻作耕土におけるイネ属の出現率と比較することは稻作の有無を検討する上で有力な情報を提供すると思われる。現在の水田耕土におけるイネ属の出現率としては、近藤(1988)の調査例がある。それによれば、イナワラ堆肥連用(8年間、550kg/10a/年)の水田土壤表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率は16%を示すとされている。今回の分析結果では、①・②層で約22.3%、③層で2.7%の出現率が得られ、①・②層の出現率は現在の水田土壤表層における出現率と比較して高い率を示す。

以上より、②層から①層が堆積した当時には調査地点あるいは周辺で稻作が営まれていたことが示唆される。③層で検出された機動細胞珪酸体は、葉部の両珪酸体が検出されなかった点と③層が②層の直下である点を考慮すれば、耕作に伴う下方への落込みによってもたらされたものと思われる。このような状況は、イネ属花粉化石の出現率(本節前項参照)からも想定されている。

また、植物珪酸体組成からは④層から③層が堆積した当時に本遺跡の近辺にタケア科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亞科などのイネ科植物が生育し、イネ科植物の植物相を構成する種類に顕著な変化がなかったと推定される。一方、①層の頃にはなんらかの要因により本地点周辺でキビ属、エノコログサ属が生育しなくなり、マコモ属が生育するようになったのかもしれない。現在では、マコモ属、ヨシ属は低湿地などの湿潤な環境下に生育することが多い。そして、ネザサ節は地面に光の射す開けた場所に生育し(室井, 1960)、ススキ属やイチゴツナギ亞科の仲間は比較的乾いた場所に生育することが知られている。これらから、本地点の周間に存在した湿潤な場所にはマコモ属、ヨシ属が、畦畔や自然堤防などのやや高い場所にはネザサ節、ススキ属、イチゴツナギ亞科の仲間が生育していたと考えられる。

②層から下位の試料で検出されたキビ族(ヒエ属・キビ属・エノコログサ属)は、畑作物の栽培種を含む種類である。ただし、現状の植物珪酸体の分類では栽培種と野生種の判別が確立されていないため、本遺跡におけるキビ族の栽培の可能性については検討できない。今後、種子分析をあわせて実施して稻作以外の農耕についても検討する必要があろう。

* 1: 近藤・佐藤(1986)の方法は、植物体に形成される植物珪酸体全てを同定の対象とし、種類毎の出現率から過去の植生や栽培植物の有無を推定するものである。特に栽培植物の有無について検討する場合には、短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体について注目する必要がある。これは、イネ科植物の各種類における植物珪酸体の組成および生産量が異なる(近藤, 1988)ためである。例えば、稻(イネ属)では短細胞珪酸体よりも機動細胞珪酸体の割合が高いが、小麦(イチゴツナギ亞科オムギ族)などでは機動細胞珪酸体がほとんど形成されないことが知られている。

6. まとめ

③-①層が堆積する頃は、水の流れの緩やかな弱酸性を呈した水域であったと推定される。このような条件のもとで、②層・①層の堆積した頃に稻作が営まれていた可能性がある。

一方、縄文時代とされる遺構面の下位に堆積する⑦層の頃における周辺の森林植生は、マツ属とアカガシ亜属が卓越していたと考えられる。その後、弥生時代末～古墳時代初頭になると常緑広葉樹が成立したと推定される。なお、⑧層の段階などで認められた海水生や汽水生の珪藻化石の由来が海進などによる海水の影響であるのか、二次堆積物とともに運搬されたものであるのかについては、本分析結果のみからは判断し得なかった。今後、⑧層付近より出土した有機質遺体などの¹⁴C年代測定などを経て判断されるべきものと考える。

引用文献

珪藻分析

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地誌 vol.42, p.73-88.

Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1986) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2 (1), p.1-876.

Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1988) Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2 (2), p.1-585.

田中弘之・吉田武雄・中島啓治 (1977) 奥利根地域の珪藻類. 群馬県奥利根地域学術調査報告書Ⅱ, P.114-135.

花粉分析

前田保夫 (1980) 縄文時代の海と森. 著書書評, p.238.

鈴木功夫・中村 純 (1977) イネ科花粉の堆積に関する基礎的研究. 文部省科研特定研, 古文化財・稻作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究－中間報告－(中村純編), p.1-10.

植物硅酸体分析

近藤錦三 (1983) 植物硅酸体 (プラント・オパール) 分析の農学および理学への応用. 十勝農学該話会誌, 第24号, p.66-83.

近藤錦三 (1988) 十二遺跡の植物硅酸体分析. 藩野型遺跡群十二遺跡発掘調査報告書, p.377-383.

近藤錦三・佐瀬謙 (1986) 植物硅酸体分析. その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.

室井耕 (1960) 竹林の生態を中心とした分布. 富士竹類植物面報告, p.103-122.

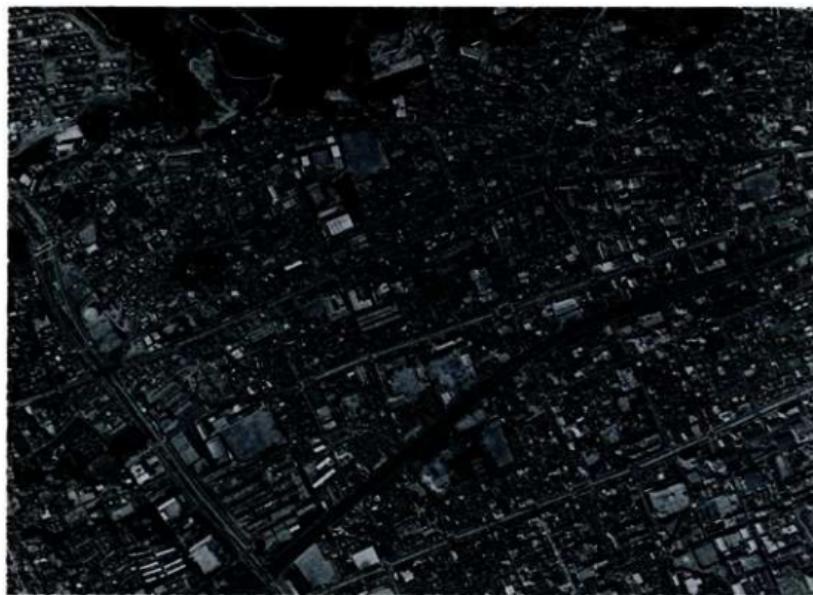
第3章 第7節、第8節は
公開していません

第4章 まとめ

- 1、本庄町遺跡では、縄文時代から近世にかけての遺構面を5面検出した。推定できた各検出面の時期は、第1検出面は近世以降、第2検出面は14世紀前半以降、第3検出面は弥生時代後期以降、第4検出面は弥生時代後期以降、第5検出面は縄文時代後期であり、第1と第2検出面の間には18世紀以降の包含層が、第2と第3検出面の間には13世紀前半以降の包含層が第4と第5検出面の間には弥生時代前期の包含層が存在した。また第5検出面からは縄文時代前期末～中期前半の遺物も出土している。
- 2、本庄町遺跡では昭和59年（昭和60年「考古學會報告」）・昭和61年（本報告）・昭和63年（県営住宅建設に伴う確認調査）と発掘調査が実施され、昭和59・61年の調査の際に洪水砂でパックされた水田が見つかっている（第6図参照）。昭和63年の調査では近世と思われる畝状遺構が確認できただけで、それ以前の遺構は確認されなかった。土層が安定していることから、他の地点で水田を埋没させた洪水砂はここまで及んでいないものと考えられる。
- 3、今回の調査で、本庄町遺跡では初めて縄文時代の遺構が見つかった。見つかった貯蔵穴から出土した堅果類はイチイガシ・アカガシといったアカガシ亜属（常緑広葉樹）を中心で、それに少量のクヌギ・スダジイ・クリなどが含まれる。花粉分析による縄文時代の植生復元によれば、遺跡周辺ではマツ属・アカガシ亜属が卓越し、この他コナラ亜属・クリ属・シイノキ属・スギなどによって森林が構成されていたことが推定されており、堅果類の出土傾向や樹種同定結果とも合致している。また堅果類の中で最も多く出土したイチイガシは、アカガシ亜属の中で唯一アクリ抜きの要らないものであり、このような低湿地に作られた貯蔵穴の用途がドングリなどの乾燥を防ぎ一冬程度の短期間生貯蔵であったことの裏付けともなる。
- 4、出土遺物で注目されるものは縄文時代の土器と若干量の石器がある。土器は前期末～中期前半と後期初頭～前葉にかけての2時期に大別できる。前者は里木式、船元式といった瀬戸内地方をその分布の中心とする土器群に占められており、西からの影響を強く受けていることが判る。一方後者の土器群は縄帶文土器に特徴付けられる北白川上層式を中心に構成されており、近畿地方としての地域色を強めている。
- 5、調査地点の地形は、縄文時代には砂層をベースとした低湿な緩斜面で貯蔵穴などが設けられていた。その後この辺りは後背湿地化し、弥生時代以降には堆積したシルト層をベースに水田が営まれた。そして中世の頃にはほぼ平坦化し、水田や近世以降には畠地として利用された。ここが居住地となったのは、現代に入ってからのことであろう。

図 版

図版一 西岡本一丁目遺跡 遺跡の位置



遺跡の位置



遺跡の遠景

図版二 西岡本一丁目遺跡 全景 溝



調査区の全景

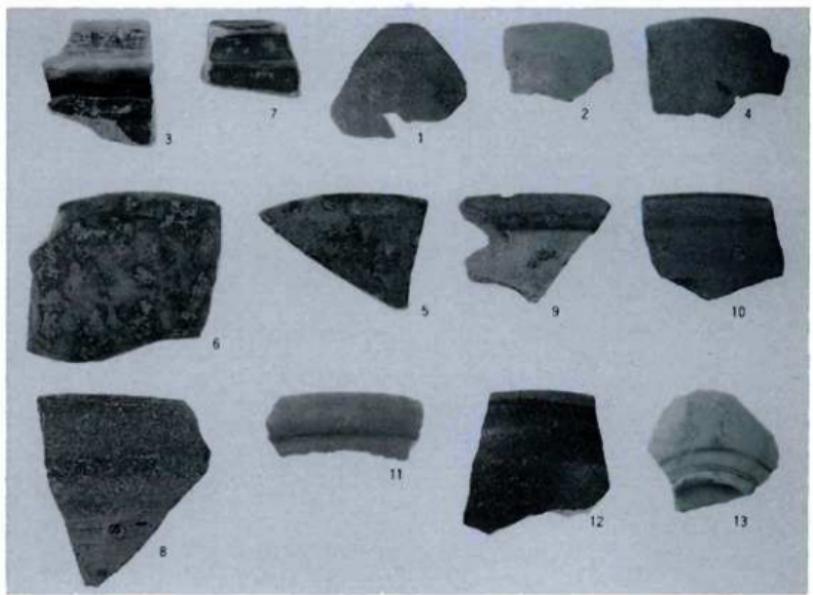


溝

図版三 西岡本一丁目遺跡 獣足跡 遺物



獣足跡



出土土器

図版四 本庄町遺跡 遺跡の位置 第1検出面



遺跡の位置



第1検出面 彫状遺構〔5～8区〕(南から)



第3検出面 水田跡〔3・4区〕(東から)



第4検出面 水田跡〔全景〕(北から)

図版六 本庄町遺跡 第4検出面



第4検出面 水田跡〔5～7区〕(北から)



第4検出面 水田畦畔 断面



第4検出面 水田面上の足跡



第5検出面 全景（北から）

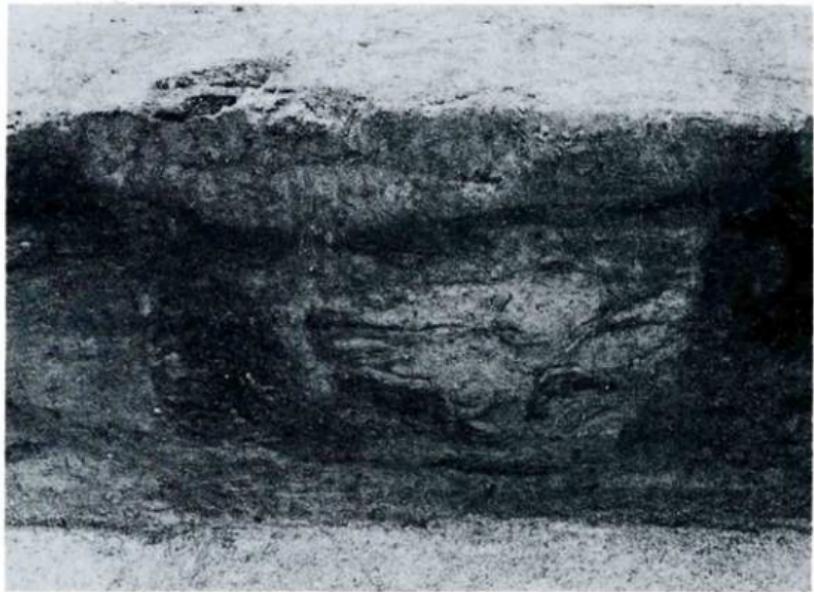


第5検出面〔1～4区〕（南から）

図版八 本庄町遺跡 第5検出面土壤

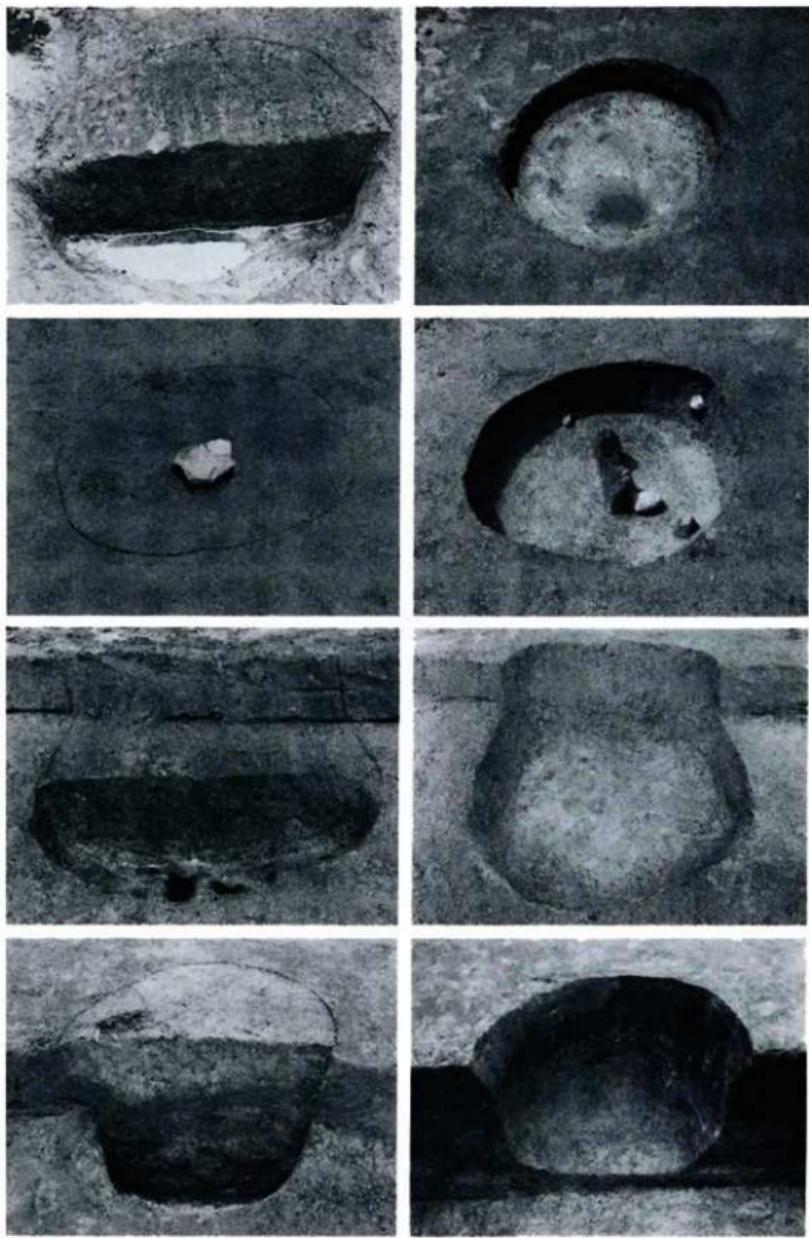


第5検出面 SK-4 半截状況（東から）



第5検出面 SK-6 断面（北から）

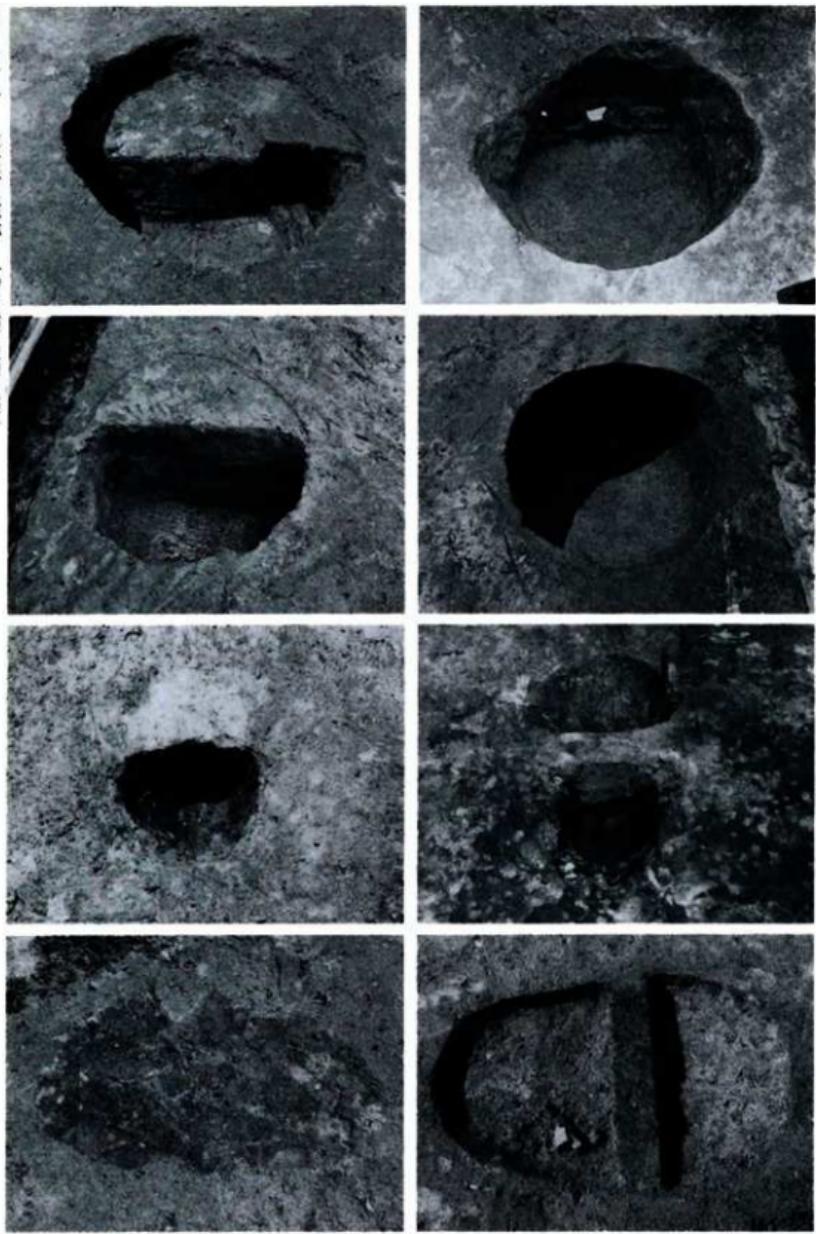
図版九 本庄町遺跡 第5検出面土壤



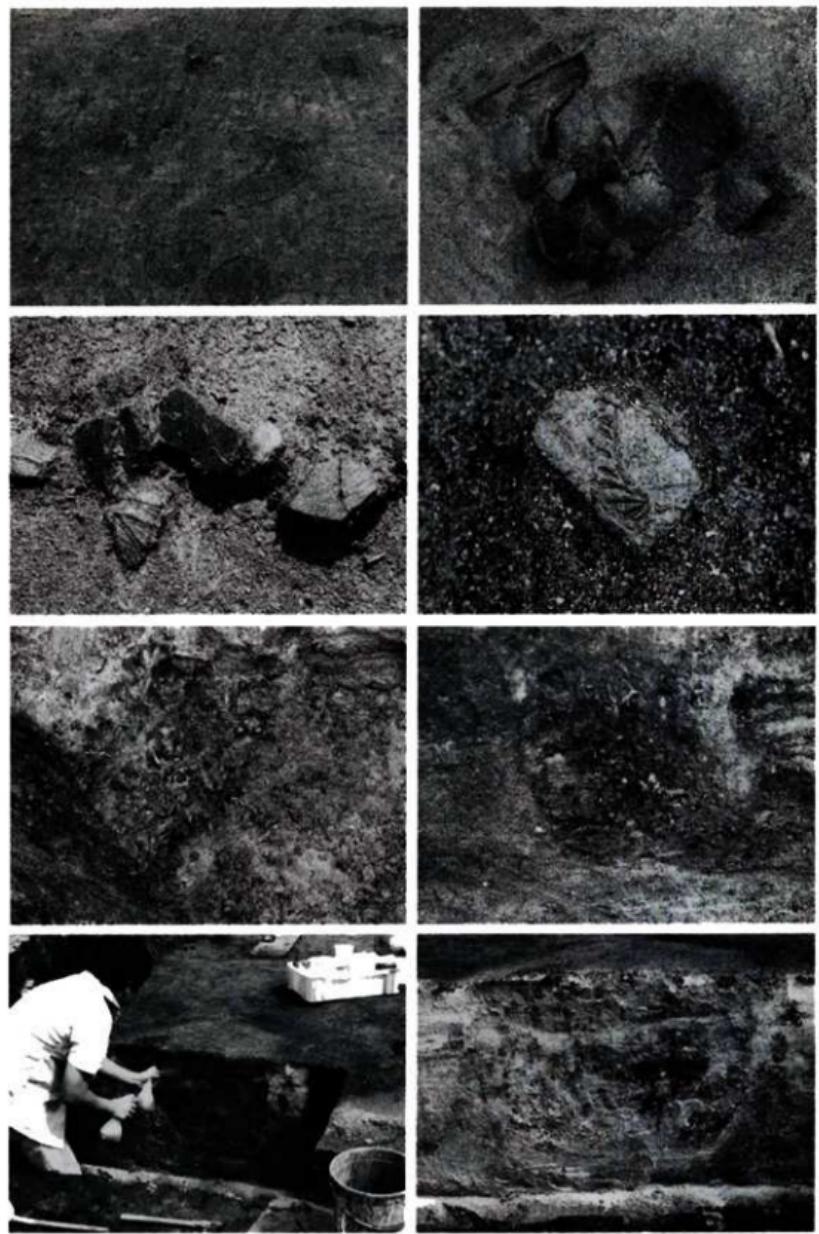
第5検出面 1. SK-3 半裁状況（東から）2. SK-3 完掘状況（東から）

3. SK-4 検出状況（北から）4. SK-4 完掘状況（南から）5. SK-5 半裁状況（西から）
6. SK-5 完掘状況（西から）7. SK-6 半裁状況（北から）8. SK-6 完掘状況（北から）

図版十 本庄町遺跡 第5検出面土壤



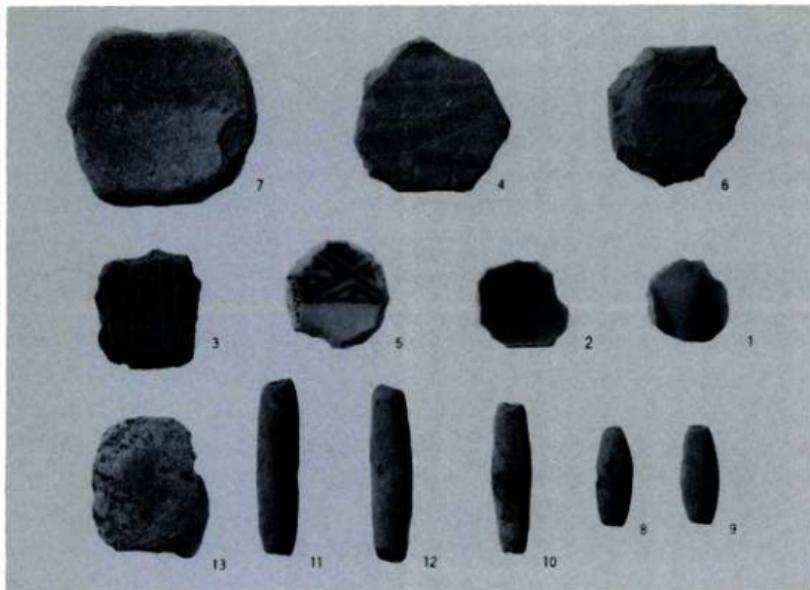
第5検出面 1. SK-7半截状況（北から）2. SK-7完掘状況（東から）
3. SK-9半截状況（南から）4. SK-9完掘状況（北から）5. SK-8半截状況（北から）
6. SK-10断面（南から）7. SK-11検出状況（西から）8. SK-11掘削状況（東から）



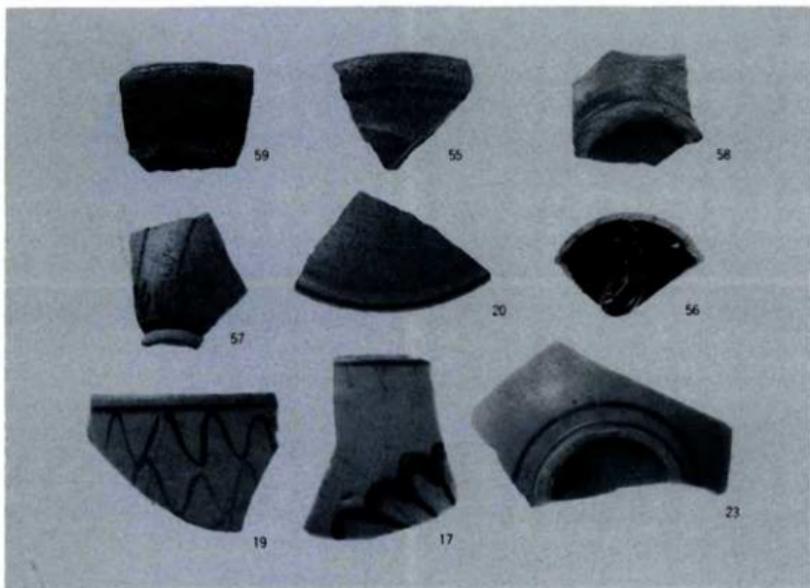
第5検出面 1. ピット検出状況（東から） 2-4. 裝文土器出土状況

5-6. SK-6 どんぐり出土状況 7-8. SK-6 断面剥ぎ取り状況

図版十二 本庄町遺跡
遺物1・2

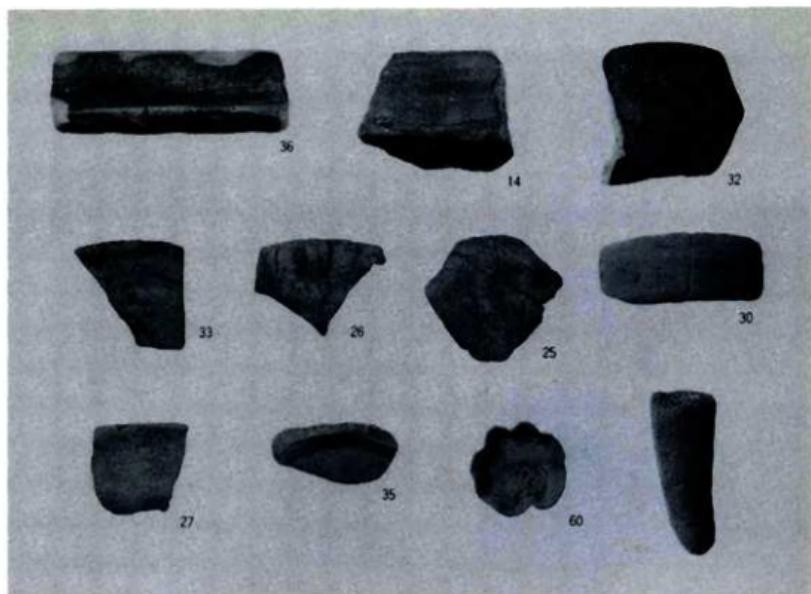


出土遺物1

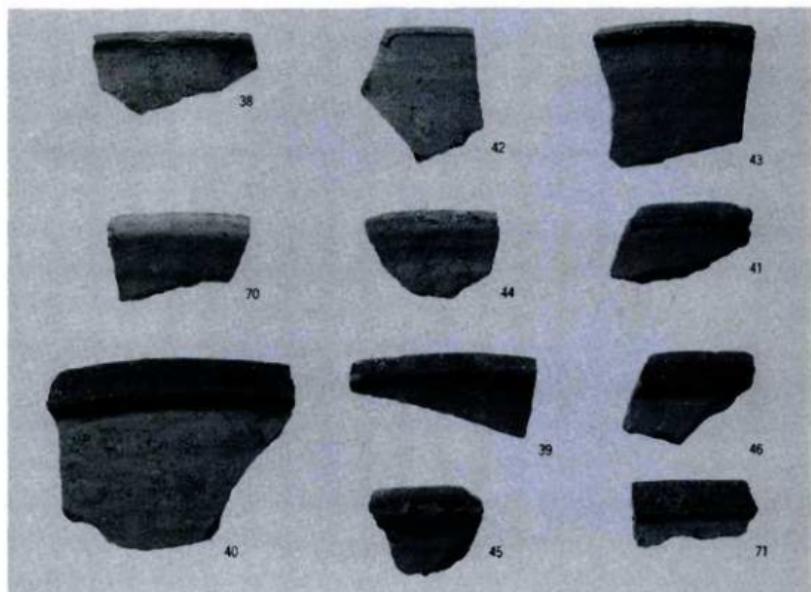


出土遺物2

図版十三 本庄町遺跡
遺物3・4



出土遺物3

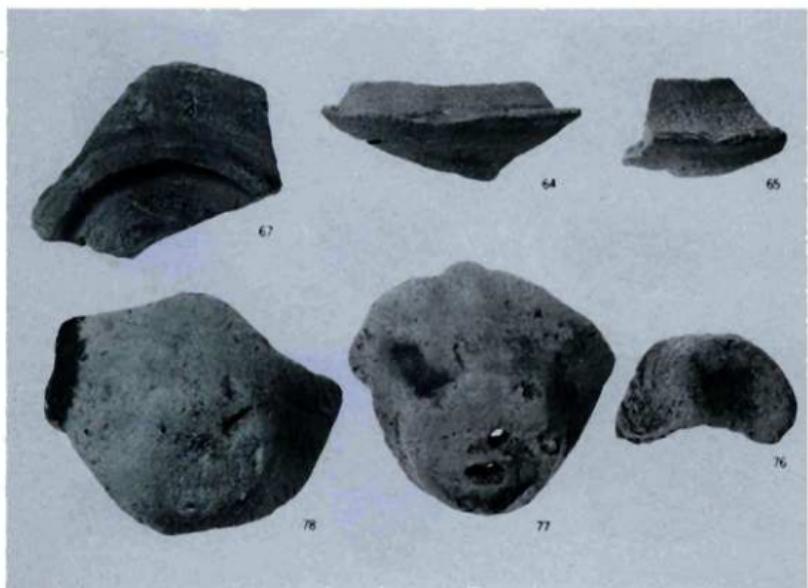


出土遺物4

図版十四 本庄町遺跡
遺物5・6



出土遺物5



出土遺物6



出土遺物7



出土遺物8

図版十六 本庄町遺跡
遺物9・10



94

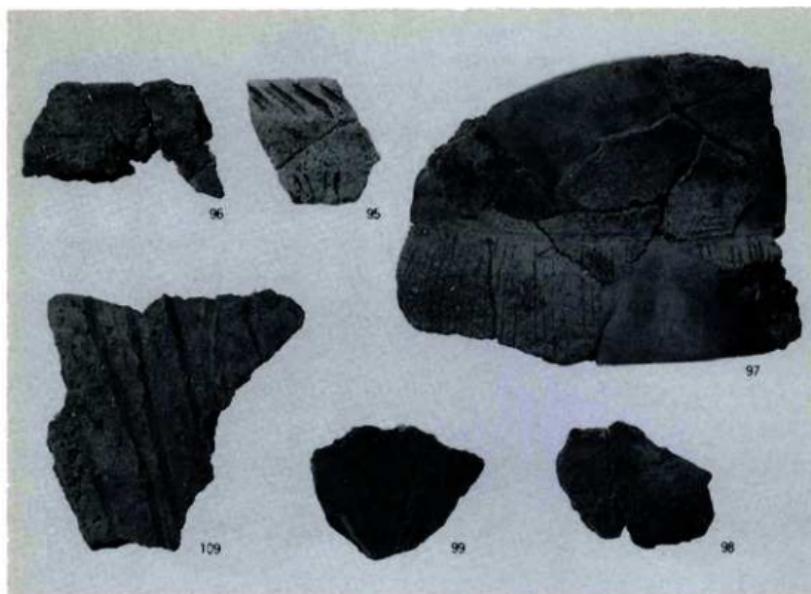
出土遺物9



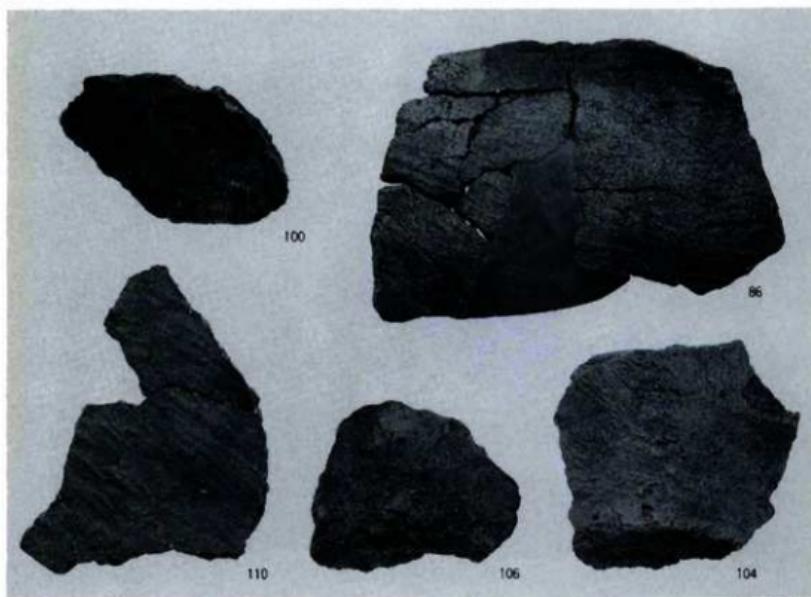
83

出土遺物10

図版十七 本庄町遺跡
遺物11・12

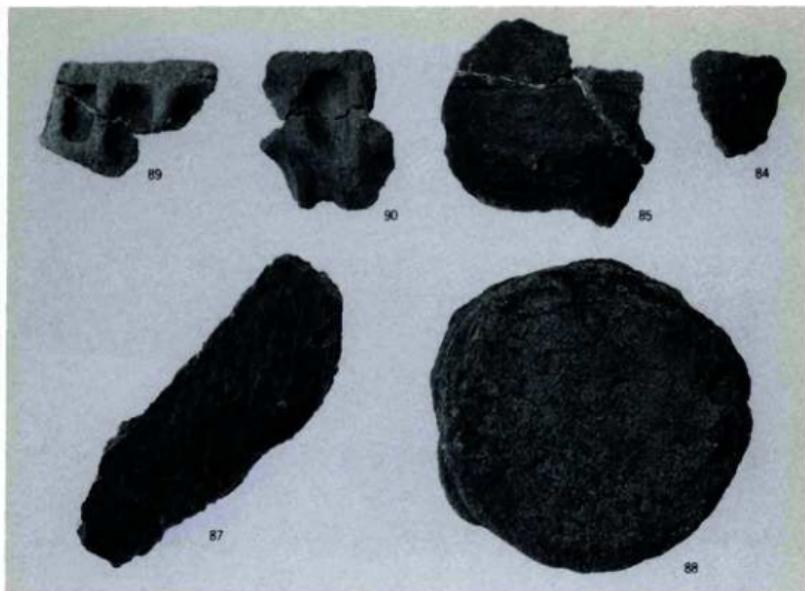


出土遺物11

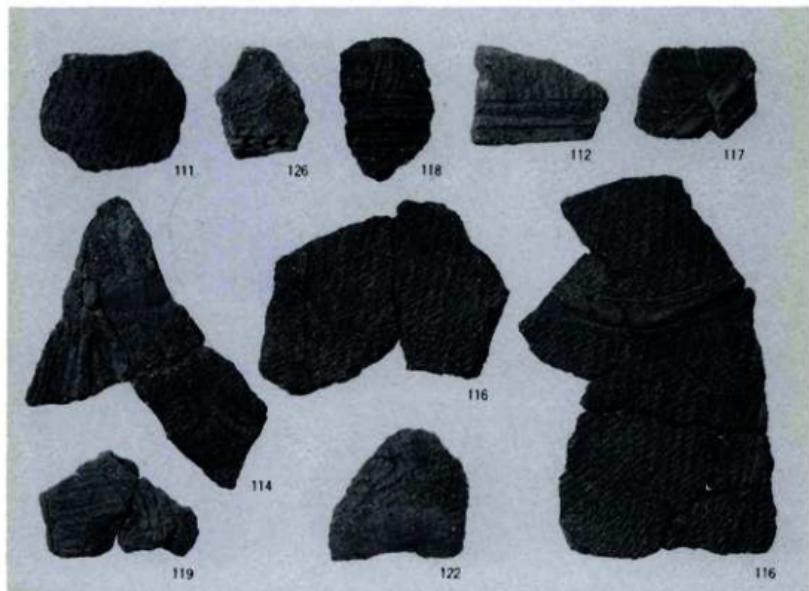


出土遺物12

図版十八 本庄町遺跡
遺物13・14

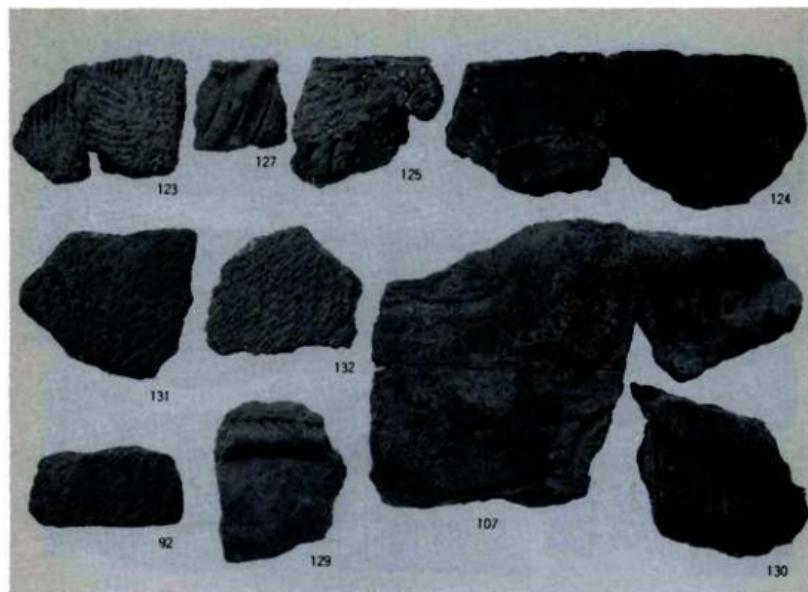


出土遺物13

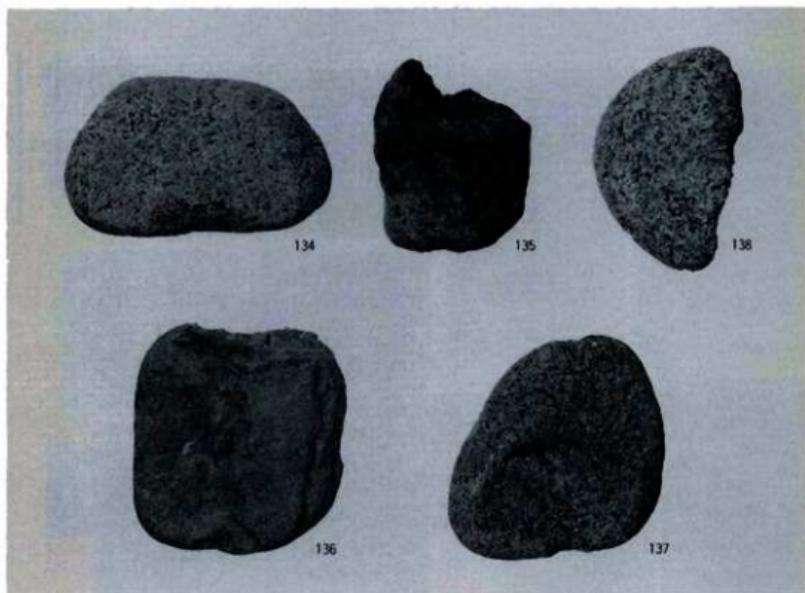


出土遺物14

図版十九 本庄町遺跡
遺物15・16

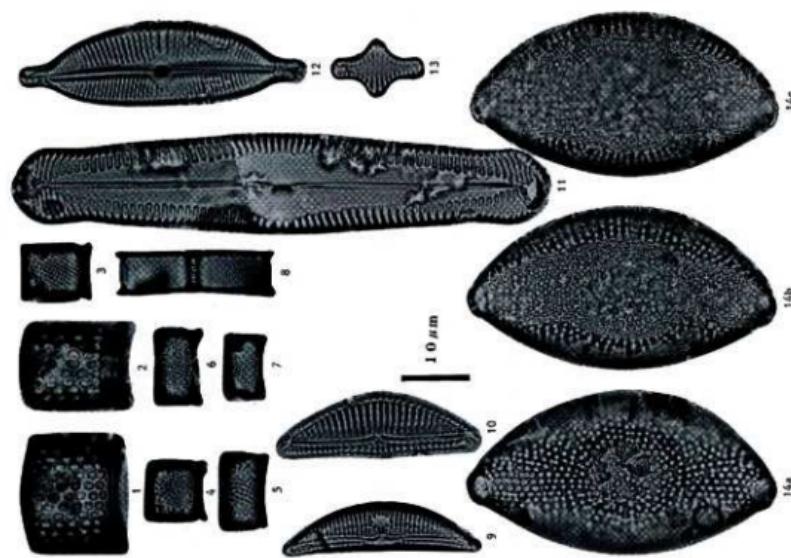


出土遺物15

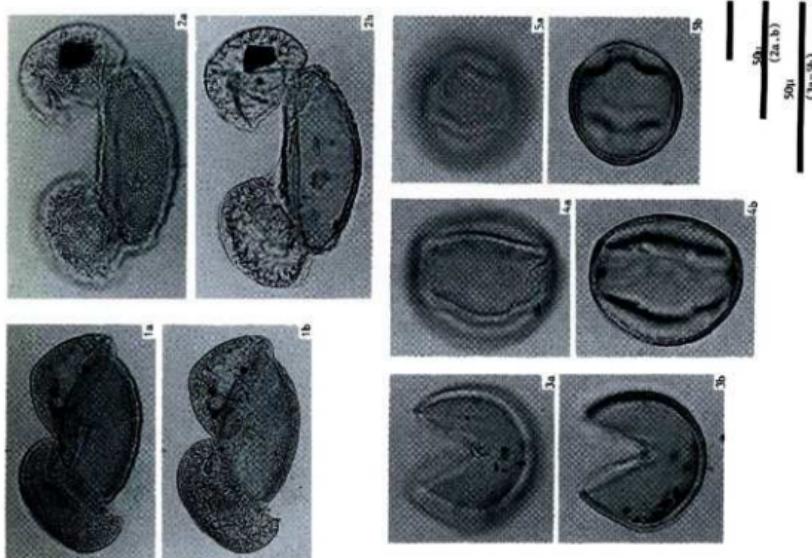


出土遺物16

圖版二十
本庄町遺跡
珪藻・花粉

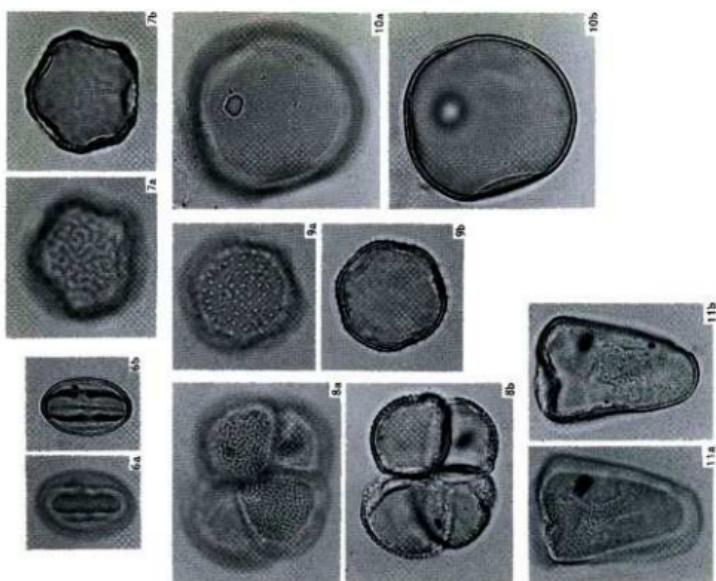


1. *Aulacoseira granulata* (Ehr.) Simonsen 7. *A. distans* (Ehr.) Simonsen 12. *Cymbella naviculiformis* Auerwald
 2. *A. granulata* (Ehr.) Simonsen 8. *A. distans* (Ehr.) Simonsen 13. *Ergagkia constricta* (Ehr.) Grunow
 3. *A. ambigua* (Grun.) Simonsen 9. *Asperifera ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V. Heurck 14a. *Bidulphia curta* (Lynch.) Brebisson And Goodey
 4. *A. ambigua* (Grun.) Simonsen 10. *Cymbella striatocostata* Bleek
 5. *A. distans* (Ehr.) Simonsen 11. *Pinnularia gibba* var. *dissimilis* H. Kobayasi 14b. *B. curta* (Lynch.) Brebisson And Goodey
 6. *A. distans* (Ehr.) Simonsen 14c. *B. curta* (Lynch.) Brebisson And Goodey



1a-b モミ属 ①層 3a-b スギ属 ①層 5a-b アカガシ亞属 ①層
 2a-b マツ属複維管束亞属 ①層 4a-b コナラ亞属 ①層

50



6a-b クリ属 シイノキ属 ①層 8a-b ガマ属 ①層 10a-b イネ科 ①層
7a-b ニレ属 ケヤキ属 ①層 9a-b オモダカ属 ①層 11a-b カヤツリグサ科 ①層



■
50



- | | | |
|-----------------------|-------------------------|----------------------|
| 1 イネ族イネ属(茎身梗動細胞由来) | 5 タケ亞科ネザサ節(茎身梗動細胞由来、側面) | 8 ウシクサ族(茎身梗動細胞由来) |
| 2 イネ族イネ属(葉部短細胞由来) | 6 タケ亞科ネザサ節(葉部短細胞由来) | 9 ウシクサ族ススキ属(葉部短細胞由来) |
| 3 キビ族キビ属(葉部短細胞由来) | 7 ヨシ属(茎身梗動細胞由来) | 10 イチゴツナギ亞科(葉部短細胞由来) |
| 4 キビ族エコログラフ属(葉部短細胞由来) | | |

兵庫県文化財調査報告 第92号

—郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

本庄町遺跡

平成3年3月30日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

電話 (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 水山産業株式会社

〒653 神戸市長田区二番町3丁目4-1

電話 (078) 577-3757(代)